年報 京都大学フィールド科学教育研究センター

Annual Report

Field Science Education and Research Center,
Kyoto University

No.3 2005

年　報

京都大学フィールド科学教育研究センター

第３号

2005

目　次

1. フィールド研活動の記録

(1) 主な取り組みについて紹介 …… 1
　1) WakWak プロジェクト …… 1
　2) 第 6 回国際異体類生態学シンポジウム …… 3
　3) 森里海連環学－森は海の恋人か？－，海域・陸域統合管理論 …… 5
　4) 21 世紀 COE プログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」 …… 9
　5) 公開臨海実習 …… 11
　6) 少人数セミナー（ポケゼミ） …… 13
　7) 全日空「私の青空・森づくり活動」 …… 37
　8) 京の子ども夢大使（大志） …… 39
　9) 芦生公開講座 …… 40
　10) 第 2 回時計台対話集会 …… 43
(2) 外部資金の導入 …… 47
(3) 2005 年度　フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み（日記） …… 49

2. 各施設における活動の記録

(1) 北海道研究林 …… 54
(2) 和歌山研究林 …… 54
(3) 上賀茂試験地 …… 55
(4) 舞鶴水産実験所 …… 56
(5) 瀬戸臨海実験所 …… 57
(6) 各施設　学生実習等調べ …… 58

3. フィールド研教員の活動の記録

(1) 新人紹介 …… 64
(2) 研究成果 …… 65
(3) 学会と社会における活動 …… 82
(4) 国際活動 …… 88
(5) 教育活動 …… 92

4. 資　料

(1) 職員配置表 …… 97
(2) 常設委員会名称及び委員一覧 …… 98
(3) 新聞記事等一覧 …… 99
(4) 各施設　利用許可数一覧 …… 104
(5) 各施設　利用人数一覧 …… 104
(6) 人事異動 …… 105

1. フィールド研活動の記録

（1）主な取り組みについて紹介

1）WakWak プロジェクト

沿岸資源管理学分野　上野正博 助手

2004 年春，とにかく走り始めてみようとスタートした「若狭湾河口域プロジェクト（WakWak プロジェクト）」は，初手から相次ぐ台風の来襲という手厳しい洗礼を受けることになった。6 月 11 日に大阪に上陸した 4 号を皮切りに，6，10，11，15，16，18，21，22 号と立て続けに近畿地方に接近し，8 月中旬以降はほぼ 10 日に一回の定期便となり，調査予定はしばしば大幅な変更を余儀なくされた。

極めつけは 10 月 20 日に上陸し，近畿北部に 50 年ぶりの大水害をもたらした 23 号台風。マスコミはバスの屋上に取り残された乗客が救助されるや，この台風で絵になるのはここまでといわんばかりに引き揚げてしまった。しかし，道路は至る所で崩れ水没しており，舞鶴水産実験所の教職員の自宅も浸水したり孤立したり，私が暮らす綾部市やお隣の旧大江町では街の全域がほぼ孤立して，スーパーやコンビニの食料品売り場は空っぽ。帰宅できずに車中で仮泊した人も沢山いた。

そのような状況にもかかわらず，テレビで流れるのはバスの屋上からの救出劇のリプレイばかり。バスの屋上を撮影しているヘリコプターからの映像には，たくさんの孤立した集落や家屋が写っていたのだが，それらはすべて無視されたのである。常日頃，危機管理状況下での情報伝達の必要性をあれほど声高に指摘し，その主役は我々だと公言してやまないテレビ局の実態とはこのようなモノである。本稿の趣旨とは関係ないのだが，どこかに文章として残しておかねばとあえて記す次第。

台風 23 号によって，WakWak が調査対象としていた河川の内，若狭湾西部に流れ込む由良川・伊佐津川・野田川は大氾濫し，東部に流入する佐分利川・北川・南川でも大増水が生じた。このため，これらの河川ではバイカモやオオカナダモなどの大型沈水性水草はもとより，岩石の表面などに付着する藻類や微生物膜もそのほとんどが流失した。翌 2005 年は，源流域で発生した土石流や地滑りによって河川内に堆積した土砂の除去や河岸の流失あるいは損傷箇所の補修などの災害復旧工事が本格化した。河道内をパワーショベルやブルドーザーが走り回り，工事によって発生した濁りは河口にまで達し，川底は広い範囲に渡って泥に覆われた。また，この年は前年とはうってかわって夏季の長期間にわたり渇水が続いた。このために川底に堆積した泥はほとんど洗い流されることが無く，2006 年春の時点でも広範囲が泥に覆われた状態が続いている。

結局，この 2 年間の調査研究は洪水で増水・氾濫した後の特殊な事例の記録を積み重ねることに終始した感がある。しかし，そのような状況の中でもいくつかの興味深い知見が得られた。2004 年度に行った由良川河口地先における大型底棲生物の食物網解析では，底泥中に多量に含まれる陸起源有機物が海洋生態系ではほとんど利用されていないことが明らかになった。すなわち，海底に堆積する陸域起源の有機物は微生物による分解過程を経なければ，海洋生態系で利用されない可能性が強く示唆された。

また，胃内容物調査では二枚貝，巻き貝，甲殻類などいろいろな餌を利用しているように見えるモミジガイ属のヒトデ類は，魚食性魚類よりも高い窒素安定同位体比を示し，浅海域の底棲生物群集中では最高位の食物段階にあった。このことは，モミジガイ属が腐肉食であるウミホタルなどの甲殻類に強く依存していることを示唆する。同属のヒトデ類は浅海域においてしばしば圧倒的な優占種となるが，その動態の解明には甲殻類の動態についての知見が不可欠であることが明らかになった。

2005 年度には，若狭湾に流入する野田川，伊佐津川，耳川において付着藻類相の比較を行った。その結果，付着藻

類相は河川間で大きく異なり，河川環境の良い指標となる可能性が示唆された。付着珪藻類の組成により河川環境を分類する試みは既に行われているが，今回の研究ではより判別が容易な藍藻類，珪藻類，緑藻類の構成比だけでも河川間での違いは明瞭であり，より簡便な環境判定方法の開発につながることが期待される。

また，伊佐津川において行った両側回遊性エビ類の生態調査では，降海したエビ類幼生の分布域が予想以上に狭く，河口部に形成される汽水域の海側には拡がらない可能性が示唆された。このことは，両側回遊性生物は降海することで分布域を拡大する生活史戦略をとるとする従来の仮説の再検討が必要であることを意味する。

若狭湾河口域プロジェクトから若狭湾海域・陸域統合プロジェクトへ

以上のように，この 2 年間で得られた成果は必ずしも十分な物ではない。しかし，森里海の連環を研究するための方向性を定めるためには，貴重な示唆に富む内容であった。2006 年からは由良川本支流を主要なフィールドとして，①地形，土地利用，植生，一般水質項目などの既往資料に基づく単位流域の類型化を行い，②河川水と堆積物の安定同位体解析による類型化や③付着藻類，川エビ類を中心とした生物群集組成などと対比することで，④河川の健全さについての指標を検討し，特に⑤河口域の生態系と生物生産の健全性を診断し，河口域環境を保全・修復するための科学的な知見を整備する。

一方，里海の豊かな生物生産は陸域から流入する物質により支えられているが，その機序についてはよく分かっていない。そこで，⑥由良川感潮域から大陸棚縁辺部までの底棲生物群集について安定同位体比を用いた食物網解析によって，陸域起源有機物のフローについての知見の集積に努める。また，⑦プランクトンや稚仔魚など浮遊生活を送る生物についても同様の解析を行い，両方の知見を総合して陸域起源物質の海洋生産に対する貢献度を評価する。

したがって，WakWak の愛称は従来の河口域に限定されたプロジェクトから，海域と陸域を統合する幅広いプロジェクトに発展的に継承される。

2）第６回国際異体類生態学シンポジウム

河口域生態学分野　田川正朋 助教授

京都大学フィールド科学教育研究センターの主催（大会委員長　田中　克：事務局長　山下　洋）により，2005 年 10 月 20 日より 25 日まで，舞鶴市舞鶴商工観光センターにおいて標記シンポジウムを開催した。

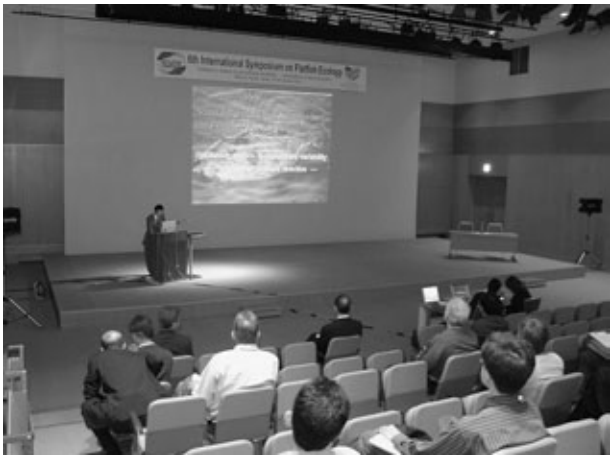
これまで 1990 年より計 5 回の国際異体類生態学シンポジウムが 3 年おきに開催されてきた。第 6 回に当たる本シンポジウムは，「生息域と加入の可変性－異体類生態学の未来を拓く－」と題し，過去のシンポジウムにおいて得られた異体類の生物学・生態学の進歩を近年の異体類生産量の低下や生息域の悪化と関連させた上で，我々の基礎的あるいは応用的な知見を次なる段階へと大きく飛躍するために徹底的に統合することを試みた。参加者は 21 カ国から 137 名が集まり，実質的に国際シンポジウムの名に恥じないものとなった。発表数も，キーノート講演 8 題，一般口頭発表 44 題，ポスター発表 73 題と，これまで開催された中で最大規模のシンポジウムとなった。また学生による発表にはベストプレゼンテーション賞を決定した。その結果，ベスト口頭発表は米国の Andrew Seitz 氏が，ベストポスター賞は日本の Toshihiro Wada 氏がそれぞれ受賞した。

エクスカーションは，宮津ルート（宮津栽培漁業センター）と小浜ルート（小浜栽培漁業センターと福井県立大学臨海実験所）の 2 ルートを実施した。当日はあいにくの雨模様ではあったが合計 53 名が参加し，日本の有する最先端の種苗生産技術を見てもらうことができた。バンケットでは，鏡開き，刺身あてコンテストなどもあって和やかな盛会となり，参加者同士の親睦を深める良い機会を提供することができた。

併せて舞鶴市民向けの公開講演会をシンポジウム期間中に実施した。John S. Burke 博士（NOAA ブフォート研究所），田中　克 教授（フィールド研），および畠山重篤 氏（カキの森を慕う会・フィールド研）の 3 名が講演を行い，会場との質疑応答が活発になされた。また，小池正孝 氏による割り箸で作った魚介類彫刻の個展を併設した。これらに対する舞鶴市民の関心も高く，120 名の参加者を得ることができた。

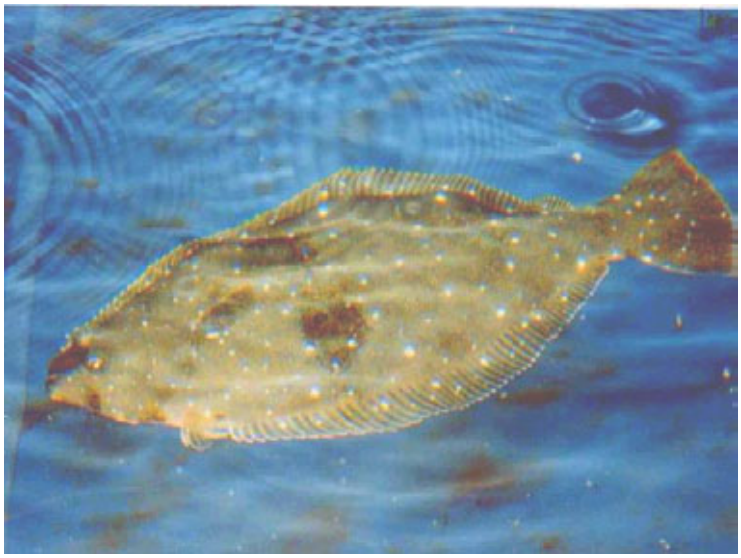
本シンポジウムではシンポジウム当日に全参加者に配布を行ったプログラム・講演要旨集 1 冊に加えて，プロシーディング集を発行する予定である。現在で 50 を超える原稿がプロシーディング編集局へと送られてきておりピアレビューを受けている。審査に通った原稿を集めたプロシーディング集は，海洋生態学の中心的な国際誌の一つである Journal of Sea Research の 44(1/2) 45(3/4) に，特別号として発行されることが決定されている。

本シンポジウムおよび関連行事が新聞に掲載された回数は，朝日・毎日・京都等，計 11 回に及ぶ。これらは，日本において海洋生物生態学および海洋資源への関心が高いことの一つの表れと理解することができるが，本シンポジウムがこういった状況にとって正にタイムリーかつ適切なテーマ設定のもとに企画されていたと判断している。



6th International Symposium on Flatfish Ecology

Habitats in relation to recruitment variability - Generation of future direction -



第6回国際異体類生態学シンポジウム「生息域と加入の可変性 ー異体類生態学の未来を拓くー」

2005年10月20日（木）～10月25日（火）

会場　京都府　舞鶴市商工観光センター

主催　京都大学フィールド科学教育研究センター

共催　21世紀COEプログラム　昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生
（京都大学農学研究科・フィールド科学教育研究センター）
21世紀COEプログラム　海洋生命統御による食料生産の革新
（北海道大学水産科学研究科）
京都大学教育研究振興財団，舞鶴市，水産海洋学会

後援　社団法人全国豊かな海づくり推進協会，独立行政法人水産総合研究センター
日本魚類学会，日本水産学会

■発表申込締切　2005年4月30日　申込方法については下記ホームページをご覧下さい
http://www.stock-enhancement.marine.kais.kyoto-u.ac.jp/FF6/top.htm

■セッションとキーノートスピーカー：

1. 成魚と未成魚の産卵場と摂餌場
   Breeding and feeding habitats for adults and preadults: Dr.Kjesbu,O.S.
2. 卵および仔魚の浮遊生息域
   Pelagic habitats for eggs and larvae: Dr.Watanabe,Y. & Dr.Geffen,A.
3. 稚魚の沿岸成育場
   Coastal nursery habitats for juveniles: Dr.Able,K.W.
4. 漁業・栽培漁業・資源管理
   Fisheries / stock enhancement / management: Dr.Stottrup,J. & Dr.Rijnsdorp,A.D.A.
5. 養殖・生理
   Aquaculture / physiology: Dr.Yamaha,E.
6. 環境・人為的影響
   Environment / anthropogenic impacts: Dr.Secor,D.H.

各セッションともにポスター発表を併設する

■大会事務局：

〒606-8502　京都市左京区北白川追分町　京都大学フィールド科学教育研究センター
第６回国際異体類生態学シンポジウム実行委員会（田川正朋）
Fax　075-753-6229
電子メール　ffsympo1@kais.kyoto-u.ac.jp

FSERC　Field Science Education and Research Center Kyoto University

3）森里海連環学－森は海の恋人か？－，海域・陸域統合管理論

舞鶴水産実験所長　山下　洋 教授

平成 17 年度後期開講の全学共通科目として，全学部の 1 回生から 4 回生を対象に，「森里海連環学－森は海の恋人か？－」と「海域・陸域統合管理論」を提供した。前者は金曜日 3 時限目，後者は 4 時限目に同じ教室で連続して開講する形式をとった。「森里海連環学－森は海の恋人か？－」では，森から海までの生態系の健全なつながりと分断に関する問題点を中心に講義が行われた。引き続く「海域・陸域統合管理論」では，3 時限目の「森里海連環学－森は海の恋人か？－」を基礎に，人間生活によって森から海までのつながりが分断され，破壊された環境をどの様に修復，再生するかについて，経済や法律的視点も含めて講義が行われた。講義の最終日である 1 月 27 日には，ふたつの講義の枠を取り払って，両講義の学生と教員が合同で討論するパネルディスカッションを行った。これに加えて，両講義に参加している学生やその他の大学院生などを対象に，この分野の第一線において活躍する研究者を招待して，「海域・陸域統合管理論セミナー」を 4 回開催した。なお，「海域・陸域統合管理論」および「海域・陸域統合管理論セミナー」は，日本財団助成調査研究事業の助成を受けて実施された。

1. 森里海連環学－森は海の恋人か？－

（1）森の生態　－　竹内典之（フィールド研教授）
（2）里の生態　里山　－　柴田昌三（フィールド研助教授）
（3）森里海間の物質循環　水と土砂　－　中島　皇（フィールド研講師）
（4）森里海間の物質循環　栄養塩　－　徳地直子（フィールド研助教授）
（5）森里海間の物質循環　ミネラル成分　－　中野孝教（地球研教授）
（6）森里海の連環と経済　－　浅野耕太（人間・環境学研究科助教授）
（7）森の恵みと海の恵み　－　畠山重篤（牡蠣の森を慕う会代表）
（8）河口域の生態　－　田中　克（フィールド研教授）
（9）沿岸海洋域の生態　－　白山義久（フィールド研教授）
(10) 河口域の物質循環　栄養塩　－　藤原建紀（農学研究科教授）
(11) 里海の生態と保全　－　山下　洋（フィールド研教授）
(12) 流域環境における人間・自然相互作用系の研究　－　吉岡崇仁（地球研助教授）
(13) パネルディスカッション『森里海の連環と統合的管理』

2. 海域・陸域統合管理論

（1）-（3）沿岸海洋学の基礎　－　白山義久（フィールド研教授）
（4）-（6）森里と沿岸海洋との連環　－　竹内典之（フィールド研教授）西村和雄（フィールド研講師）
（7）-（8）森里海の持続的な経済マネジメントシステム－有路昌彦（アミタ株式会社持続可能経済研究所主席研究員）
（9）-(10) 沿岸管理と法律　－　磯崎博司（明治学院大学教授）
(11)-(12) 統合的沿岸環境管理論　－　松田　治（広島大学名誉教授）
(13)　パネルディスカッション『森里海の連環と統合的管理』
パネラー　松田　治（広島大学名誉教授）：瀬戸内海の環境管理と再生
長坂晶子（北海道林業試験場研究員）：森林の管理と河川・河口域の環境

3. 海域・陸域統合管理論セミナー

第 1 回：10 月 14 日（金）

谷内茂雄（総合地球環境学研究所助教授）

「流域管理からめざす地球環境学－琵琶湖・淀川水系における研究活動をもとに－」

第 2 回：1 月 13 日（金）

中田英昭（長崎大学教授，水産学部長）

「沿岸環境の再生に向けて－「有明海異変」に学ぶ－」

第 3 回：2 月 27 日（月）

室田　武（同志社大学経済学部教授）

「生命を支える海陸間の物質循環－サケの母川回帰からの考察－」

依光良三（高知大学農学部名誉教授）

「深刻化する森・川・海をめぐる課題－高知県を事例として－」

第 4 回：3 月 17 日（金）

恩田裕一（筑波大学生命環境科学研究科助教授）

「人工林の荒廃が下流環境に及ぼす影響」

中村太士（北海道大学農学研究科教授）

「陸域・水域エコトーンにおける生物生息場形成と生活史戦略－人為的影響とシステムの再生をめざして－」

向井　宏（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授）

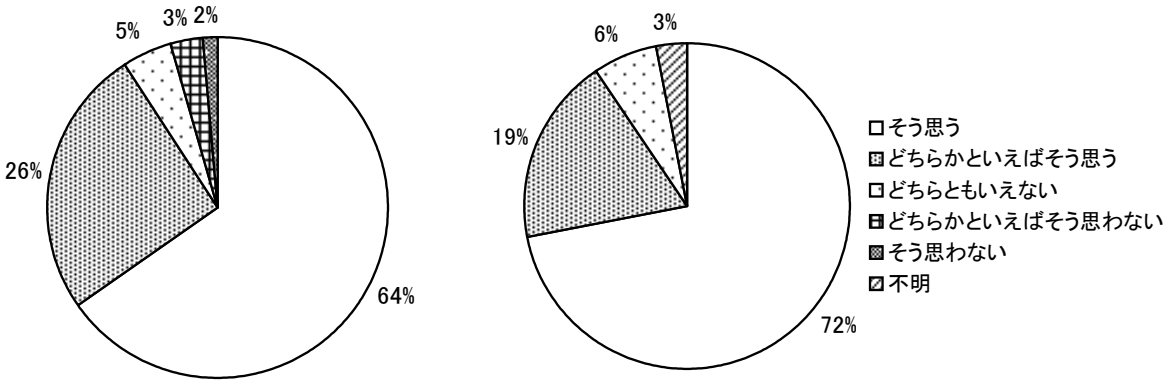
「陸域の利用形態と河川・沿岸環境」

全学共通科目
「森里海連環学－森は海の恋人か？－」「海域・陸域統合管理論」に対するアンケート

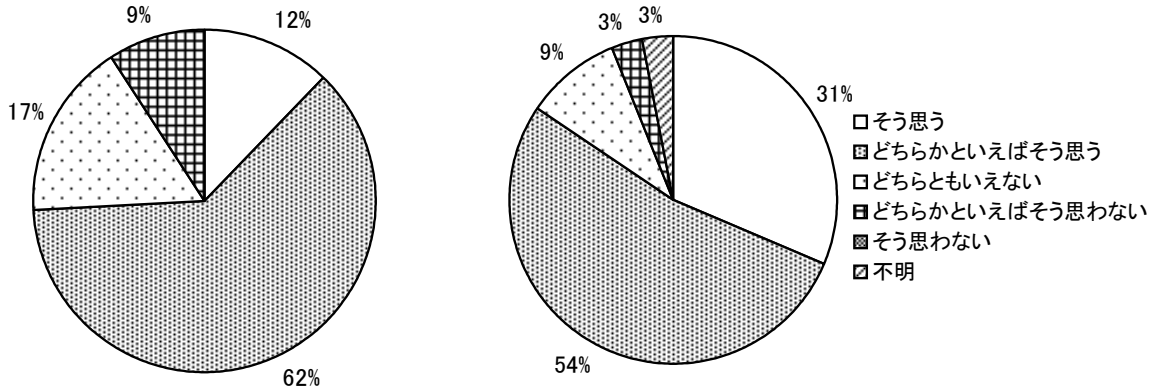
このアンケートは，フィールド科学教育研究センターのリレー講義を今後より充実したものにしていくため，学生の率直な意見を求めたものである。有効回答者数は，森里海連環学：66 名，海域・陸域統合管理論：32 名である。以下，原則として設問ごとに，集計結果をグラフで表示し，百分率を添えた。

森里海連環学　　**海域・陸域統合管理論**

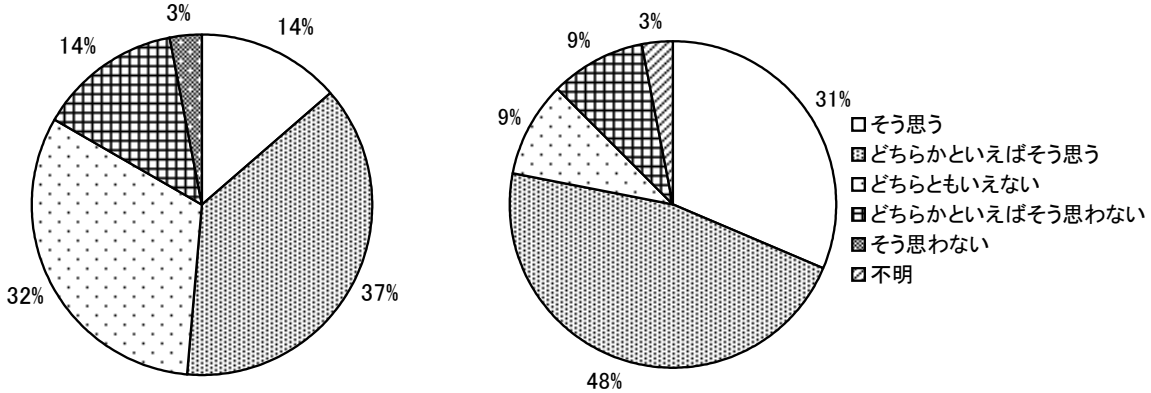
・この授業にはほとんど出席した



・この授業の内容はよく理解できた

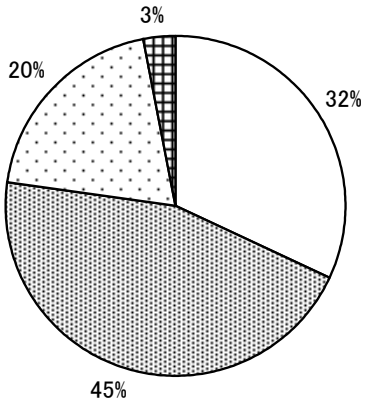


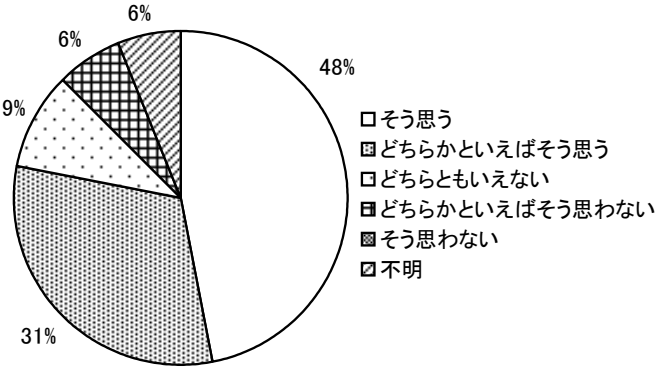
・この授業は体系的であった



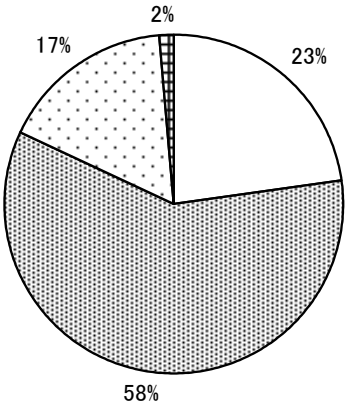
森里海連環学　　**海域・陸域統合管理論**

・この授業で知的に刺激された

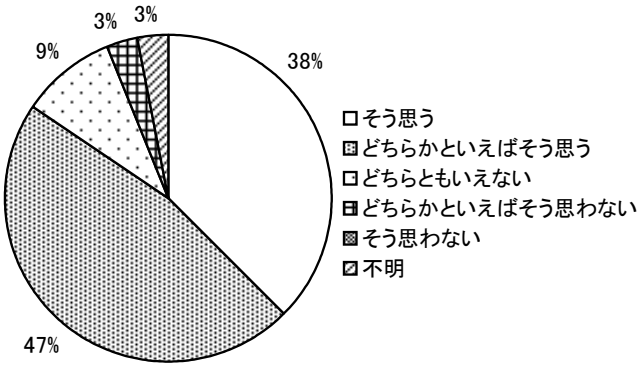




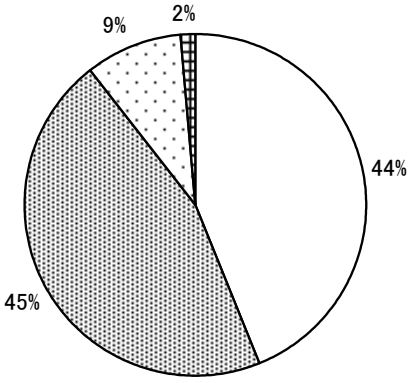
・この授業で森から海までのつながりの機構と問題点がよく理解できた

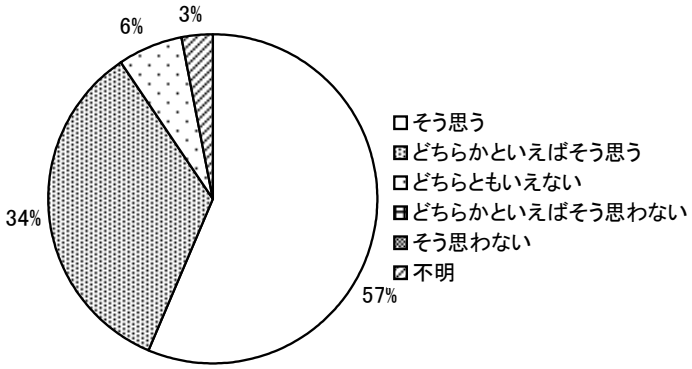


・この授業で国土の環境管理に関する問題点がよく理解できた



・この授業は自分の学習にとって有益であった





4）21 世紀 COE プログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」

上賀茂試験地長　中島　皇 講師

このプログラムは 2004 年度に採択され，今年度が 2 年目になる。教育面では，1. 優れた専門家でありながらも，分子生物学から生態学まで幅広い視野を持ち，現場に立脚した問題解決ができる人材の輩出。2. 食料問題や環境問題など人類の課題の解決に際して，対症療法的な戦術的対応のみならず，戦略的対応ができる人材の輩出。3. 広い視野と高度な専門性を合わせ持ち，国際的舞台で独自の意見を発信できる人材の輩出を目的に掲げ，国際シンポジウムや昆虫科学セミナーなどが精力的に開催されている。フィールド科学教育研究センター（フィールド研）では田中克教授（センター長），竹内典之教授，益田玲爾助教授，中島皇講師が事業推進担当者としてプログラムに参加し，その他の教員はその活動を積極的にバックアップしている。プログラムの目玉の一つにフィールド研の多彩で特色あるフィールドを活用した大学院生への教育プログラムの実施が挙げられており，フィールドで現実の物を見て，感じ，考えることに一つの重点が置かれている。

2005 年度には 3 回の昆虫 COE フィールド教育プログラムが行われた。

芦生研究林では 7 月 9－10 日の一泊二日で，「芦生の森の樹木をめぐる植食者たち」と題したフィールドトリップが行われ，森林生物学分野とフィールド研の教員・大学院生が案内を担当した。異分野にまたがる融合的な研究が促進されることが期待されている COE プログラムにおいて，まずは異分野の事情を知ることが第一歩になるとの考えから，最前線で研究を進めている教員や院生による調査現場で，樹木の成長・繁殖様式，ナラ枯れの原因になっているカシノナガキクイムシ，ツキノワグマやニホンジカによる樹木被害，天然林大面積調査区（モンドリ谷：16ha），樹冠観察用タワー，量水堰と物質移動などの研究の解説が盛り沢山に行われた。参加者からは，普段実験室の中で研究をしている人たちにとって大変新鮮なものであったとの感想が寄せられた。学生参加者は 16 名で，スタッフを含めると 28 名であった。

上賀茂試験地では 9 月 12－14 日の日程で，大学院生による「昆虫科学とフィールド研究シンポジウム」（秋の京都で語り合おう in 上賀茂試験地）が開催された。上賀茂試験地は大学から自転車でも通える距離にあり，学生・教員を含めて 128 名（のべ数）の参加があった。企画はフィールド研の森林系が担当した。基調講演を総合地球環境学研究所の日高敏隆所長にお願いし，昆虫・動物・植物・環境の専門の先生や上賀茂試験地を利用して研究をしているポスドクや博士課程の大学院生が話題提供の講演を行った。司会はフィールド研に所属する 2 人の大学院生が勤め，彼らは学生実行委員として裏方の立場も経験した。2 日目の午後には，外部からの参加者（他大学を含む）を加えて，昆虫と環境に関連するポスターセッションが行われた。各自の研究を異分野の人たちに分かり易く紹介することを目的としたこのセッションでは，参加者どうしの熱心な議論が交わされ，有用な情報交換が行われた。最後に，参加者全員による投票によってポスター賞が決定され，優秀者には拠点リーダーの藤崎憲治教授からオリジナルの賞状と賞品の図書券が手渡された。3 日目は試験地見学会が実施された。多くの参加者の感想は，このような機会があれば是非参加して議論をしたいというものだった。

紀伊大島実験所・古座川流域・瀬戸臨海実験所では 11 月 18－21 日に，「古座川塾」が開催された。このプログラムはフィールド研の紀伊大島実験所・瀬戸臨海実験所のスタッフが中心になって実施された。副題には「－フィールドから未来型食料環境学を考える－」がつけられている。学生諸君が今後の研究の新たなモチベーションを得られるきっかけにすることを目的として，京都から貸し切りバスで 6 時間，太平洋を望む本州最南端でこのプログラムは開始された。第一線で活躍する研究者の講演やフィールド実習が行われると同時に，古座川流域を題材とした公開シンポジウムが日程中に開催され，地域の人や一般の人との交流があり，また最終日には白浜の臨海実験所の見学などを行い，密度の濃いフィールド教育プログラムであった。参加者は，現場（フィールド）で起こっている現象とその問題の難しさや森里

海が不可分に繋がっていることを実感し，自分自身の研究にとっての大きな刺激を受け，物事をいろいろな面から見る大切さを学んだようである。

3 回の教育プログラムは，総合的視野を持った人材の育成では，高度な専門知識とともに分野を横断する洞察力や総体的な視点が不可欠であるため，実地体験を行い，フィールドで考えることが最も良い方法であることを実感させるものであった。

最後に，プログラムの実施にはフィールド研の教職員の積極的な応援が不可欠であったことを記しておく。また，詳しい内容は昆虫 COE のホームページ（http://www.21coe-insect.kais.kyoto-u.ac.jp/news/index.html）に News Letter の第 2，4，6 号として載せられているのでご参照頂ければ幸いである。

芦生研究林

上賀茂試験地

古座川塾

ポスターセッション

5）公開臨海実習

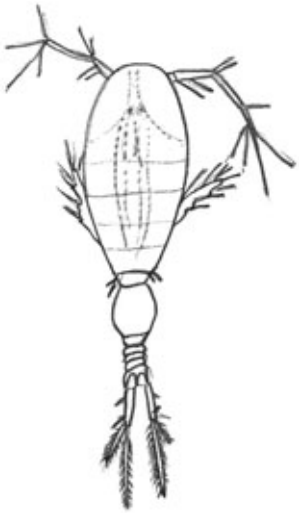
海洋生物系統分類学分野　久保田　信 助教授

和歌山県白浜町に所在する瀬戸臨海実験所で実施の公開臨海実習（2005 年度）に，北は信州大学から南は琉球大学まで，京大生も含めてほぼ定員いっぱいの 18 人が受講した。実習船ヤンチナ 3 に乗ってベントスやプランクトンをサンプリングし，光学顕微鏡を用いての形態観察と分類，番所崎の磯浜での各種生物の形態や生態などの観察，漁港で入手したやや深みからの漁獲物の所属調べや解剖による内部構造観察，水族館の飼育展示動物の形態と行動の観察，分子系統学的アプローチなどメニューを色々取り揃え，教員全員と教務補佐員や TA の協力での多岐にわたる実習だった。

「この広い田辺湾全体で考えると，本当に膨大なバイオマスが存在すると実感」;「これほど多様な水生無脊椎動物を生み出している生態系・物質循環に興味が湧いた」;「行動など生きている姿を間近に見られてよかった」;「海にこんなにも生物たちがいて魚などの食料になるのだと思うと有り難みを感じる」などの感想はどれもレポートの一部だ。

たとえばプランクトン実習だけをとってもこの紙面で紹介しきれないほどの成果があがる。一例だが，終生プランクトンの甲殻類が多く採取され，「すばしこいカイアシ類がもしもヒトサイズだったら恐ろしく速くて怖い存在だろう」;「今回の海産プランクトンには，淡水プランクトンに見られないような種類や形態が多様にあり，興味深く，とてもいい機会となった」;「淡水では普通だが，海洋特産のミジンコも採取された。産地を知らせないで初めて見せられれば淡水産と間違うだろう。このエボシミジンコは名前の通りの外形だが，不思議なことに雄なしで雌体内で作られた卵が次々と発生し一人前のミジンコに成長できる単為生殖をするのが不思議」。

垣間見たプランクトンの世界だけでも，地球の一員として彼らとの共存の意義が若い彼らの心に多少とも育っただろう。ましてや，自然が豊かで教育にうってつけの場所である南紀白浜での，様々な生態群や分類群を扱う実習は，今後の彼らの一生の基礎になったはずである。瀬戸臨海実験所では数々の海洋生物や環境に関わる実習を実施しているので是非とも参加し，人生の糧や指針づくりにして頂きたい。



図の説明．学生たちのプランクトンのスケッチより

1. 海洋の食物連鎖で重要な輪の一つであるカイアシ類　　2. 体内に単為発生卵をかかえたエボシミジンコ

平成 17 年度　公開臨海実習（春期）実施案内

1. 実習題目：無脊椎動物の多様性と進化
2. 担当教員：瀬戸臨海実験所教員
   白山義久（教授）・久保田 信（助教授）・宮崎勝己（講師）
   大和茂之（助手）・深見裕伸（助手）
3. 実習期間：平成 18 年 3 月 26 日（日）～4 月 1 日（土）
4. 所要経費：交通費の他，滞在費（宿泊費・食費等）として約 15,000 円
5. 実習内容：
   海産無脊椎動物について，できるだけ多様な動物門を採集・観察し，特定の分類群について系統関係を解析して進化の過程を推定する。
   この目標を達成するため下記のように実施する。

Ⅰ．フィールドでの採集調査
1）研究船ヤンチナⅢに乗船し，ドレッジ・採泥器を用いて海底堆積物を採取し，試料から 1 mm 以下のメイオファウナを分別する。
2）研究船ヤンチナⅢに乗船し，プランクトン採集
3）実験所周辺あるいは畠島の潮間帯で，磯採集
4）南部漁港で，漁獲物採集
5）附属水族館で，飼育展示中の大型動物観察

Ⅱ．分別した動物の形態観察と系統解析など
1）光学顕微鏡を用いた詳細な形態観察
2）分子マーカーを用いた系統解析

6. 必要なもの：筆記用具：（野帳，スケッチ用の鉛筆，レポート用紙）
   船上作業や磯観察で使用：（汚れてよい長袖長ズボン，帽子，軍手，タオル，カッパ）
   あるとよいもの：長靴（実験所の長靴を利用することもできるが足のサイズが合っていて滑りにくいものがあれば持参）・日焼け止め・船酔い止め・図鑑
   ＊洗濯機は 3 台有
7. 実習開催地・問い合わせ先
   〒649-2211　和歌山県西牟婁郡白浜町 459
   京都大学フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所
   電話 0739-42-3515（8：30-17：30 まで）　FAX 0739-42-4518
   実習掛　久保田 信（直通電話 0739 42 4630 ツーツー音の後 52）
   E-mail: shkubota@medusanpolyp.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

・最寄りの駅：JR 紀勢本線白浜駅
・最寄り国道：42 号線
・最寄り空港：南紀白浜空港

6）少人数セミナー（ポケゼミ）

①「京都大学に木造り校舎を造る－都市と森林の再生－」

フィールド科学教育研究センター　田中　克 教　授
竹内典之 教　授
柴田昌三 助教授
地球環境学堂　小林正美 教　授
小林広英 助　手

京都大学フィールド科学教育研究センターが目指す「森と里と海」の連環の再生にとって，森の保全は必要不可欠である。しかし，日本の森は，林業採算性の低下，山村の衰退，林業労働者の高齢化や後継者不足などから，間伐の不実行，伐採跡地への再造林の放棄や竹藪の拡大など人工林を中心に劣化が進んでいる。山村に活気を取り戻し，森の劣化を阻止し，森の保全を推進していくためには，日本文化の重要な位置を占めてきた「木文化の再生」を図り，国産材の需要拡大を進めることが不可欠と考える。本セミナーでは，5 名の教員がリレー式に話題提供をし，受講生諸君と共に考え，議論することによって「木文化の再生」への道を追求することを目的に開講したものである。

提供した話題は，

田中　克 教　授：「森里海連環学創生の現代的意義」,「木文化再生の目的」など

竹内典之 教　授：「日本人と森林の歴史」,「日本林業の問題点」など

柴田昌三 助教授：「日本の里山」,「里山の再生」など

小林正美 教　授：「世界の木造建築」,「木造都市」など

小林広英 助　手：「j.Pod の設計」,「大規模木造建築物の構造」など

である。セミナーは，毎回，フィールド科学教育研究センター北白川試験地内に設置されている j.Pod において実施した。セミナーに参加した学生たちは，日本特有の「木文化」や自らの将来に関わる環境の問題に大いに関心を示し，議論に熱心に参加していた。

また，セミナーの締めくくりとして，日本育成林業発祥の地で 500 年の人工林育成の歴史を有する吉野において 1 泊 2 日（土・日曜日）でフィールド実習を行った。初日の午後には，よく手入れされた（財）阪本奨学会杉谷山林（奈良県吉野郡東吉野村杉谷）の 100 年生余のスギ・ヒノキ人工林や周辺の手入れ不十分な 40～50 年生の人工林を見学した。宿泊は，同奨学会杉谷山林事務所を合宿所として借用した。夕食後の議論は，10 数回のセミナーで得た知識や午後の見学で得た知見をもとに深夜におよんだ。2 日目は，川上村に移動し，250 年生スギ人工林を筆頭に 200 年生前後のスギ・ヒノキ人工林を数多く見学した。とくに 250 年生のスギ大木林には，7～8 世代にわたって守り育てられてきた人と森林の長い歴史を実感し，感動を表していた。

②「森のつくりだすもの」

森林生態保全学分野　徳地直子 助教授

森林はこれまでわれわれの生活を支えてきた木材，燃料という役割に加え，森林の環境創造機能や未解明の生物多様性機能などの新しい役割にも森林の寄与が大きく期待されている。これら森林がもたらしてくれるものについて再考する事を目的として 7 月 26〜28 日にかけて本学 2 名，他大学 3 名の参加者でゼミが行われた。

内容

初日：有田川流域観測，水採取及び解析

中日：天然林，人工林自然観察及び人工林手入れの施業実習

終日：森林土壌調査，土壌採取及び解析

採取した水を分析用にろ過し pH，EC を測定する

森林の持続的利用法（人工林管理の手方や林業が抱えている問題等）を学習する

間伐や収穫の手法を学習し，ノコギリを使った伐倒を体験する

森林土壌の観察と調査手順の説明

③「森林の更新と動態」

森林資源管理学分野　安藤　信 助教授

京都市市街地周辺林，奥山の芦生研究林，その中間に位置する北山・八丁平湿原周辺の天然林・二次林を踏査・調査し，森林の水平・垂直分布，遷移過程の違いに伴う林分構造や種組成の違い，そしてその動態について講義・実習を行った。セミナーは4月〜6月の土・日曜日に行った。

○4月16日（土）午前：森林の更新と動態（講義）：授業の概要と野外調査における注意点を説明した。内容は森林の遷移と更新の違い，階層構造や遷移に伴う種組成や多様性，さらに実習で訪れる森林を紹介した。植物の同定に関する資料を配布した。院生による現在行っている研究の報告があった。
○4月17日（日）：大文字山のマツ林の再生（講義及び実習）：山道から樹木の識別実習を行った。京都市市街地を覆っていたマツ林の「マツ枯れの影響」とその後の森林の遷移について説明した。中腹では国有林との共同研究として始まった「マツ林の更新」試験地を見学し，自然に落下するアカマツ種子による「天然下種更新」とその更新に適した自然環境について解説した。
○4月23日（土）：東山・清水山のシイ林の拡大と種多様性（講義及び実習）：シイなど照葉樹の分布が拡大している東山において，種の多様性の回復を目的とした森林施業について学んだ。
○4月24日（日）：北山・八丁平二次林の林分構造（講義及び実習）：人為的攪乱の程度が異なるいくつかの二次林の踏査を行い，近年のシカによる被害の拡大と，森林の更新に及ぼす地形・人為的攪乱の影響について検討した。さらに八丁平二次林では特異なヒノキ・モミ林分にベルト調査地を設け，調査地設定法について学んだ。
○4月30日（土）〜5月1日（日）：芦生の二次林の林分構造と動態（講義及び実習）：人為的攪乱が少ない芦生研究林における伐採後の年数が20年，45年の2林分における林分構造と更新状況を調査した。院生による現在行っている研究の報告があった。
○6月18日（土）：芦生天然林の林分構造と更新（講義及び実習）：研究林設定以来，85年以上人為的攪乱が記録されていない天然林において，林分構造を把握するとともに，構成種の更新の可能性，天然林における種多様性の維持機構に関して解説した。

本セミナーでは農学部森林育成学研究室の呉初平君，岡田泰明君，生態学研究センターの清水良訓君，農学部森林科学科2回生の阪口翔太君が協力してくれた。

マツ枯れ跡地のアカマツの天然更新：大文字山

伐採後20年を経過した二次林の更新：芦生

④「世界の森林，日本の森林，現在・未来！」

森林環境情報学分野　芝　正己 助教授

京都大学の全学部の一回生を対象として実施した共通科目少人数セミナーの概要を報告する。

“世界の森林，日本の森林，現在・未来！：The Future of Our Forests”の科目名で募集実施した本ゼミは，5月中旬からスタートし，毎月曜日の午後1時から5時過ぎまで5回の講義形式で行った。今回の受講生の内訳は，法学部（1名），工学部（1名），農学部（2名）の計4名であった。授業の目的は，地球規模で問題となっている世界の森林の状況，日本での森林の保全・利用の現状を対比させながら，環境・経済・社会資源としての森林の将来的なあるべき方向を専門の異なる分野の全員で模索議論することである。具体的には，情報化・国際化が進展し，地球規模での環境悪化が世界的な問題になる中で，森林や林業の分野においても，これまでにない新しい知識や情報，技術が不可欠となっている。21世紀に向けて森林を持続的に管理し，その多面的な機能を発揮させるためには，従来の専門領域にとどまることなく，異分野間の連携を図ることが必要であり，そのためにも，隣接する領域やこれまで無関係だと考えられてきた分野についての正確な知識の習得が求められている。本ゼミでは，以下の内容構成で図表や最新の統計資料を駆使して，理系や文系に関係なく全員が理解できるようにわかりやすく解説するよう努めた。

［講義内容の構成］

1：世界の森林とその特徴－諸外国の紹介
2：日本の森林・林業の現状
3：森林の利用と保全のバランス
4：新たな森林の管理－豊かな森へ
5：総括と討論

上記の講義内容を補強するために，今回は以下の二種類の参考書籍も用いた。

① 大田伊久雄他訳：「森林ビジネス革命」（築地書館）
② 小林紀之著：「地球温暖化と森林ビジネス」（日本林業調査会）

成績評価は，出席と課題レポートによる評価に基づいて行った。

⑤「原生的な森林の働き」

森林環境情報学分野　中島　皇 講師

今年度は5月，6月に1回ずつ北部キャンパスで，6月には1dayセミナーを上賀茂試験地で，7月に2泊3日の集中講義（合宿形式）セミナーを芦生研究林で行った。参加者は8名（男4，女4）（学部別：経2，理1，工1，農3，総人1）であった。セミナーの目的は，フレッシュな新入生諸君がフィールド（森林）に出て自ら体験し，自然と人間の関わり方に興味を持つようになることである。

5/20(金)　5限目。フィールド研の大会議室でガイダンス。ゼミの内容と今後の予定及び自己紹介。

6/ 3(金)　5限目。北白川試験地にあるj.Podの涼しい風が通り抜ける教室で，森林の働きについてのゼミ。

6/25(土)　10：00に上賀茂試験地に集合。別に申請のあったNPOの見学者グループと合流して試験地内を見学した。試験地には標本館をはじめ，世界各地から集められた生きた樹木のコレクションや遷移を続ける天然林などの教材があり，実物をじっくり見て回ったことと共に，年配の見学者との会話も印象に残ったようである。見学後は，講義室では各自が持つ森林のイメージについてのセミナーを行った。また，7月の集中ゼミでの献立や買い出しの段取りを話し合った。

毎回何らかのアクシデント？があるが，やはり一人の学生から「前々日アパートの階段から落ちて捻挫したので行けそうもない。」と連絡があった。楽しみにしていたのに残念なことである。

7/16(土)　今年は珍しく？全員無事に広河原のバス停に揃った。芦生到着後，各自持参の昼食をとり，由良川本流沿いのトロッコ道を歩いて植生や地形を見学した。巨大なアシウスギ（台杉）には驚いたようであった。食事はすべて自炊である。買い出しの食材を使ってカレーが出来上がった。夜は，芦生研究林が抱える問題点や環境・自然保護の議論を行った。

7/17(日)　昼食を作って出発。途中，幽仙谷集水域天然林研究区で大面積・長期プロットと暖温帯と冷温帯の境界について説明を受けた。天気はまずまずで，杉尾峠に上がった。日本海の遠望は無理であったが，由良川最初の一滴を確かめた。少し蒸し暑いくらいの原生的な雰囲気を持つ森（但し，最近のシカによる食害のために下草がほとんどなくなっている）を楽しみ，昼食は沢に近い広場で，朝作ったおむすびをワイワイ言いながら食べた。長治谷からは量水堰，大桂，二次林と人工林を観察しながら，途中で飲んだ湧き水は最高だったようである。幽仙谷では天然林からの流出土砂と流出木の大きさと重量を測定した。夏でも鍋が出来るのが芦生の魅力である。味噌鍋の夕食後，TAとして参加の吉野君（森林情報学M2）が話す研究紹介を興味深そうに聞き，質問をしていた。

7/18(月)　計測した流出物のサイズや重量を整理し，レポートにまとめた。また，感想文には，原生的な森林を自分の足で歩き，色々な植物や動物に触れた率直な気持ちが表現されていた。最後に宿舎・食堂の片付けとフィールド研からのアンケートを書いてセミナーは終了となり，芦生研究林の車で広河原バス停まで送ってもらって，京都への帰路についた。

幽仙谷集水域天然林研究区の説明

トチの木のウロに入る（上谷歩道）

⑥「“森は海の恋人”の故郷に学ぶ」

河口域生態学分野　田中　克 教授
森林資源管理学分野　竹内典之 教授

本セミナーはフィールド科学教育研究センターの「社会連携教授」として活躍いただいている畠山重篤さん（牡蠣の森を慕う会代表）の仕事場である宮城県気仙沼市のリアス式海岸の奥にある水山養殖場で行われた。引率は田中と竹内が行ったが，実際上の「指導教員」は畠山さん自身であった。本セミナーには教育学部１名，総合人間学部１名，農学部３名，計５名の学生が参加した。

畠山さんは，かつて 1970 年代〜80 年代にかけて海が汚れ，赤潮プランクトンとして有害な渦鞭毛藻類が繁殖し，カキやホタテガイが死亡したり，まともなカキが作れず，多くの養殖漁業者が廃業に追い込まれるという困難な状況を経験された。しかし，畠山さんはじめ残った漁師さん達は，これは山が乱伐などで荒れたことによると直感し，動かぬ行政に見切りをつけ，自ら山に植林を始めた。1989 年のことである。最初の頃はうまく行かなかった植林も，漁師の熱意に共鳴した森の人達が協力し，今年で 18 年を迎え，毎年 6 月第一日曜日には多い年には千人近くの人々が各地から集まり，植樹祭が開催され，すでに 3 万本を超える広葉樹が育っている。“森は海の恋人”をキャッチフレーズにした植林運動の科学的根拠となったのは，松永勝彦教授（当時北海道大学）のフルボ酸鉄説であった。広葉樹の森に降った雨は腐葉土層を通過する過程でフルボ酸鉄を多く含み，河口域にもたらされ，植物プランクトンの増殖を促進するとの考えであった。しかし，こうした自然のシステムが回復するには数 10 年以上の時間を必要とするが，気仙沼湾に流れ込む大川の水は 10 年もしない間に急速に回復し，再びおいしいカキやホタテガイが戻ってきた。

その秘密は環境教育にあるということであった。畠山さん自身，植林運動は，実は“人々の心に木を植える”活動であると確信されておられるように，毎年ほとんど海を見たことのない 500〜600 人の小学生を水山養殖場に呼び，海の水は塩辛いこと，そしてその中には無数の小さな生きもの（プランクトン）がいることを見せ，その水を皆に飲んでもらうそうである。この経験をした子供達は理屈ぬきに，森（山）での自分達の生活がカキの成育や養殖業の漁師さんの生活に深く関わっていることを直感し，翌日から自分が使う石鹸や歯磨き粉の量を半分にするなどを始める。それを見た親は子供から学び，地域の環境行政を大きく変え，豊かな環境が戻り始めたと考えられている。今では 7 千人を超える子供達が卒業しているという。こうした話を気仙沼湾に注ぐ大川河口域から大川沿いに上流に溯り，随所で“森は海の恋人運動”に関わる，そしてその奥にある海の再生への熱い思いを聞かせてもらった。

実習の中味としては，森は海の恋人運動のシンボル的存在である室根山と周辺の植林現場の観察，砂浜でのスキンダイビングによる海の森としてのアマモ場の観察，砂浜でのソリネットによるヒラメやカレイ稚魚の採集，カキについている多数の生きものの観察，NaGISA プロジェクトの予備調査，湾奥での桁網調査，リアス式海岸の植生の観察，さらには夜のアナゴ釣りと多様な内容であった。その間に畠山さんのいろいろな経験談が加わり，全てが森と川と海のつながりの一部として，自然に素直に私達の心に沁みこんで来た。

このポケゼミは，畠山さん御自身だけでなく，とりわけ奥さんには大変お世話になった。学生の一人が体調を崩した際にも親身になって看病にあたっていただいた。学生のレポートには皆一生の記憶に残る大変貴重な体験であると述べられてあった。特に，将来，別の分野へ進む学生にとっては，大変強いインパクトを与えたようであった。畠山臨海学校を初期の頃に卒業した子供達は親となり，親から子供へと環境意識が伝承されているという。7 千人のうちの 5 人の京大生の行く先が楽しみである。

⑦「有明海にみる生きものたちの危機」

河口域生態学分野　田中　克 教授

本セミナーには，農学部４名，医学部１名，経済学部１名，法学部１名の合計７名の学生が参加した。2005 年４月 25 日（月）に開講し，６月 13 日（月）まで７回の講義や簡単な実験を北白川試験地の j.Pod や研究室で行った。講義では有明海の特異な環境特性（6 m 近くに及ぶ干満差，激しい潮流，著しく濁った水，広大な干潟）ならびにわが国では有明海だけにしか生息しない特産種の生態やその成立の歴史的背景などとともに“有明海異変”と呼ばれる環境の急速な劣化を紹介し，それらの貴重な自然遺産としての価値や人間が生存する上での意義について議論した。

これらの予備的知見の勉強や討論を基礎に，８月 5〜8 日に有明海湾奥部筑後川河口域を中心にフィールド実習を実施した。この実習には，大学院博士後期課程と修士課程の大学院生２名がティーチングアシスタントとして協力してくれた。

初日の午前中には，河口から 23km 上流の久留米市に 1985 年に建設された筑後大堰を見学し，同管理事務所の担当者の方より，大堰設置の目的，構造，機能，環境モニタリングなどの説明を受けた。また多くのダムや堰に設置されている魚道についても見学し，毎年アユの遡上量の計数を行っていることなどの説明を受けた。説明を受けた学生からは，スズキやエツの成魚などはこの堰で止められて上流へ遡上できないのではないかなどの質問が出された。同日午後には，河口点より約 3 km ほど下流のみお筋において，有明海伝統漁法の一つであり，今では操業している唯一の漁師さんの繁網による魚類や甲殻類の採集を体験した。繁網は二本の棒で船を定位させ，船首より扇形に開く網を投入し，下げ潮で流入する魚やエビ類を採集する漁法である。約５分ごとに網を揚げ，入網した魚などを巧みにタモ網で掬い取り，再び網を沈めることの繰り返しである。70 歳代半ばの漁師さんの身軽な身のこなしと力強い操業に学生一同驚いた様子であった。繁網は干潮前に終了し，潮が満ちるのを待つ間，干潟に上がって干潟の動物採集を行った。激しい雨に見舞われながらも，アサリやサルボウの潮干狩り実習に興じた。当日の夜は，「有明海を育てる会」の会長さんの全面的な協力を得て，有明海をこの上なく愛し，いろいろな魚種を対象に漁業をされている漁師さん達 10 名を囲んで懇親会がもたれた。大変なご馳走の有明海郷土料理に感激するとともに，“柳川弁”に苦労しながらも漁師さんからの質問や有明海をなんとか再生するよう頑張って勉強して欲しいとの要望に学生・院生はとてもよい刺激を受けたようであった。

実習２日目は，私達の研究グループが 1980 年以来続けている定点での稚魚網採集実習を行った。上流定点の淡水域から河口域 10km の定点まで濁りの程度や採集される稚魚やプランクトンの様子が大きく異なること，多くのプランクトンの中から目的の仔魚を選び出したり，さらにその胃内容物を調べたり，体力とともに根気のいるフィールド研究の大変さを実感した様子であった。実習最終日は漁業者の多くが“有明海異変”の直接の原因と考えている諫早湾締め切りの現場を視察した。全長７km に及ぶ堤防の建設と干潟の埋め立てなどを直接目の当たりにして，何のために自然をこれほどまでに改変するのか，公共事業のあり方への疑問などを改めて問い直す機会となった。

このゼミに参加した学生からは「今まで環境破壊を漠然と考えていたが，身近なものになった」，「人間と自然環境がどのように共存すべきかを改めて痛感した」，「有明海問題をきっかけに改めて他の環境問題にも目が向くようになった」，「自分が一体これから何ができるかを考える機会になった」，「他学部の学生と寝食をともにし，今後も長く付き合えるきっかけとなった」などの感想が寄せられた。

⑧「海の環境と生物資源」

里海生態保全学分野　山下　洋 教授

平成17年度の受講生は4名，農学部1名，総合人間学部1名，理学部1名，経済学部1名であった。4月から6月にかけて，フィールド研の紹介，海での生物の生産（植物プランクトンによる基礎生産から魚類へ至る生産構造），日本の漁業の現状と問題点，魚介類の発育に伴う形態変化と初期生態，魚介類資源の生産と資源変動機構，沿岸域成育場の役割と問題点，そしてフィールド研がとり組む森里海連環学について詳しく講義を行った。講義にひき続き，7月1日～3日には舞鶴水産実験所において，沿岸資源生物に関するフィールド実習を行った。実習は益田玲爾助教授の「魚類心理学」の参加者と共同で実施した。7月2日に益田助教授，甲斐助手，大学院生松田克洋君（TA）とともに竜宮浜に出かけ，午前中は砕波帯における魚類採集，午後はスノーケリングの練習と水中観察を行った。ソリネット及びサーフゾーンネットを用いた稚魚採集では，マアジ，ボラ，メバル，クジメ，アイナメ，ヒラメ，クロウシノシタなどの稚魚が採集され，水深1mにも満たない浅い砂浜が水産的有用魚類の重要な成育場となっていることを確認した。午後のスノーケリングによる水中観察では，浅海域がいかに豊かな海であるかを実感できたのではないかと期待している。

⑨「森里海のつながりを清流古座川に見る」

里地生態保全学分野　梅本信也 助教授

2005 年 8 月 22 日（月）から 26 日（金）まで，紀伊大島実験所を拠点に清流古座川及び串本湾域において，ポケゼミ「森里海のつながりを清流古座川に見る」が実施された。50 名におよぶ多数の応募者からランダム抽選された 10 名（1 名は急用で取りやめ）が参加した。参加した 1 回生は総人 2 名，法学 3 名，工学 2 名，農学 2 名であった。

14 時定刻集合・点呼確認，開講式，ガイダンスを行った。そのあと，紀伊大島の里域巡検をする予定であったが，天候不順のために予定を変更し，「古座川から串本湾の里域　第 1，2 部」「古座川における水質の歴史的変容」と題するスライド講義を約 3 時間行った。買出し，当番による自炊夕食後，23 日からの実習内容や注意点の説明，調査チーム編成，調査拠点の設定のほか，夜半過ぎまで多様な議論や人生相談が行われた。（夜の議論や諸相談は毎日行われた。）

2 日目以降は，全長 55km の古座川の本流河口域から支流（ダムなし），本流上流域（ダムあり）に至るそれぞれの調査地域にチームごとに移動し，ダムのあるなしと関連させながら，森里海構成要素とその連環を実感しつつ，里域構成要素の詳細な観察と住民に対する聞き取りを行い，データ蓄積とチーム間のデータ共有を図りながら，さらに，教員が与えた共通課題と各自が調査中に設定した自由課題についてのレポート作成をそれぞれ作成した。

提出された 9 人分のレポートは，添付資料や挿入写真と共に膨大な量になった。タイトルは以下のようであった。「清流古座川における里域の実態と地区間の関連」（A4 判 3p），「サンマ寿司とサルから考える里域」（5p），「古座川流域の寿司と水質汚濁から森里海の関連性を見出す」（7p），「人為による里域の変容とサンマ寿司について」（8p），「古座川に見る人と自然のつながり」（6p），「森里海の連環を清流古座川に見る－ダムのもたらしたものと寿司」（8p），「古座川周辺域の食・祭り・民話文化のつながりから里域の維持と形成条件を探る」（16p＋文書資料），「清流古座川を通じて人間を見る＆なれずし in 古座」（4p），「古座川で結ばれた地域の調査」（9p）。いずれも丹念な観察と聞き取りを精確に表現した力作であり，教員が事前に想定していた諸仮説をはるかに超える，大変に興味深い新仮説や考え方が多数提案されていた。

調査を重ねるごとに，参加学生たちの目の輝きが増していくのが大変に印象的であった。夜の諸相談時間帯でも積極性が日に日に強化され，心の交流が濃密となっていった。多くの参加学生が指摘するように，本ポケゼミは 4 泊 5 日の日程では短すぎると判断された。

最終日まで怪我や疾病もなく，整理整頓，レポート提出，閉講式のあと，26 日 13 時に予定通り解散となった。

⑩「魚類心理学入門」

沿岸資源管理学分野　益田玲爾 助教授

昨年度「海辺から学ぶフィールド科学」と題して行ったポケゼミをパワーアップして，上記のポケゼミを開講した。受講者は教育2名，理学1名，医学1名，工学1名，農学5名の合計10名である。4月から6月にかけて，計6回にわたる講義を行ったのち，舞鶴水産実験所において2泊3日の実習を行った。

講義のタイトルは以下の通りである。

第1回　研究の道具としてのスキューバ潜水

第2回　群れ行動の発達心理学

第3回　魚類心理学を栽培漁業に活かす

第4回　魚の行動から海の資源の未来を読む

第5回　回遊魚の行動学

第6回　研究というゲームの楽しみ方

講義は講師自身のデータを中心に1時間弱行い，その後フリーディスカッション，さらに簡単なレポートを書いてもらい，このレポートをもとに次回の講義を組み立てるという構成をとった。一般に，話すことと書くことの両方が得意な人は少ない。そこで，10人の学生が持ち味を活かして参加できるようにと，このような形をとった。

舞鶴での実習は，山下洋教授のポケゼミ「海の環境と生物資源」と合同で行った。7月1日金曜日に学生らが舞鶴に到着し，まずガイダンスを行った。土曜日の午前中は，舞鶴市三浜で調査用ネットによりヒラメやカレイなどの稚魚を採集した。午後はシュノーケリングで砂地や岩場の魚や無脊椎動物を観察した。帰りにスーパーの鮮魚コーナーでも魚類学の講義を受けたのち，夜は実験所の院生らと共にバーベキューを楽しんだ。

翌日曜日には西舞鶴の京都府漁連を見学した。舞鶴実習では甲斐助手，中西助手に加え，大学院生の福西君，松田君他多数の協力を得た。最後になるが，本ポケゼミおよび2004年度の「海辺から学ぶフィールド科学」での講義準備や受講学生とのやりとりが，拙著『魚の心をさぐる』（本年6月刊行）を執筆する上での原動力となった。この場をお借りして受講学生らに感謝の意を表したい。

プッシュネットによる稚魚採集

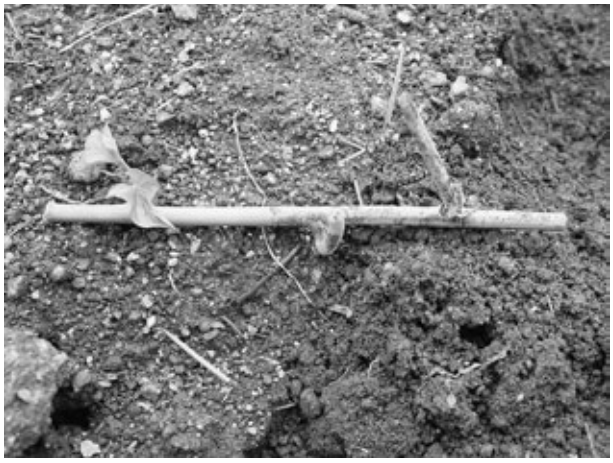
シュノーケリングをマスターした

⑪「有機農業の可能性……持続可能な農業をめざして」

里山資源保全学分野　西村和雄 講師

受講希望者は十人であったが，結局八人となった。平常の受講日時やクラブ活動を避けてゼミは六時半から行うことにし，有機農業の目標・土や作物の健康・おいしい野菜の判別方法などを講義。一方で，北白川試験地の苗畑に全員で畝を立て，サツマイモの苗を五十本定植した。二週間後活着度を見たが，まったく伸びていない苗を数本発見し，不思議に思って詳しく見たら，芋の苗が逆に植えられていた。掘り起こしてみると茎葉が伸びるところがモヤシ状態になっており，出根すべきところが空中にあった。この時点で十本の逆植を発見。その後十三本が見つかり，計二十三本に達した。植え方は詳しく説明したのだが，学生諸君が生物に生で接触する機会がなかったためだと結論した。最後にスーパーへ行き，諸君に野菜の鑑別をしてもらい，持ち帰って食べてみた。判別方法が正確だったことに驚いた様子だった。

逆植えサツマイモの苗の状態



土の中に埋まっていた部分からモヤシ状の蔓が伸びかけている様子

⑫「海洋生物の多様性を探る」

海洋生物多様性保全学分野　白山義久 教授

ポケゼミ「海洋生物の多様性を探る」は，講義と実習を組み合わせたポケゼミである。講義はフィールド研小会議室において，6 回実施し，海洋生物学の基礎となる海洋学の知識と海洋生物に関する基本的事項についての解説を行った。この学習の成果をもって，実際の海洋生物を観察する実習を，7 月 29 日から 8 月 1 日まで 3 泊 4 日の日程で，瀬戸臨海実験所において実施した。実習内容としては，1. アオリイカとマダコの解剖，2. ドレッジによるメイオベントスの採集と観察，3. スキンダイビングによるメガベントスの目視観察，4. 古座川水系の水質分析の 4 項目を実施した。さらに実習の内容に予定はしていなかったが，ちょうど 29 日の夜に飼育していた珊瑚が産卵をしたため，参加者全員で，神秘の瞬間を観察することができた。

本実習の参加者は，3 名（理学部 2 名，農学部 1 名）にとどまった。昨年度 18 名と人数が多すぎたため，今年度はレポート課題を科したことが主たる要因らしい。3 名はいささか少なすぎるので，来年度は参加者の選抜方法に工夫を加えたい。

本実習は，7 月 19 日に協定書を調印した NPO 法人エコロジー・カフェ（エコカフェ）との初の協力事業という位置づけでもあり，会員のべ 17 名が参加した。具体的には，上記実習内容 2 と 4 は，エコカフェの会員も一緒に現場と実験室の作業を行った。

また，実習時間外のアクティビティも多数行い，そのなかでも学生とエコカフェ会員とは，充実した交流をした。特に一日目の夜の BBQ と二日目夜の花火大会の鑑賞において，エコカフェの方々（社会人）と学生との交流は，どちらにとっても有意義なものとなったようである。

学生にはやはり実習の方が講義よりインパクトが強いことがわかったので，来年度からは，実習中心に内容を改めて実施したいと考えている。また，エコカフェとの連携は，学生にとってもよい機会となったので，今後も続けていきたい。

エコカフェにとっては，会員が本当の自然に触れる機会を得たことに満足感があったようである。特に古座川水系の観察とメイオベントスの観察はどちらも普通にはできないものだったため，貴重な体験となり，今後も実習に継続して参加したい意向である。

採集したメイオベントスの観察

全員でヤンチナに乗船しドレッジに向かう

⑬「海岸生物の生活史」

海洋生物系統分類学分野　久保田　信 助教授

8名（理学部2男，農学部5男，医学部1男）の参加で，自然環境に恵まれ風光明媚な白浜町（和歌山県）に所在し，無脊椎動物や魚類の飼育展示で日本でも伝統ある水族館（開館76年）を有する瀬戸臨海実験所の周囲の海岸において，有意義で楽しい実地授業を実施した。主な講義と実習の実施内容は：知られざる無脊椎動物の海洋での多様性の解説と，固定標本をはじめビデオや図鑑での学習：プランクトンの採集と観察（瀬戸臨海実験所研究調査船“ヤンチナ3”で，田辺湾各所にてネット曳きで採集し，ラボで顕微鏡での観察とスケッチなど）：漂着物調査（実験所が所有する“畠島”および実験所の“北浜・南浜”で採集後，観察とスケッチなど）：磯観察（“番所崎”一周で磯に生息する生物の採集と観察とスケッチなど）：磯で観察できない動物群の観察（水族館で飼育展示中の様々な分類群の形態や行動の観察とスケッチなど）：瀬戸臨海実験所近郊の漁港での観察：反省会とオリジナル曲♪「ベニクラゲ音頭」を含む海洋生物曲を歌う会。多様な実習材料を現場・実地実習する有効性はもとより，快適な宿泊設備の使用料と食事分の代金は併せて1万円以下と実費負担は重くない。日本最古で質のよい温泉で，毎日フィールドへ出かける疲労も吹き飛ばせた。

以上の実習の概略は，新聞に連載中の「宝の海」75（紀伊民報社2005年6月14日付）で報告するとともに，共通教育通信5巻（2005年）で報告した。指導者から受講生へのメッセージの要点を簡略にまとめて示します：全日，天候に恵まれ，穏やかで暖かく，微小生物から大形動物まで，多様な海産無脊椎動物や魚類など，多彩な顔ぶれを観察できました。水族館では，刺胞動物門を代表として，海辺では見られなかった数々の生き物達が，展示ラベルや解説なども含めて十分に学習できました。本実習は，いくら時間があっても足りません。その理由は，生命の母なる海，“宝の海”には，未知の生物が無数に多様に存在しているからです。しかし，動物は最も細分しても，たった40動物門です。この基礎を得心し，各動物門に綱以下種までのレベルも今後は留意し，皆さんのこれからの人生で，地球の同朋者である彼らの一生，つまり，配偶子から受精卵・幼生・幼体・成体・老齢体など，“生活史”を常に頭におき，各々の現在・過去・未来に思いを十二分に寄せて下さい。また，食う食われるの「食物網」にも思いを巡らせ，現存するおごそかさを十分にかみしめて下さい。以上の点を常に心得ておくこと，これこそ，人間の義務です。今後も海洋生物，特に岸辺で出会える様々な生き物に，皆さんの人生でめいっぱい親しんでみようといった思いが芽生えていれば，本実習参加の意義があったのです。なお，3大テーマ：光合成の人工作製方法の考案；ベニクラゲの神秘の若返りのメカニズムとその人類への応用；南海・東海大地震の年代予測に加えて，海に潜む生物の秘密を発掘・研究・応用する醍醐味も夢みて下さい。最後に，寝食をともに実習した同級生の分野内・間のよき交流を今後も続行して下さい。

瀬戸臨海実験所水族館で各種無脊椎動物を観察

北浜で漂着物などの観察と採集

⑭「節足動物学入門」

海洋生物進化形態学分野　宮崎勝己 講師

日程　5月13日(金)：オリエンテーション（於　フィールド科学教育研究センター小会議室）
　　6月23日(木)：講　義（於　フィールド科学教育研究センター小会議室）
　　9月12日(月)～16日(金)：実　習（於　フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所）

少人数セミナー「節足動物学入門」は，上記の日程で講義と実習を組み合わせる形で行った。オリエンテーションでは，セミナーの概要説明，自己紹介，今後の日程調整を行った後，ある英語の教科書から，節足動物の特徴をまとめた部分を抜き出したものを配布し，その和訳を宿題として課した。講義では，節足動物の生物学についての概説をパワーポイントを用いて行ったほか，宿題を回収した。宿題については，後日模範解答と共に，実習参考資料に同封して，各受講生に返送した。

実習では初日の実習オリエンテーションと所内見学に引き続き，二日目午前中は実験所構内で捕虫網を使った採集と見つけ採り採集による節足動物の採集を，午後中は土壌サンプルの採取と簡易ツルグレン装置を使った動物の抽出とを行った。三日目は，午前中は実験所周辺の海岸から打ち上げ海藻と砂を採取し，そこから洗い出し法による動物の抽出を行った。午後は，これまでに採集したサンプルから節足動物をソーティングした上で，同定作業を行った。四日目の午前中は，実験所周辺の番所崎を一周しての磯採集を行い，午後は引き続き同定作業と，同定結果の整理を行った。最終五日目は，今回の同定結果から節足動物の主要群とその生息環境との関連についてまとめさせ，節足動物の進化に関する推論を試みさせる内容でレポートを提出させ，後片付け・掃除を行った後，解散とした。

今回の参加者は三名，学部も理・工・経済とバラバラで，しかも皆第二希望で流れてきたとのことであったが，いずれも興味を持って受講してくれた。特に実習における採集では，皆童心に帰ったように楽しんでやっていた。海産節足動物については，期待していたほどには種類が採れなかったが，陸産節足動物，特に土壌から抽出した節足動物は思いの外多く，実験所構内の生物相の豊かさを改めて実感した。

今回は自分自身初めてのポケゼミということで，実際やってみると数々の不具合も出てきて，何かともたついたり，必ずしも当初の意図通りには出来なかった部分もあった。また受講生間の親睦を図る意図で，実習中の食事は全て自炊としたが，これはかかる負担のデメリットの方が大きかったように思う。これらの反省点は次回以降に生かすことにして，一番最初の不安定な状態の実習に参加し，最後まで付き合ってくれた今回の受講生たちには感謝したいと思う。

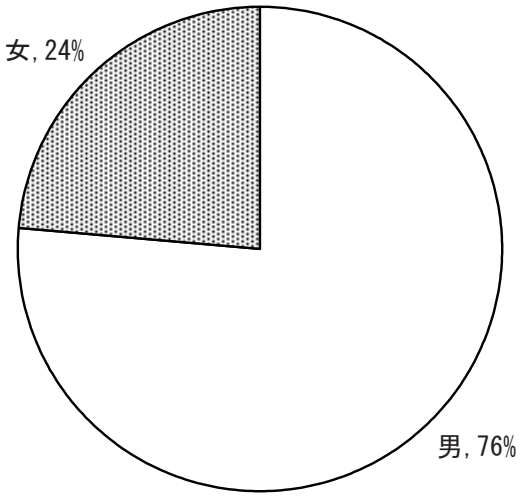
番所崎での磯採集

砂や海藻から洗い出しで生物を抽出する

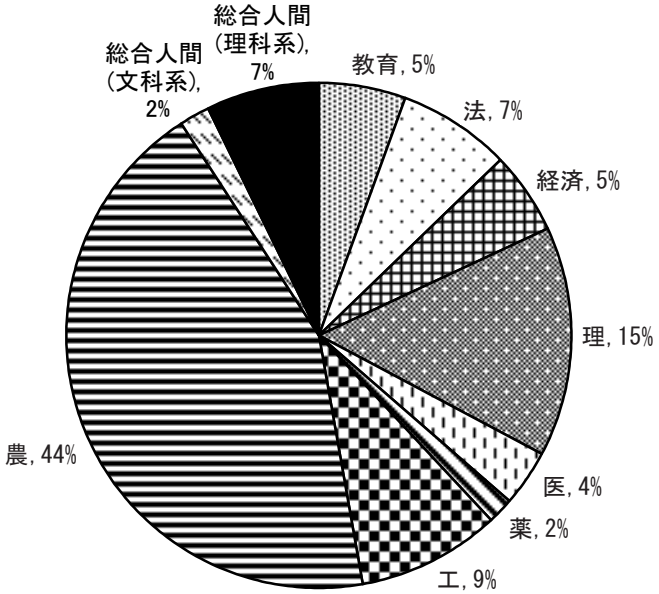
新入生向け少人数セミナーに関するアンケート【全体まとめ】

このアンケートは，フィールド科学教育研究センターの少人数セミナーを今後より充実したものにしていくため，学生の率直な意見を求めたものである。アンケートは 9 設問からなっており，有効回答者数は 55 名（芦生研究林，北白川試験地，紀伊大島実験所，舞鶴水産実験所，瀬戸臨海実験所，その他の施設）である。以下，原則として設問ごとに，集計結果をグラフで表示し，百分率を添えた。

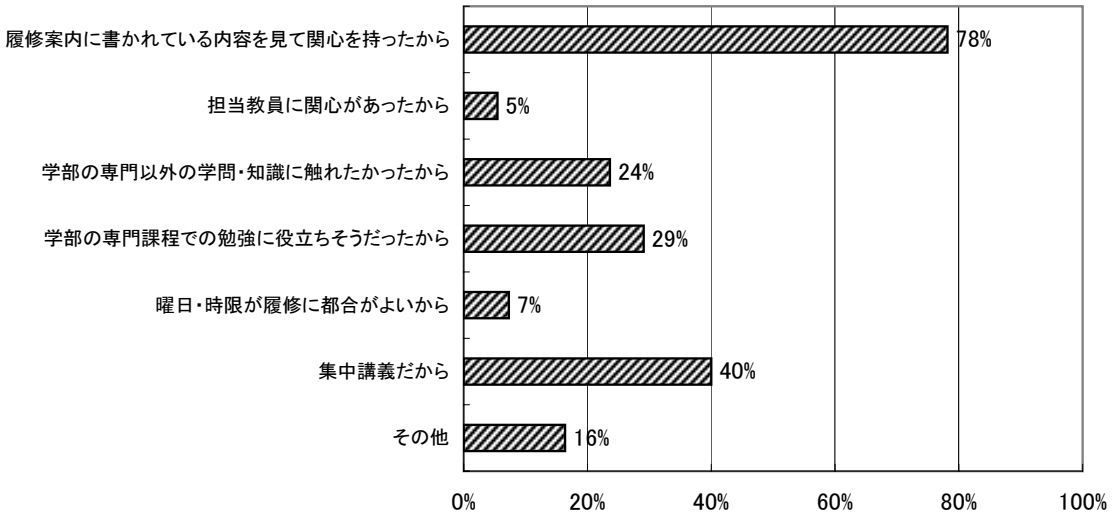
Q1　あなたの性別を答えて下さい。



Q2　あなたの所属学部を答えて下さい。



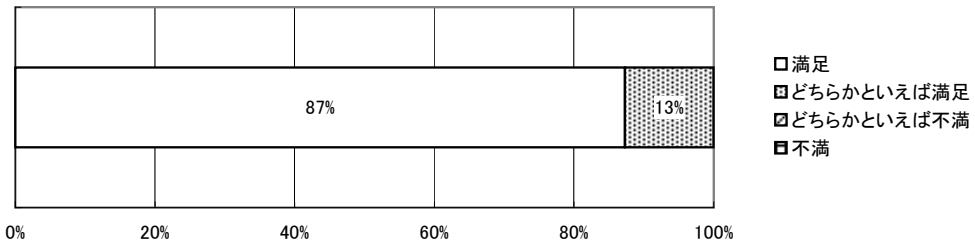
Q3　このセミナーを受講することにした理由を答えて下さい。（複数回答可）



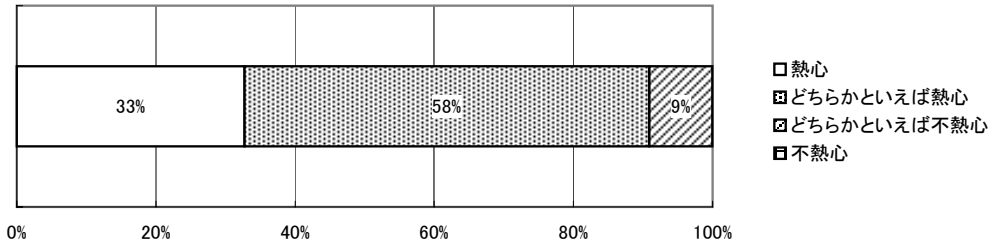
「その他」……
- セミナー名に惹かれたため。
- とにかくポケゼミを受けてみたかったため。
- 実習，フィールドワークがあったため。
- 実習時期が夏だったため。
- 舞鶴に行けると書いてあったため。
- 担当教員より誘われたため。

Q4　このセミナーを受講しての感想をうかがいます。

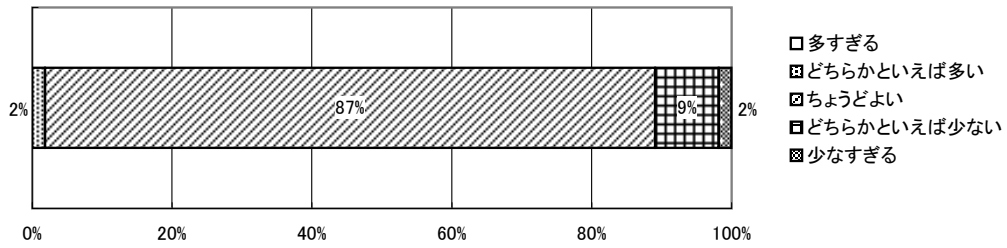
(1)　このセミナーの授業内容に満足していますか。



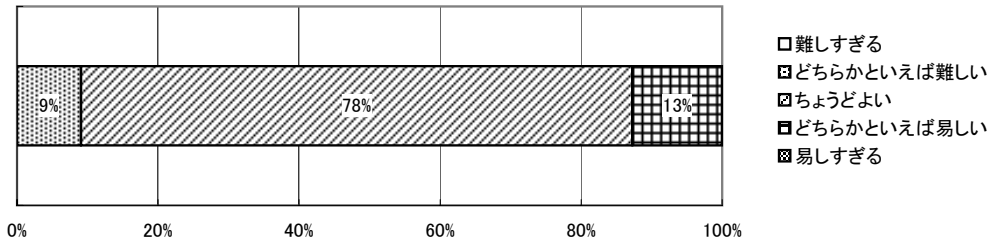
(2)　あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。



(3)　このセミナーの学生数についてはどう思いますか。

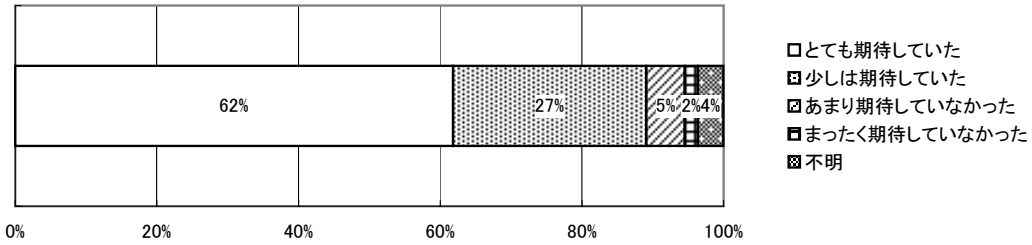


(4)　授業の難易度はどうでしたか。

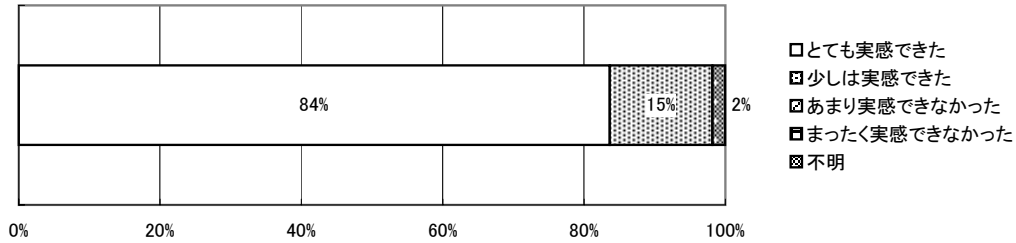


Q5　少人数制の授業形式についてうかがいます。

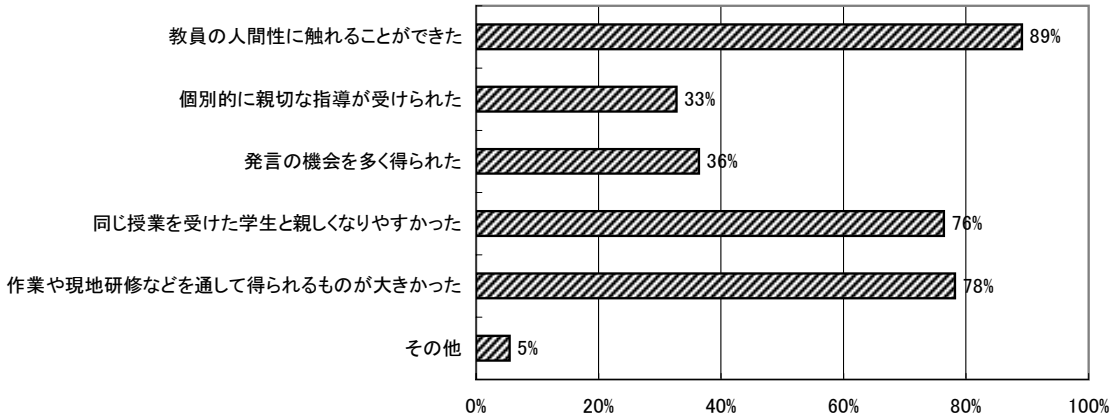
(1)　このセミナーを受講する前，講義のような大人数形式の授業よりも多くのものが得られることを期待していましたか。



(2)　では，実際にこのセミナーを受講してみて，少人数形式でしか得られないものがあると実感できましたか。



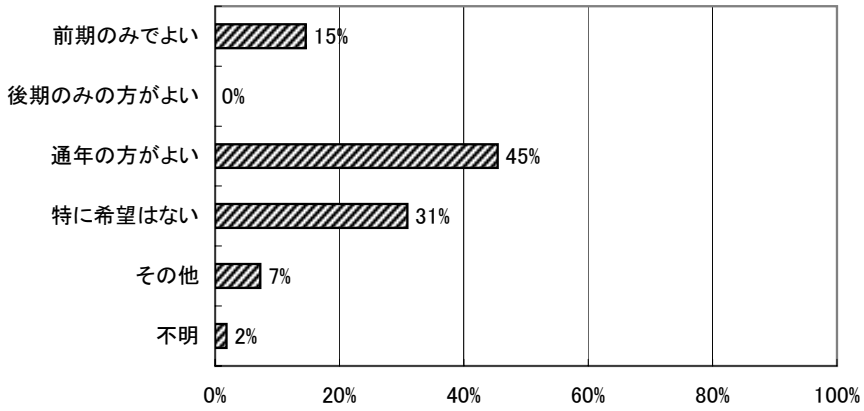
(3)　前問(2)で「とても実感できた」または「少しは実感できた」を選んだ方にうかがいます。少人数形式の授業でどのような点がよかったと思いますか。(複数回答可)



「その他」……　・行動しやすかった。
　　・調査の苦労を知った。

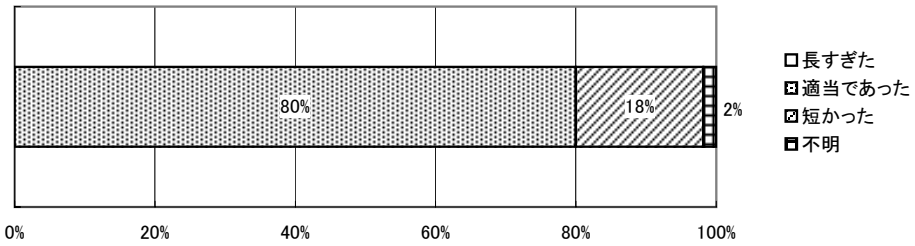
Q6　少人数セミナーの実施方法等についてのご意見をうかがいます。

(1)　少人数セミナーは前期のみの開講となっていますが，この開講時期についてはどう思いますか。

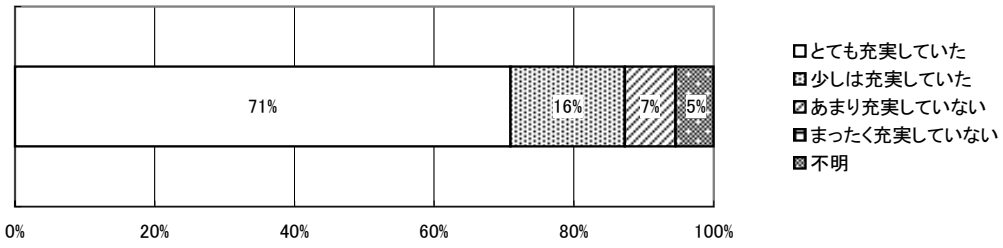


「その他」……　・前期・後期・通年など科目の種類を増やし，2 回生以上でも受講できると良い。
　　・前期に集中しすぎている。教員側の負担が大きいのではないか。

(2)　このセミナーの実施期間についてどう思われますか。

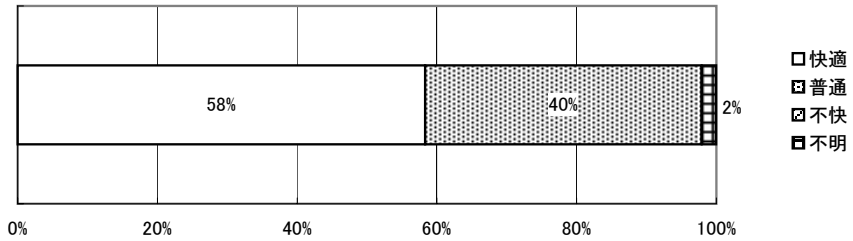


(3)　このセミナーの実施場所の実験設備や実験器具についてどう思われましたか。

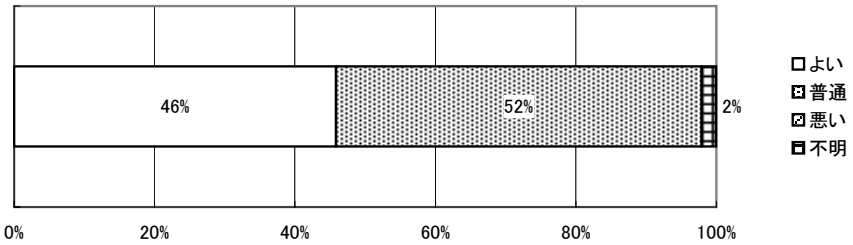


(4)　このセミナーの宿泊についてうかがいます。

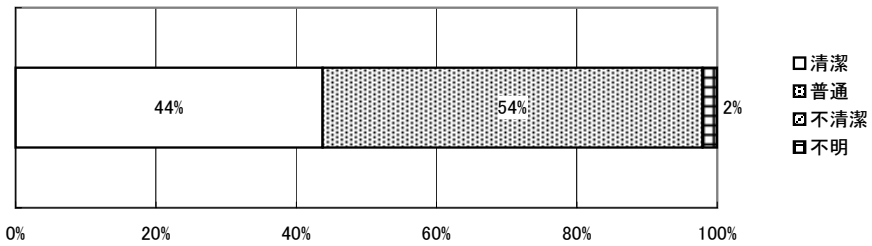
・共同の宿泊生活は



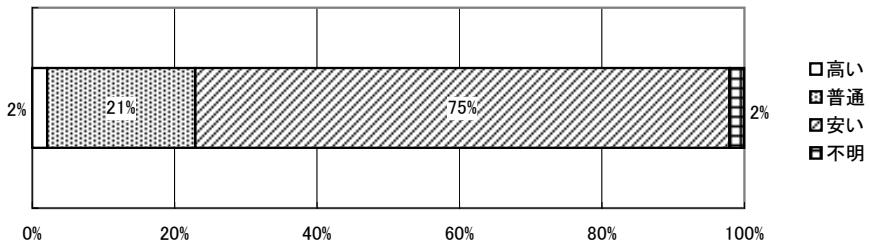
・宿泊施設の整備は



・宿泊施設の寝具は



・宿泊施設の経費は



(5)　宿泊施設や食事について，何かご意見やご要望があれば自由に記入して下さい。

【芦生研究林】

〇改善を求める意見

・キッチン中央の換気扇が，ぶつかりやすいところにあるため，改善してほしい。

【紀伊大島実験所】

〇肯定的な意見

・集団で自炊できて，とても楽しかった。

・懇親会は，先生との距離を縮められて良かった。

〇改善を求める意見

・虫が多かったのが苦痛だった。

・トイレが少々汚い。

【舞鶴水産実験所】

〇肯定的な意見

・自分が以前住んでいた所よりは，少なくとも快適だった。今のままで十分良い。

・雨対策を施された野外での食事も，とても良かった。

・コンビニの食事は味気ない気がしたが，バーベキューがあったため良かった。

〇改善を求める意見

・食事はコンビニ中心でなく，地元の産物（魚など）を食べれると良い。

・食事代が別途要るのなら，事前に費用のことを伝える必要がある。

【瀬戸臨海実験所】

〇肯定的な意見

・朝食の和洋を選べることが良かった。

〇改善を求める意見

・朝食が毎日同じだったため，変化があった方が良い。

・食事を発注するか，コンビニ等の持ち込みができると良かった。

・夕食を外食にすれば，おいしい物をもっと安く食べれると感じた。

・観光地であるため，周辺の食事処は少し値段が高かった。

【その他の施設】

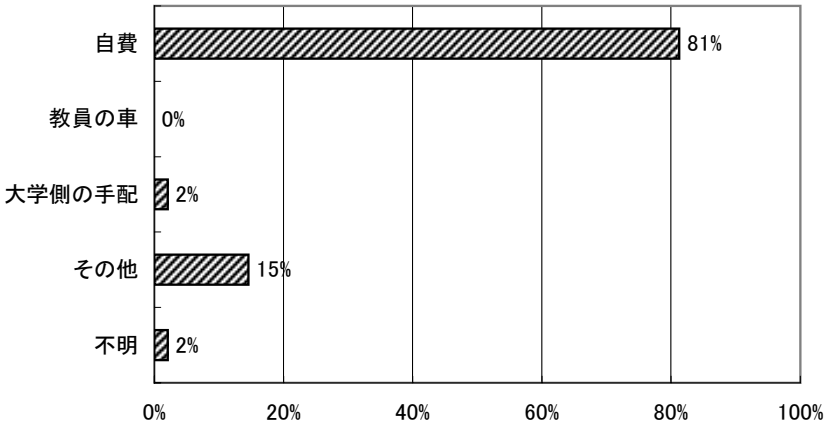
〇肯定的な意見

・「贅沢すぎる!!」という程素晴らしいものだった。

〇改善を求める意見

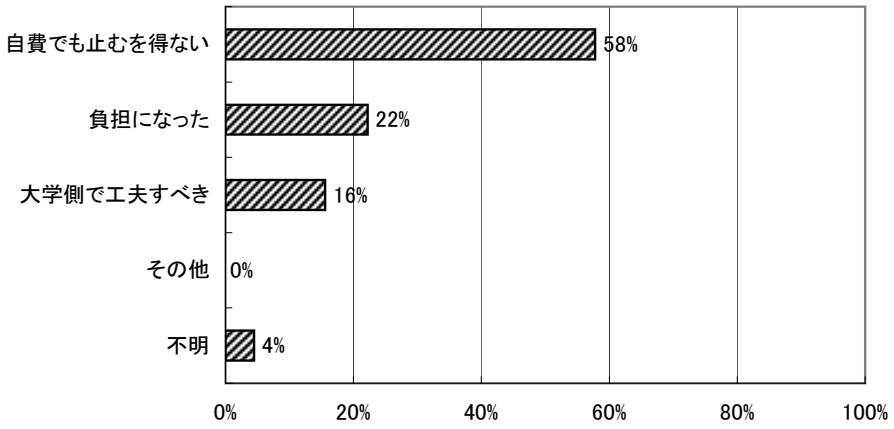
・食事の量をもう少し少なめにした方が良い。

(6)　このセミナーの現地集合場所へのアクセスについてうかがいます。

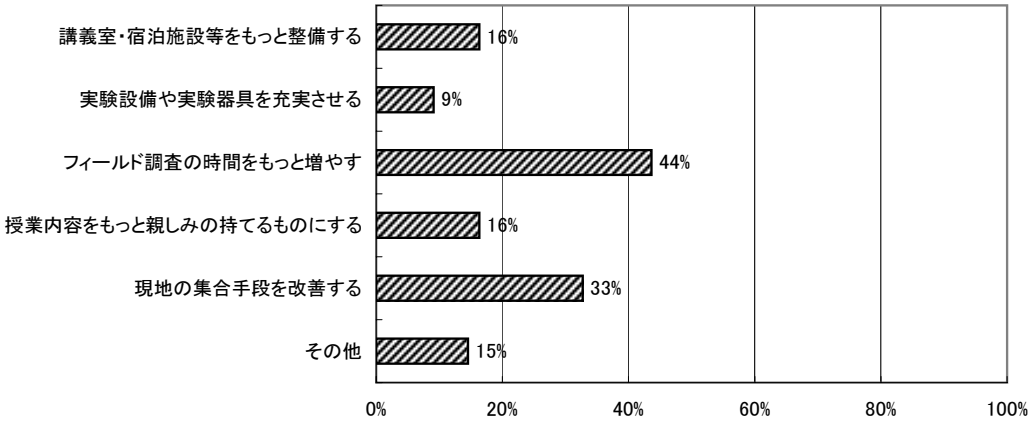


「その他」……　・自費＋教員の車
　　・教員の車＋大学側の手配

(7)　前問(6)で「自費」を選んだ方にうかがいます。



Q7　今後，少人数セミナーをさらに充実させるためには，どのようにすれば良いと思いますか。
（複数回答可）



「その他」……
- 実習期間がもっと長い方が良い。
- 後期も開講を希望する。
- 授業日数を増やす。
- 施設設備について，詳細を伝えると良い。
- 開講時に航空券のバースデー割引者を集める。
- フィールド実習に参加する前に，事前学習を深めておく。
- 次の活動につなげられるよう，１回きりでは終わらせない工夫をする。
- セミナーの期間中，植樹祭に参加しても良いのではないか。

Q8　今回受講された少人数セミナーについて，何かご意見やご希望があれば自由に記入して下さい。

【芦生研究林】

〇肯定的な意見
- 実際に森の中に入らなければ感じられないことを体験できた。森との関係を考えていくための種をいくつか得ることができた。
- 「原生的な森林」は，人の手が加えられている部分が多いことを知った。人の出入りよって森に悪影響が出てしまうことを現実的に感じることができた。
- 試験期間中の参加だったが，試験勉強をするより有意義に過ごすことができた。
- 期間外でポケゼミ続編を行えると良い。
- ポケゼミは１人１個と言わずに，何個も取れる方が良い。

〇改善を求める意見
- もう少し長く山を歩けると良かった。

【北白川試験地】

〇肯定的な意見
- 新鮮な話をいろいろ聞けた。学生同士とても仲良くなれて，一生付き合っていきたい友達になれたことも貴重だった。
- 教員の指導が分かりやすく，身にしみて農業の楽しさを実感した。
- とても楽しく興味深い授業を受けることができた。

〇改善を求める意見

- サツマイモを植える前段階の土作りや準備などは，大部分を先生一人で作業されていたが，その段階に自分達も関われると良かった。

【紀伊大島実験所】

〇肯定的な意見

- 台風などのアクシデントで自然調査の大変さを知ったが，為になった。
- 本や講義では得られないものを得ることができた。
- 教員の人間性を感じることができた。
- 現地調査（聞き取り等）は，自分に大きなエネルギーを与え，その重要性と楽しさを知った。
- 答えがないからこそやりがいがあると感じた。自分の海を見つけるにあたり，このポケゼミはその海に流れ込む川になった。
- 色々な学部の人と触れ合うことができて，とても良い体験になった。
- できれば 2 回生以上でも参加を希望する。

【舞鶴水産実験所】

〇肯定的な意見

- 少人数ということで直接教員と話す機会が多く，積極的に取り組むことができた。
  今まで抱いていた魚についての疑問をたくさん解決できたことが良かった。
- とても為になり，楽しかった。
- もっと多くの方が少人数セミナーを受けられるよう，より多くのセミナーを開講してもらえると良い。
- 一般教養でも通年の開講を希望する。
- 良い宿泊施設で，過ごしやすかった。コンビニ弁当の件を改善できれば，大満足だ。

〇改善を求める意見

- フィールド調査の際に，手持ちの網などで魚を捕れると良かった。
- 普段先生方がどんな研究をされているか見学できるとより良い。実習の期間が短すぎる。
- 現地研修を最初に行えば，早く学生同士仲良くなり，講義がもっと充実したのではないか。

【瀬戸臨海実験所】

〇肯定的な意見

- 非常に貴重な経験ができ，楽しく充実したセミナーだった。
- 自由時間と学生同士生活する時間が多かったことがとても良かった。
- このセミナーのように自然に触れ合うようなゼミがもっとあれば良い。
  ただ，虫達を次々とアルコールの中へ沈めていくのは，心が痛かった。
- 本当に楽しい 3 日間だった。サンゴ・メイオベントスの観察，解剖，スキンダイビング，NPO の方々との交流など，他ではできないことがたくさん体験できた。
- とても良い経験になった。
- とても有意義な時間を過ごすことができた。
- 野外活動が多く，白浜でしかできない体験ができた。先生が研究されていることや将来のことについて聞くことができて良かった。

〇改善を求める意見

- もう少し人数が多くても良かった。
- 食事（特に夕飯）の値段が高かった。

【その他の施設】

〇肯定的な意見

- 自由時間がたくさんあったことが良かった。
- 文系の自分が理系の研究者の視点や活動内容に触れ，学ぶもの，感じるものは計りしれない。フィールド研のポケゼミを活発にしていけると良い。
- 自然を舞台にしたポケゼミであったため，今回のようにゆっくりとした時間の中で，ゆっくりとした講義（会話）であったことが良かった。これほど少人数で受ける授業は，今後あまりないため，1回生で経験できることは良いことだ。

〇改善を求める意見

- 実際に講義のある2週間前～講義日までに，何らかの調べ学習＋プレゼン1回があると，授業に対する態度が変わるのではないか。
- 気仙沼の市場見学ができれば良かった。
- 食事後に雑談・座談会みたいなものがあれば良かった。

Q9　当センターのホームページにアクセスしたことがありますか。内容についてどう思われますか。

〇肯定的な意見

- 詳しく分かりやすくて良い。
- コンテンツが充実している。
- 木や花の写真がたくさんあって，親しみが持てた。
- 今回来た芦生以外の研究林や臨海施設にも興味が持てた。
- 舞鶴水産実験所のホームページは充実していて良い。

〇改善を求める意見

- 少し無味乾燥な気がした。
- 内容が少ない気がする。
- 研究の概略はもう少し詳しい方が良い。
- 試験地の地図が分かりにくい。

7）全日空「私の青空・森づくり活動」

副センター長　竹内典之 教授

京都大学フィールド科学教育研究センター（京大フィールド研）と全日本空輸株式会社（ANA）は，両者の社会連携活動を協力して推進することを 2004 年 12 月 21 日合意した。ANA は，自社便の就航する空港所在地において環境保全活動「私の青空・森づくり活動」を展開している。京大フィールド研は，これらの活動に対して講師を派遣し，現地における森林・環境教室「京都大学フィールドセミナー（青空塾）」を開講するなど市民を対象とした森・里・海の環境再生に向けた教育を展開している。以下に活動の記録からいくつかの例を示しておく。

私の青空・羽田空港天城湯ケ島の森

2005 年 4 月 16 日「天城湯ケ島の森」において，羽田空港が所在する東京都大田区の住民と ANA 関連企業の社員および家族など約 220 名の参加を得て，植林活動が行われた。当日は，開会のセレモニー，京大フィールド研「青空塾：針葉樹と広葉樹」のショートレクチャーの後，参加者全員によるヒノキと広葉樹のミズナラ，ヤマザクラ，イタヤカエデ，ハルニレなどの広葉樹の植栽が行われた。参加者は，立派な林に育つことを楽しみに熱心に植栽していた。

－　天城湯ケ島の森　－

私の青空・高知龍馬空港仁淀川の森

2005 年 10 月 22 日，仁淀川の水源部の森において，ANA 関連企業の社員および仁淀川漁協や京大学生など約 100 名の参加を得て，人工林の間伐や散策道づくりが行われた。当日は，雪混じりの小雨の降るなか，開会のセレモニー，京大フィールド研「青空塾：日本の人工林と間伐の必要性」のショートレクチャーの後，地元の国有林や森林組合などの職員の指導で，ヒノキ林の間伐や散策道の草刈を行った。

－　仁淀川の森　－

私の青空・松山空港オイスカの森

2006 年 3 月 25 日～26 日に松山市において全日空・京大フィールド研・NPO オイスカ共催による「私の青空・森づくり活動」が行われた。

3 月 25 日の夕方に，フィールド研教員と地元から参加した高校生約 40 名とでセミナー「日本の森林と問題点」が開かれた。まず，フィールド研教員が「日本の森林と問題点」について簡単な講演を行い，その後参加した地元の高校生との質疑応答を行った。高校生の森林や環境に対する関心は高く，終了後にも数多くの質問がなされていた。

3 月 26 日は，開会のセレモニー，京大フィールド研「青空塾：心にも森を」のショートレクチャーの後，竹藪化した松山市水源地を切り開いて地ごしらえされた林地に植樹を行った。松山市には水源となる河川が少なく，常に水不足の脅威にさらされていることもあって，森の再生に対する関心が極めて高く，約 500 名にも上る参加者は一刻も早い森の再生を念じつつ熱心に植樹していた。参加者の半数近くを高校生たちが占め，当地における今後の活動が楽しみである。

このように，「私の青空・森づくり活動」では，それぞれ地元の特徴を活かした活動が展開され，今後の拡大と発展が期待されている。

8）京の子ども夢大使（大志）

沿岸資源管理学分野　益田玲爾 助教授

「京の子ども夢大使」派遣事業の一環として，昨年の9月に京丹後市立宇川中学校で，また11月に宮津市立由良小学校で講演をしてきた。本事業は，京都市内に較べてアカデミックな刺激の不足しがちな市外の小中学校へ，大学や研究所の職員が出向き，科学について夢のある話を提供するという試みだ。いわゆる理科離れ対策の一環であろう。そもそも舞鶴水産実験所のような施設に常駐していれば，小中学生の見学者は少なからず来るし，こちらから出向いて講演することもある。これまでなんとなくやっていたことが，府の制度として行われるのは，ありがたいことだ。

さて，9月に訪れた宇川という場所は，かの川那部浩哉先生が長年アユの研究を続けてこられた所であり，魚の生態に興味のある者にとって，ある意味聖地である。今回，招待して下さった瀬川教諭も，学生時代に宮地伝三郎先生の『アユの話』を読んで，丹後半島への赴任を希望され，以後30年間，中学の先生をしながら，生徒さんたちと一緒にアユの調査を続けておられるという。まったくもって，頭が下がる。同中学校では，畳敷きのしぶい視聴覚室へ通され，そこにパソコンとプロジェクターを置いて講演をした。聴いてくれたのは，1年生の11人である。1学期にすでに川の生き物について勉強しているとのこと，今回は海の魚の生態写真を中心に，群れ行動の話やクラゲの話などした（写真1）。

11月に講演を行った由良小学校は，これまた小生が子供の頃に海水浴に来た由良浜近辺の小学校である。一年の最大の楽しみが海水浴だった小生にとって，こんな小学校で学べる生徒さんたちが心底うらやましいと思う。全校生徒64人が講堂に集まり，いわゆる「体育座り」で聴いてくれた。さすがに海辺の小学生だけあって，素朴にして本質的な質問が次々に出て面白い。「ガンガゼの毒とげは身を守るためだけにあるんですか」「アジはエチゼンクラゲ以外のクラゲにも寄りつきますか」「タツノオトシゴはなぜ『？』マークのような形をしているのですか」などなど（写真2）。講演のあと，給食をごちそうになった。給食室で作られるという温かい給食は，ほんとうにおいしかった。

教育現場の荒廃という言葉をしばしば耳にする。しかし私が出会う先生はみな，多忙な時間をやりくりしながら，いかに子供たちに夢とチャンスを与えようかと苦心なさっている。また，今回訪れた地域は，いずれも過疎の問題を抱えているようだが，生徒数が少ないだけあって，かえって都会の学校よりも，先生と生徒との信頼関係も深いように感じられた。夢大使として派遣され，希望を貰って帰ってきた。

（写真1）

（写真2）

9）芦生公開講座

芦生研究林長　芝　正己 助教授

京都大学フィールド科学教育研究センター　公開講座 2005 年「森のしくみとその役割　－森にくらして－」が，7 月 28 日から同 30 日までの二泊三日の日程で京都府北桑田郡美山町の芦生研究林で実施された。今回で 15 回を数える本公開講座も，平成 18 年 1 月 1 日の市町村合併に伴う南丹市の誕生で，美山町としてはこれが最後となった。

募集人員は 50 名。それに対して，60 名以上の応募があったが，最終的には 58 名（男性：31 名，女性：27 名）の参加があった。遠くは，神奈川，埼玉の関東圏や，岡山，広島の中国地方からの参加があった。そのように 58 名のうち 41 名が京都以外の地域からの参加者であったことは，本公開講座が全国的にも知名度が高くなってきていることを示しているように思う。

プログラムは以下の通りである。

7 月 28 日（木）　過去へのいざない（講義）

13：00～13：15　開講挨拶　田中　克 教授（センター長）
13：15～13：30　芦生研究林の概要　芝　正己 助教授（芦生研究林長）
13：30～14：00　芦生の森林　竹内典之 教授
14：15～15：00　森の職人　小林直人さん（外部講師）
15：15～16：00　美山の自然に生かされて　岡本千鶴さん（外部講師）
16：00～17：15　樹木識別入門　柳本　順 技術職員・大橋健太 技術職員
18：00～20：00　歓迎屋外バーベキュー

7 月 29 日（金）　探索と森林浴

8：30～ 9：30　芦生研究林構内集合：日程説明後マイクロバスで移動
9：30～12：30　天然林内での講義並びに実習（班別行動）：森林系教員・技術職員合同担当
12：30～13：30　昼食（長治谷作業所）
13：30～15：45　天然林内での講義並びに実習（コース別行動）：森林系教員・技術職員合同担当
16：00～　マイクロバスで下山

7月30日（土）　未来へ（講義）

9：00～ 9：45　田舎でできること　鹿取悦子さん（外部講師）

10：00～10：45　自分を省みて　桂　隆雄さん（外部講師）

11：00～11：30　質疑応答・アンケート

11：45～12：00　閉会挨拶　田中　克 教授（センター長）

今回は，林業や旅館，狩猟など，美山町で森とかかわりながら暮らす人たちが語り部となり，講義や森の探索を通じて人と森とのかかわりを学び，未来について考えるという趣旨のもとに講座を開いた。

昨年は，森とのかかわりの現状にスポットを当てて，公開講座を行った。従って，昨年度と今回を併せて美山の森の過去・現在・未来を繋ぐ講座になったものと思う。

準備段階から多くの方々にお世話になりました。この場を借りて，お礼を申し上げます。

京都大学フィールド科学教育研究センター
公開講座 2005

森のしくみとその役割
―森にくらして―

プログラム

7月28日（木）「過去へのいざない（講義）」
7月29日（金）「探索と森林浴」
7月30日（土）「未来へ（講義）」

かたりべ

桂　隆雄（森の住職）
岡本 千鶴（森の女将さん）
小林 直人（森の職人）
鹿取 悦子（若き狩人）
他　京大フィールド研スタッフ

日　　程　平成17年7月28日（木）13時 ～ 平成17年7月30日（土）12時（2泊3日）
会　　場　京都大学フィールド科学教育研究センター　芦生研究林（京都府北桑田郡美山町芦生）
交通手段　自家用車または路線バス
定　　員　50名（応募者多数の場合は抽選）
受 講 料　8,200円（但し、宿泊費などは別途必要）
申込方法　官製往復はがき（１名につき１枚）に住所、氏名、フリガナ、年齢、性別と連絡先(電話番号・FAX番号・E-mailのアドレス）、交通手段（自家用車または路線バス利用）を記入し、返信用はがきには郵便番号、宛先を記入のうえ6月30日（木）《必着》までにお申込み下さい。
（小学生は不可、中学生は保護者同伴）
※個人情報は本公開講座の運営にのみ使用いたします。
申 込 先　〒606-8502　京都市左京区北白川追分町
京都大学農学研究科等教育・研究協力課研究協力掛宛
TEL　075（753）6411
FAX　075（753）6020
E-mail　kenkyo11@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
そ の 他　詳細は、京都大学フィールド科学教育研究センターのホームページ（http://www.fserc.kais.kyoto-u.ac.jp）をご覧頂くか、申込先にお尋ね下さい。

京都大学フィールド科学教育研究センター
Field Science Education and Research Center, Kyoto University

10）フィールド科学教育研究センター第２回時計台対話集会

「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」

副センター長　竹内典之 教授

21 世紀に人類に課せられた最も重要な課題は，環境への負荷が少なく，安心・安全で持続的な発展が可能な社会をどのように築いていくかということです。京都大学フィールド科学教育研究センター（京大フィールド研）では，そのような社会の構築には人間社会の自然的基盤である森と里と川と海の再生，さらにはそれらの健全なつながりの再生が必要不可欠だと考え，森と川と海の国であるわが国で新しい統合科学「森里海連環学」を創生し，世界に発信することによって地球環境問題の解決に寄与することを目標としています。

京大フィールド研は，平成 16 年 7 月に開催した第 1 回時計台対話集会「森と里と海のつながり－“心に森”を築く」に続く第 2 弾として第 2 回時計台対話集会「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」を平成 17 年 12 月 18 日（日曜日）に京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて開催しました。この時計台対話集会は，京大フィールド研の取り組みをより多くの人々に理解していただくための活動の一環として実施しているものです。

第 2 回となる今回は，作家の C. W. ニコル氏による「森を育てて海を想う」，アウトドアライターの天野礼子氏による「“川仕事”も，“森仕事”も」，牡蠣養殖業を営む畠山重篤氏による「汽水に生きる」，そして多忙ななかご参加いただいた尾池和夫京都大学総長による「地球社会の共存」の講演の後，日本経済新聞編集委員土田芳樹氏のコーディネイトによる講師と会場の参加者とによる対話を行った。

周知のように作家の C. W. ニコル氏は，日本の自然をこよなく愛し，日本の森の再生を求めて自らも長野県黒姫山山麓で「アファンの森」創りを進め，また，自然環境の大切さ，自然環境保全の大切さを訴える多種多様な活動を展開されています。アウトドアライターの天野礼子氏は，長良川河口堰建設反対運動に立ち上がって以来一貫して日本の河川の再生に向けて活躍するとともに，近年は「川を再生するには森を生き返らすことが必要」と“森仕事”へ視野・活動範囲を広げて森の再生にも取り組まれています。宮城県気仙沼の牡蠣養殖漁師の畠山重篤氏は，「牡蠣の森を慕う会」の代表として「森は海の恋人」運動を精力的に推進するとともに，崩れ行く日本の豊かな渚域の保全に向けた全国規模での活躍をされています。日本経済新聞編集委員の土田芳樹氏は，森や里や川や海の保全に深い洞察力を有し，昨年には森里海の連環を体得すべく 5 ケ月かけて松尾芭蕉の歩いた「奥の細道」を追体験されています。

安心・安全な社会の再構築は現代社会の大きな関心事であり，森と川と海の健全なつながりの再生は持続的発展が可能な社会構築のための必要不可欠な要素です。現実社会で森と川と海の保全運動の先駆者として携わってこられた3氏と著名な地震学者でもある尾池総長から話題提供を受け，森と川と海のつながりについて考えてみませんかとの呼びかけに多くの人々が応えて参加してくださいました。当日の京都は前夜の降雪が積雪として残り，寒くて足元の悪い日であったにもかかわらず，350名にも及ぶ参加者がありました。次世代を担う高校生・大学生・大学院生の参加者も多く，若い人達からの発言も活発で，実りの多い対話集会となりました。

もり、さと、うみ。
「森と川と海の対話―安心・安全な社会を求めて」第2回時計台対話集会
日時　平成十七年十二月十八日(日)十三時～十七時
講演　「森を育てて海を想う」　C・W・ニコル（作家、アファンの森財団理事長、京大フィールド研 社会連携教授）
「"川仕事"も、"森仕事"も」　天野 礼子（アウトドアライター）
「汽水に生きる」　畠山 重篤（牡蠣の森を慕う会代表、京大フィールド研 社会連携教授）
「地球社会の共存」　尾池 和夫（京都大学総長）
挨拶　田中 克（京都大学フィールド科学教育研究センター長）
コーディネータ／司会
土田 芳樹（日本経済新聞 編集委員）
会場　京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール
入場無料(一般公開)　定員　先着500名
申込　不要
<主催>京都大学フィールド科学教育研究センター
問合せ先　京都大学フィールド科学教育研究センター　TEL.075-753-6414・6415　FAX.075-753-6451　E-mail:joho@kais.kyoto-u.ac.jp
<協賛>株式会社村田製作所　株式会社大仲社　サイファーアソシエーツ株式会社　株式会社日本経済社　全日本空輸株式会社　NPO法人エコロジー・カフェ
京都・まいづる立命館地域創造機構　JTBカルチャーサロン(順不同)

「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」第2回時計台対話集会

巨木がたたずむ豊かな森、アユが躍る清流の里、潮の満ち干に生命があふれる渚。これら私達日本人の原風景は今では心の中にしか残っていないのでしょうか。この原風景の再現には、森と里、里と海、そして海と森のつながりの再生が不可欠と思われます。

京都大学は2003年（平成15年）4月にフィールド科学教育研究センターを発足させ、森と里と海のつながりに人と自然の共存原理を求める新しい統合科学の誕生を目指しています。この新しい科学「森里海連環学」は、日本の自然を代表する森と川と海のつながりの再生を目ざすものです。この取り組みを多くの方々に広くご理解いただくために、昨年7月に開催しました第1回時計台対話集会「森と里と海のつながり－"心に森"を築く」に続き、第2回時計台対話集会「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」を開催致します。安心・安全な社会を築き直すことは、今社会的に大変関心の高いことであり、その重要な自然的基盤となる森と川と海のつながりを考えてみたいと思います。そして、私達が次世代から借り受けている豊かな自然を再生し、そのまま贈り届ける責任を果たしたいと願っています。

「森」「里」「海」や森と川と海のつながりに興味のある方々のご参加をお待ちしています。

講師等略歴

C．W．ニコル

（作家、アファンの森財団理事長、京大フィールド研 社会連携教授）

「森を育てて海を想う」

長野県黒姫在住。カナダ水産調査局北極生物研究所や淡水研究所の主任技官。環境保護局の環境問題緊急対策官。1980年以来長野県に居を定め、独自に森の再生活動に取組んでいる。日本の自然破壊を憂い、様々なメディアで日本の現状を訴え続けている。2005年名誉大英勲章を授与。

畠山 重篤

（牡蠣の森を慕う会代表、京大フィールド研 社会連携教授）

「汽水に生きる」

宮城県気仙沼湾で牡蠣養殖業を営む。"森は海の恋人"をキャッチフレーズに、気仙沼湾に注ぐ大川源流の室根山に植樹運動を始める。また、子供たちに海の体験学習を行うなど、森と川と海の関連を訴える。著書に「森は海の恋人」（北斗出版）「リアスの海辺から」（文芸春秋）ほか多数。

天野 礼子

（アウトドアライター）

「"川仕事"も、"森仕事"も」

中学、高校、大学を同志社に学ぶ。国内外の川を中心に"森・里・海"を歩く。1988年より文学の師・開高健とともに長良川河口堰反対運動に立ち上がり、"川の国"のダムに警鐘を与える国民運動に育てた。著書に「ダムと日本」（岩波新書）「"緑の時代"をつくる」（旬報社）「だめダムが水害をつくる!？」（講談社＋α新書）ほか多数。

土田 芳樹

（日本経済新聞 編集委員）

1947年山口県生まれ。71年日本経済新聞社入社。広島支局、東京・産業部、名古屋・報道部、大阪・経済部、同社会部デスクなどを経て94年仙台支局長、97年運動部長。2000年から編集委員として夕刊社会面の「プリズム現代」や「名作のある風景」などを担当。05年5月から新設の「こころのページ」で＜奥の細道を歩く＞を5カ月連載した。143日、1700余キロの歩き旅を終え、11月から同ページの編集長を務めている。

会場までのアクセス

京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール

※駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。

■ 京都駅（JR・近鉄）から
市バス「京都駅前」より
206系統「東山通　北大路バスターミナル」行　約40分　「京大正門前」下車
17系統「河原町通　錦林車庫」行　約40分　「百万遍」下車

■ 阪急河原町駅から
市バス「四条河原町1」より
201系統「祇園　百万遍」行　約30分　「京大正門前」下車
31系統「熊野・岩倉」行　約30分　「京大正門前」下車

■ 京阪をご利用の場合
京阪「出町柳駅」下車　東へ徒歩約15分

FSC
ミックス品
FSC認証林及び管理された森林からの製品グループです
www.fsc.org Cert no. SA-COC-1220
© 1996 Forest Stewardship Council

（2）外部資金の導入

2005 年度　受託研究・奨学寄付金・科学研究費

助成団体	制度名等	研究種目	研究者	職種	代表者名（所属）	研究期間（年度）	課題番号	研究課題名	分担課題名	交付額合計（千円）	2005年度交付額
京都市	受託研究	京都市有林における森林生態系実態調査研究	竹内 典之	教授	－	2005					1,000
京都市	受託研究	平成 17 年度 八丁平植生継続調査	安藤 信	助教授	－	2005					210
水産総合研究センター	受託研究	平成 17 年度 資源動向要因分析調査委託事業	山下 洋	教授	－	2005					1,500
水産総合研究センター中央水産研究所	受託研究	平成 17 年度 生態系保全型増養殖システム確立のための種苗生産・放流技術の開発委託事業	田中 克 中山 耕至	教授 助手	－	2005		ヒラメの遺伝的集団構造と地域的生理生態特性に関する研究			2,400
水産総合研究センター西海区水産研究所	受託研究	平成 17 年度 海洋生物資源の変動要因の解明と高精度予測技術の開発	益田 玲爾	助教授	高柳 和史（西海区水産研究所）	2005		海洋環境が浮魚類の生態に及ぼす影響の解明と資源変動予測	マアジがクラゲに寄りつくことの生態的意義		2,000
森林総合研究所	受託研究	21 世紀の炭素管理に向けたアジア陸域生態系の統合的炭素収支研究（カラマツ林生態系における窒素動態に関する研究）	徳地 直子	助教授	－	2005					1,801
森林総合研究所	受託研究	流域圏における水循環・農林水産生態系の自然共生型管理技術の開発（森林流域における主要栄養塩類の収支の解明）	徳地 直子	助教授	－	2005					1,500
受託研究　小　計											10,411
アサヒビール学術振興財団	奨学寄附金	森林認証研究助成	芝　正己	助教授	－	2004-2005				1,100	550
アラスカ大学フェアバンクス校	奨学寄附金	海洋生物学に関する研究助成	白山 義久	教授	－	2005					50,704
株式会社　森林テクニクス大阪支店	奨学寄附金	竹林生態系機能の定量的把握	徳地 直子	助教授	－	2005					1,000
カリフォルニア大学	奨学寄附金	造礁サンゴの地理的隔離と形態収斂の研究	深見 裕伸	助手	－	2005					4,746
京都大学教育研究振興財団	奨学寄附金	学術研究活動推進事業助成	田中 克	教授	－	2005		第 6 回国際異体類生態学シンポジウム「生息域と加入の変動性－異体類生態学の未来を拓く」			1,980
京都理学研究協会	奨学寄附金	海洋生物学に関する研究助成	白山 義久	教授	－	2005					400
国土環境株式会社	奨学寄附金	海洋生物増殖学研究助成	田中 克	教授	－	2005					1,000
斉藤報恩会	奨学寄附金	博物館など所蔵のクラゲ類の分類学的研究	久保田 信	助教授	－	2005					300
阪本奨学会	奨学寄附金	演習林の研究及び施業運営等の助成	竹内 典之	教授	－	2005					2,000
阪本奨学会	奨学寄附金	演習林の研究及び施業運営等の助成	竹内 典之	教授	－	2005					800
阪本奨学会	奨学寄附金	演習林の研究及び施業運営等の助成	徳地 直子	助教授	－	2005					700
阪本奨学会	奨学寄附金	演習林の研究及び施業運営等の助成	嵜元 道徳	助手	－	2005					700
阪本奨学会	奨学寄附金	演習林の研究及び施業運営等の助成	坂野上 なお	助手	－	2005					700
自然環境研究センター	奨学寄附金	森林生態系の長期動態に関する研究助成	徳地 直子	助教授	－	2005					1,800
自然環境研究センター	奨学寄附金	温帯域の造礁サンゴの多角的解析の研究	深見 裕伸	助手	－	2005					700
日本科学協会	奨学寄附金	笹川科学研究助成	小路 淳	研究員（COE）		2005					272
日本財団	奨学寄附金	NaGISA プロジェクトの推進	白山 義久	教授	－	2005					19,600
日本財団	奨学寄附金	センター共通経費	山下 洋	教授	－	2005					1,100

村田製作所	奨学寄附金	センター共通経費	田中 克	教授	－	2005					2,000
奨学寄付金　小　計											91,052
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(A)	柴田 昌三	助教授	－	2005-2008	17255007	インド・ミゾラム州における竹類ムーリーの大面積開花に関する生態的研究		31,300	11,700
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(A)(1)	中島 皇	講師	小川　滋（九州大）	2003-2005	15208015	流域生態圏における水・熱・物質循環の長期変動モニタリングと広域比較研究		1,665	200
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(A)(2)	田中 克	教授	－	2003-2005	15208019	有明海スズキとタイリクスズキをめぐる資源生物学と保全生態学の融合		49,010	11,310
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(B)(2)	徳地 直子	助教授	－	2003-2006	15380105	森林生態系の炭素・窒素蓄積メカニズムの解明とその潜在的炭素・窒素蓄積量の推定		16,000	2,200
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(C)	安藤 信	助教授	－	2005-2008	17510025	世界文化遺産（京都）の背後にある森林景観の回復		3,400	1,000
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(C)	田川 正朋	助教授	－	2005-2007	17580163	カレイ類変態期に起こる左右分化の仕組みの解明と養殖魚におこる形態異常の防御		3,600	1,800
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(C)	中島 皇	講師	－	2005-2007	17580126	天然林の動態と環境保全機能		3,500	1,800
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(C)	宮崎 勝己	講師	－	2005-2007	17570081	ウミグモ類及びクマムシ類を用いた節足動物の発生様式の進化に関する研究		3,600	2,600
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(C)	中西 麻美	助手	－	2005-2007	17580127	広葉樹および針葉樹林生態系の資源獲得量に対する資源利用効率と一次生産の変動予測		2,900	1,100
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(C)(2)	山下 洋	教授	－	2003-2005	15580164	エコフィジオロジーモデルによるヒラメ稚魚成育場機能の南北間比較		3,600	1,000
日本学術振興会	科学研究費	基盤研究(C)(2)	芝　正己	助教授	－	2004-2005	16580120	日本型 SFM を指向した適応型人工林管理システム（AFMS）の構築		3,800	1,400
文部科学省	科学研究費	萌芽研究	田中 克	教授	－	2004-2006	16658080	樹木を直接海へ－森と海の生態系連環機構解明のための基礎研究－		3,300	1,000
文部科学省	科学研究費	萌芽研究	白山 義久	教授	－	2005-2006	17657031	生物分類学と情報科学との融合による線虫分類学推進の可能性を探る		2,800	2,200
文部科学省	科学研究費	萌芽研究	中山 耕至	助手	－	2003-2005	15658058	分子生物学的手法による魚卵・仔魚捕食者の特定と初期減耗研究への試行的適用		3,700	900
文部科学省	科学研究費	若手研究(B)	益田 玲爾	助教授	－	2003-2005	15780133	魚類の学習能力および攻撃行動におよぼすドコサヘキサエン酸の影響		3,700	1,000
文部科学省	科学研究費	若手研究(B)	小路 淳	研究員（COE）		2005	17780154	有明海の高濁度水塊における稚魚の摂食・生残戦略：行動学・化学生態学的アプローチ			1,900
科学研究費　小　計											43,110
受託研究・奨学寄付金・科学研究費　計											144,573

2005 年度　特別研究員奨励費

助成団体	制度名等	研究種目	研究者	職種	指導教員名	研究期間（年度）	課題番号	研究課題名	分担課題名	交付額合計（千円）	2005年度交付額
文部科学省	科学研究費	特別研究員奨励費	和田 敏裕	特別研究員(DC2)	田中 克	2005-2006	17001949	希少種ホシガレイの栽培化による資源再生へ向けた初期生態解明		1,800	900
文部科学省	科学研究費	特別研究員奨励費	鈴木 啓太	特別研究員(DC1)	田中 克	2005-2007	17002310	有明海「大陸沿岸遺存生態系」仮説：主要河川間の比較と安定同位体比の応用による検証		2,700	900
文部科学省	科学研究費	特別研究員奨励賞	RIGBY, P.R.	外国人特別研究員	白山 義久	2005-2006	17005703	マイクロサテライト DNA 解析に基づく、ミズダコの個体群構造		2,400	1,200
文部科学省	科学研究費	特別研究員奨励賞	BOLASINA, S.N.	外国人特別研究員	山下 洋	2004-2005	16003330	環境要因がヒラメ仔稚魚の内分泌系および消化器系の発達におよぼす影響		2,200	1,100
特別研究員奨励費　計											4,100

(3) 2005 年度　フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み（日記）

（1） 2005 年 4 月 8 日～ 9 日
宮城県気仙沼市，岩手県室根村において「森は海の恋人運動」のフィールドを視察（TV 朝日による取材）

（2） 2005 年 4 月 10 日
全日空「私の青空　関西空港・高野山ゲンジの森」においてフィールドセミナーを開講

（3） 2005 年 4 月 12 日
長野県アファンの森財団事務所において C. W. ニコル氏に“社会連携教授”の称号を授与

（4） 2005 年 4 月 14 日
北白川試験地において尾池和夫総長出席のもと j.Pod 建築モデル施設の公開と記者発表

（5） 2005 年 4 月 16 日
全日空「私の青空　羽田空港・天城湯ケ島の森」においてフィールドセミナーを開講

（6） 2005 年 4 月 21 日
高知県庁において旧県立横浪子供の森施設管理棟を京都大学ならびに高知大学の共同利用による施設として利用することを記者発表

（7） 2005 年 4 月 28 日
和歌山研究林において，辻　文三副学長の出席のもと j.Pod 建築モデル教育研究棟新築竣工披露式を開催
ミニシンポジウム「和歌山から森と都市の対話を」を同時開催

（8） 2005 年 5 月 12 日
京都大学・高知大学・高知県主催シンポジウム「21 世紀に森・川・海が再生するために」を高知県須崎市において開催
本学を代表して辻 文三副学長が挨拶　参加者約 400 名

（9） 2005 年 5 月 28 日
全日空「私の青空　山口宇部空港・阿知須の森」においてフィールドセミナーを開講

（10） 2005 年 5 月 29 日
全日空「私の青空　釧路空港・標茶町湿原の森」においてフィールドセミナーを開講

（11） 2005 年 5 月 30 日
高知県庁において橋本大二郎知事に森・川・海再生「高知プロジェクト」を提案

（12） 2005 年 6 月 2 日
琵琶湖海区漁業調整委員会において「森里海連環学のすすめ－森は海の恋人運動に学ぶ」を講演

（13） 2005 年 6 月 4 日
産学官連携プロジェクト「21 世紀の環境・経済・文明」公開シンポジウム“21 世紀の環境と経済と文明－農と食と地球環境”において「食文化・森里海連環学・木文化」を講演（宮城県気仙沼市）

（14） 2005 年 6 月 5 日
第 17 回「森は海の恋人運動植樹祭－森を育み木々と語る集い」に参加（岩手県室根村）

（15） 2005 年 6 月 9 日
舞鶴水産実験所において文部科学省サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業（SPP）「地球環境と海の生態系」を実施（6 月 9 日，7 月 26 日，10 月 7 日，1 月 17 日，2 月 16 日の 5 回）

（16） 2005 年 6 月 13 日
第 1 回木文化再生研究会（講師：OM ソーラー 小池一三氏，アウトドアライター 天野礼子氏）を開催

(17) 2005年 6 月23日
古座川町役場ならびに串本町役場において古座川プロジェクトの概要を町長・助役他に説明
(18) 2005年 7 月 5 日～ 7 日
北海道大学において平成17年度3大学（北大・京大・琉大）連携フィールド科学シンポジウムを開催
(19) 2005年 7 月 9 日～10日
第1回昆虫COEフィールド教育プログラム「芦生の森の樹木をめぐる植食者たち」を芦生研究林において開催
(20) 2005年 7 月11日
第2回木文化再生研究会（講師：グリーンベンチ工法研究会理事 栗原光二氏）を開催
(21) 2005年 7 月15日～19日
第1回古座川合同調査－京大フィールド研「古座川プロジェクト」関連ワークショップ
(22) 2005年 7 月16日
全日空「私の青空　信州の森」／長野県森づくりボランティア活動（長野県信濃町）における
パネルトークに参加
(23) 2005年 7 月17日～18日
産学官連携プロジェクト「21世紀の環境・経済・文明」研究会による「ネーチャーテクノロジー」に
関する討論に参加
(24) 2005年 7 月19日
NPO法人「エコロジー・カフェ」と「生物多様性保全のための市民参加型教育研究」に関する協定を調印
(25) 2005年 7 月23日
第15回京ECOセミナーにおいて「森里海のつながりから木文化再生へ」を講演（京エコロジーセンター）
(26) 2005年 7 月28日～30日
芦生研究林において公開講座2005「森のしくみとその役割－森にくらして」を開講　参加者58名
(27) 2005年 8 月 8 日～12日
全学共通科目（1～4回生対象）森里海連環学実習ＩＡ（芦生研究林－由良川－丹後海コース）を開講
(28) 2005年 8 月20日
「仁淀川の再生をめざして。仁淀川の森と水を考えるシンポジウム」において「森と川と海をつなぐ学問」を
講演（高知県土佐市）
(29) 2005年 8 月20日
全日空「私の青空　広島空港・Asahiの森」においてフィールドセミナーを開講
(30) 2005年 8 月24日～25日
全日空の協力を得て，和歌山研究林主催「森林体験学習」を芦生研究林で開催
(31) 2005年 9 月 3 日
第1回由良川フォーラムを綾部市で京都府農林水産部との共催で開催　参加者約120名
(32) 2005年 9 月 3 日～ 9 日
全学共通科目（1～4回生対象）森里海連環学実習Ⅱ（夏の北海道実習）を開講
原　潔監事による実習現場ならびに実習施設の監査
(33) 2005年 9 月12日～14日
第2回昆虫COEフィールド教育プログラム　大学院生による「昆虫科学とフィールド研究」シンポジウムを
上賀茂試験地において開催

(34)　2005 年 9 月 16 日～19 日

第 2 回古座川合同調査－京大フィールド研「古座川プロジェクト」関連ワークショップ

(35)　2005 年 9 月 16 日～23 日

瀬戸臨海実験所において平成 17 年度公開臨海実習（夏期）を実施

(36)　2005 年 9 月 22 日

第 3 回木文化再生研究会「森里海連環学　工務店懇談会」を開催

(37)　2005 年 9 月 23 日

京都大学ジュニアキャンパス 2005 において「森里海連環学－“森は海の恋人”を探る」を開講

(38)　2005 年 9 月 25 日～30 日

全学共通科目（1～4 回生対象）森里海連環学実習ＩＢ（紀伊半島の森と里と海）を開講

(39)　2005 年 9 月 28 日～29 日

京都大学シニアキャンパス 2005 において「『ひとと自然　森を考える』フィールド学習」を開講

(40)　2005 年度新入生向け少人数セミナーを開講

・「森林の更新と動態」	（清水山，北山，芦生研究林等）	安藤　信
・「森のつくりだすもの」	（和歌山研究林）	徳地　直子
・「原生的な森林の働き」	（芦生研究林）	中島　皇
・「世界の森林，日本の森林，現在・未来！」		芝　正己
・「有機農業の可能性……持続可能な農業をめざして」	（北白川試験地）	西村　和雄
・「海の環境と生物資源」	（舞鶴水産実験所）	山下　洋
・「魚類心理学入門」	（舞鶴水産実験所）	益田　玲爾
・「森里海のつながりを清流古座川に見る」	（紀伊大島実験所）	梅本　信也
・「有明海にみる生きものたちの危機」		田中　克
・「海洋生物の多様性を探る」	（瀬戸臨海実験所，古座川）	白山　義久
・「海岸生物の生活史」	（瀬戸臨海実験所）	久保田　信
・「節足動物学入門」	（瀬戸臨海実験所）	宮崎　勝己
・「京都大学に木造り校舎を作る－都市と森林の再生」		田中　克 他
・「“森は海の恋人”の故郷に学ぶ」		田中　克 他

(41)　2005 年 9 月 29 日～11 月 15 日

「京の子ども夢大使（大志）派遣事業　科学探偵士」に講師派遣

(42)　2005 年 10 月 2 日

和歌山の森林を考える会主催「みんなの森づくりシンポジウム」において基調講演

(43)　2005 年 10 月 7 日～11 日

舞鶴水産実験所・芦生研究林において，文部科学省「豊かな体験活動推進事業」（兵庫県立姫路飾西高等学校），高校生向け森里海連環学実習を共同実施

(44)　2005 年 10 月 7 日～2006 年 1 月 27 日

全学共通科目（リレー講義）「森里海連環学－森は海の恋人か？－」を開講

(45)　2005 年 10 月 7 日～2006 年 1 月 27 日

全学共通科目（リレー講義）「海域・陸域統合管理論」を開講（日本財団寄附講座）

(46) 2005 年 10 月 14 日
第 1 回海域・陸域統合管理論セミナーを吉田キャンパスで開催
（総合地球環境学研究所　谷内茂雄助教授　講演）

(47) 2005 年 10 月 20 日～25 日
第 6 回国際異体類生態学シンポジウム
「生息域と加入の可変性－異体類生態学の未来を拓く－」を舞鶴市で開催
23 日　市民向け公開講演会「海の生きものと人の未来：共存の道を探る」を同時開催

(48) 2005 年 10 月 21 日
高知県須崎市において「チャリティトーク・ライブ“森よ，川よ，海よ，甦れ！”」に参加

(49) 2005 年 10 月 22 日
全日空「私の青空　高知龍馬空港の森・仁淀川の森」においてフィールドセミナーを開講

(50) 2005 年 10 月 30 日
全日空「私の青空　宮崎空港・北郷町蜂之巣の森」においてフィールドセミナーを開講

(51) 2005 年 11 月 18 日～21 日
21 世紀 COE プログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」
“古座川塾”－フィールドから未来型食料環境学を考える－を開催

(52) 2005 年 11 月 19 日
和歌山県古座川町中央公民館において「第 2 回　古座川シンポジウム」を開催
参加者約 60 名　講師：畠山重篤「牡蠣の森と“心の森”」

(53) 2005 年 11 月 26 日～27 日
第 3 回古座川合同調査－京大フィールド研「古座川プロジェクト」関連ワークショップ

(54) 2005 年 12 月 18 日
第 2 回時計台対話集会「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」を開催
参加者 350 名　講師：C. W. ニコル，天野礼子，畠山重篤，尾池和夫，司会：土田芳樹

(55) 2006 年 1 月 13 日
第 2 回海域・陸域統合管理論セミナー「沿岸環境の再生に向けて－「有明海異変」に学ぶ－」を開催
（長崎大学水産学部長　中田英昭教授　講演）

(56) 2006 年 1 月 27 日
全学共通科目「森里海連環学」，「海域・陸域統合管理論」合同パネルディスカッション

(57) 2006 年 1 月 31 日
古座川流域協議会設立総会

(58) 2006 年 2 月 16 日
第 1 回総長ランチミーティングにおいて，尾池和夫総長，松本紘理事，フィールド研若手研究者らが懇談

(59) 2006 年 2 月 23 日
高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科及び高知県産業技術委員会と「横浪林海研究交流センターを活動拠点とした研究・交流に関する協定」を締結

(60) 2006 年 2 月 24 日～27 日
第 4 回古座川合同調査－京大フィールド研「古座川プロジェクト」関連ワークショップ

(61)　2006 年 2 月 27 日

第 3 回海域・陸域統合管理論セミナーを開催

（同志社大学経済学部　室田　武教授，高知大学　依光良三名誉教授　講演）

(62)　2006 年 3 月 17 日

第 4 回海域・陸域統合管理論セミナーを開催

（筑波大学大学院生命環境科学研究科　恩田裕一助教授，北海道大学大学院農学研究科　中村太士教授，北海道大学北方生物圏フィールド科学センター　向井　宏教授　講演）

(63)　2006 年 3 月 24 日

木造住宅振興シンポジウム「森と都市の対話　j.Pod 建築システムが目指すもの」（兵庫県，京都大学主催）において「森里海連環学と“森と都市の対話”」を講演

(64)　2006 年 3 月 26 日～ 4 月 1 日

瀬戸臨海実験所において平成 17 年度公開臨海実習（春期）を実施

j.Pod の公開と記者発表（北白川試験地）

チャリティトーク・ライブ“森よ，川よ，海よ，甦れ！"

第 1 回由良川フォーラム

シニアキャンパス

2. 各施設における活動の記録

（1）北海道研究林

■実習施設・フィールドの整備および実習受け入れ体制の強化

北海道研究林では，年3回の学生実習，隔年の放送大学面接授業（集中型）など，学内，学外の学生教育，地域の学校教育の場として広く利用されている。しかし，実習施設は旧林学科の学生定員を基準に設計されたもので，現在の実習参加希望者を受け入れるためには充分とはいえない。とりわけ，白糠区の利用可能人数は15名と少ないこと，近年，女子学生が増加してきたことにより，現有施設では利用に不具合が生じている。

平成17年度は実習施設およびフィールドの整備に取り組んだ。しかし，施設の増改築は一朝一夕には困難である。そのため，白糠区では，募集定員が多い夏季の実習には宿泊施設として白糠町立の「縫別自然の家」，冬季のガイダンス・講義には町立の「勤労者センター」を利用し，地域施設の利用の促進にも貢献した。募集定員や女子学生の増加に伴う施設の充実に関しては，標茶区では前年度の管理棟女子トイレの改修に引き続き，学生宿舎の女子トイレの増築を行い，入浴設備が不充分なことを補うために，実習期間中に希望者には近隣の温泉に連れて行くなどの方法を試みた。また，長年更新できなかった冬季実習用の山スキー，積雪調査用器具，コンピューター等の機器の補充と整備を行った。フィールドに関しては，学生の樹木識別実習のみならず，一般の利用者に対しても便宜をはかるために，構内，林内の樹木に説明板を取り付けた。

さらに，広く学内の学生が実習に参加できる機会を与えるために，平成18年度からは夏季と冬季に行われている森林科学科の「研究林実習Ⅲ」，「同Ⅳ」と平行して全学共通科目として「北海道東部の人と自然」，「北海道東部の厳冬期の自然環境」のふたつの実習を行うこととした。それに伴い，平成17年度冬季の「研究林実習Ⅳ」からは，森林科学科の教員も指導に加わることになった。また，北海道大学と共催している夏季の「森里海連環学実習Ⅱ」でもあらたに北海道大学教員1名が加わって，センター教員4名，北海道大学教員2名で実施するなど，指導体制の強化がはかられた。

（2）和歌山研究林

■少人数セミナー（ポケゼミ）

7月26日～28日に，全学共通科目少人数セミナー“森のつくりだすもの”を行った。参加者は京都大学の1回生1名と4回生1名，近畿大学の4回生3名である。和歌山研究林に源流をもつ有田川の河川水をpHやECの測定を行いながら採取し，河川水の流下に伴う変化について学習し，研究林研究ではハコヤ尾の林内観察と間伐や枝打ちの林内作業の体験を行った。

■森里海連環学実習Ⅰ

9月25・26日に，森里海連環学実習「森・里・海の繋がりを学ぶ」を行った。参加者は京都大学の1回生2名と3回生2名，北海道大学の1回生8名である。コブトチでの枝打ちの林内作業，ハコヤ尾での林内観察を行った。

■総合的な学習（和歌山県立有田中央高校清水分校）

8月24・25日に和歌山県立有田中央高校清水分校の「総合的な学習」という授業の一環として，1年生17名と引率の先生3名が和歌山研究林から芦生研究林を訪れた。この行事はANAとの提携により実現したもので，ANAにより交通手段が提供された。他地域の自然・産業・文化と地元を比較する機会を与えるもので，地元をよりよく知ると共に気候の異なる地域の自然や文化に親しむことを目標としている。朝清水町を出発し，午後芦生に到着，生徒達は技術職員から解説を受けながら芦生の森林見学を行った。夜には，芦生で伝統的に行われている“松あげ”を見学した。翌日は，京都を見学し，帰途についた。

（3）上賀茂試験地

■大学院生による昆虫科学と環境（フィールド）研究シンポジウム「秋の京都で語り合おうin上賀茂試験地」の開催

9月12日から14日までの日程で，21世紀COEプログラム・昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生と，京都大学フィールド科学教育研究センターの主催によるシンポジウムが行われた。このシンポジウムの目的は次世代を担う若手研究者を育てることにある。

初日は12時半からCOE拠点リーダーの藤崎憲治農学研究科教授，竹内典之フィールド研教授による主催者挨拶，中島皇試験地長による上賀茂試験地の概要説明が行われた後，日高敏隆総合地球環境学研究所長に「現代ナチュラルヒストリーとは何か」と題した基調講演を行って頂いた。14時からは過去に卒論・修論等の研究を試験地で行い，現在ポスドク（PD）あるいは博士課程（D）の学生として研究を続けている4名の若手研究者（菱拓雄・森林生態学PD，河村耕史・森林総研関西PD，井出純哉・昆虫生態学PD，井上みずき・森林生物学D)がそれぞれの研究を紹介し，参加者全員による討論が行われ，懇親会も開催された。

2日目は朝，前日に研究紹介をした若手研究者による研究フィールドの現地説明が行われた。10時からはフィールドにおける研究教育について，堀道雄理学研究科教授，寺島一郎大阪大学理学研究科教授，大澤直哉森林生態学講師が，教員かつ研究者としての立場から，それぞれ講演を行った。午後からは昆虫科学・フィールド科学を研究している16名の大学院生によるポスター発表が行われた。発表はプレゼンテーションとディスカッションが交互に設定された中身の濃いものであった。最後にプレゼンコンクールの投票が行われ，1〜3位までの発表者には賞状と賞品が贈られた。

3日目は，希望者を対象に上賀茂試験地の見学が行われた。参加者は中根技術班長に炭釜の説明を受け，その後樹木園や標本館の見学と林内散策をし，シンポジウムは終了した。参加した大学院生らからの評価も高く，今後ともこのような企画を行いたいと考えている。

■社会教育活動の充実

従来から毎秋行われていた一般公開を季節毎に開催できないかと検討し，今年度から企画，試行を行った。4月23日には春の自然観察会，2月4日には炭焼き体験会を行い，11月19日の秋の自然観察会と合わせて春秋冬の3シーズンに一般公開を開催した。参加者はそれぞれ春32名，秋27名，冬22名とそれほど多くはないが，学ぼうとする意欲を持った方々とじっくり散策することに重点をおいた一般公開をめざしている。今後は夏の企画を考えていく予定である。

■京都大学シニアキャンパス2005の開催

9月27日から4日間の日程で京都大学シニアキャンパス2005（テーマ：交響する身体〜ひと・もの・自然を考える〜）が行われ，9月28，29日には，フィールド学習「森を考える」が上賀茂試験地で行われた。参加者は2つのグループに分かれ，28日にはAグループが，29日にはBグループが午後1時半に試験地に集合し，竹内典之教授（フィールド研副センター長）の講義の後，標本館見学，自然観察コースでのフィールド学習を行った。参加者は講義室に戻り，森林を散策した感想を述べあった。全国からの参加者にとって京の北にある里山と生きた樹木コレクションは印象的だったようである。

（4）舞鶴水産実験所

■国際異体類生態学シンポジウム

10 月 20 日から 25 日にかけて，舞鶴ベイプラザにおいて第 6 回国際異体類生態学シンポジウムを開催した。21 カ国から合計 137 名の参加者があり，ヒラメ・カレイ類の生態に関する活発な討論がなされた。期間中に，田中克センター長，畠山重篤社会連携教授，およびジョン・バーク博士を講師とした市民講演会「海の生きものと人の未来：共存の道を探る」も行われた。舞鶴市内でこれほどの規模の国際学会が催されたことはかつてなく，関西空港から会場へ至るまでの案内や，市内の飲食店の英語版地図の作成等，地方都市での開催ならではの苦労もあったが，国内外からの参加者の評判は大変好意的であった。

■由良川フォーラム

9 月 3 日に綾部市中央公民館において「由良川フォーラム第 1 回　～森・里・海の連携　由良川流域エコネットワークの形成に向けて～」を開催した。北近畿の森と海をつなぐいわば大動脈ともいえる由良川について，文化・産業・自然といった様々な角度から論じた。綾部・福知山および舞鶴の市民を中心に約 150 名の参加者があった。由良川フォーラムは今後も京都府との共催により毎年開催する予定である。

■大学院教育

舞鶴水産実験所に所属する大学院生を受け入れ始めて 2 年目となった。本年度は博士課程 2 年が 2 名，修士課程 2 年 1 名，1 年 3 名という構成である。ここに農学研究科や情報学研究科の院生や学部生も加わり，文字通り同じ釜の飯を食いながら，各自が若狭湾をフィールドとした研究に取り組んでいる。その一端を紹介すると，博士課程の大嶋君は，ヒラメ仔稚魚の生き残り機構を明らかにすべく，調査船緑洋丸を駆使して調査を行っている。日本語と英語を巧みに操る韓国人留学生の陳君は，クロソイの稚魚の生態について，フィールド調査と飼育実験を並行して研究している。「クロダイはマダイよりも紫外線に強いか」という疑問から，魚の UV 耐性について研究している福西君，クラゲが何を食べて増えているのかを調べている木村さん，舞鶴湾産のカタクチイワシに卵を産ませて飼育し，稚魚期の行動を解析している熊野さん，そして市内の伊佐津川でエビをすくっては，川と海を行き来するエビたちの生態を調査している坂本さんと，大学院生たちの研究テーマは大変バラエティーに富んでいる。共通するのは，フィールドがすぐそこにあって，テーマも答えも目の前の海や川の中にあるということだろう。院生の人数はまだまだ少なく，若い学年が多いが，その活動には川をのぼる若鮎の勢いがある。

■実　　習

舞鶴水産実験所では，多数の臨海実習を受け入れている。本学農学部生対象の 2 週間にわたる臨海実習のほか，森里海連環学実習 I，少人数セミナーの実習 3 件，岐阜大学教育学部，京都教育大附属高校，西舞鶴高校，姫路飾西高校の臨海実習も受け入れて，実験所のスタッフが河川調査，海洋観測やシュノーケリング講習等の指導を行っている。

■啓蒙活動

科学探偵士派遣制度の一環として，京都府内の由良小学校および宇川中学校で講演を行った。また，京都府ボーイスカウト連盟の小学生の研修や，市内の新舞鶴小学校や網野町で催された「ふるさと海づくり大会」等での講演を行った。12 月に開催した市民向けの講演会「舞鶴湾水中散歩 Part III」には，約 180 人の市民が参加した。

（5）瀬戸臨海実験所

■水族館 75 周年記念写真展

瀬戸臨海実験所の水族館は今年度創立 75 周年を迎えた。それを記念して，2005 年 6 月 1 日～2006 年 1 月 9 日の期間に記念写真展を水族館内で開催した。展示されたのは，古くは大正 11 年の創立当時の瀬戸臨海実験所周辺の様子から始まり，昭和 4 年に昭和天皇が来所されたときの写真などがあった。さらに翌年行われた，行幸記念の臨幸記念碑の除幕式およびそれと同時に始まった水槽室の一般公開を伝える写真などもある。この昭和 5 年 6 月 1 日に行われた式典の日が，現在の水族館の開館日と定められており，今年はそれから数えて 75 年目を迎えたわけである。

瀬戸臨海実験所はその間，海洋生物の分類学などの研究に大いに貢献し，同じ海洋生物学の専門家として昭和天皇や，今上天皇が複数回来所されているが，そのときの様子なども展示された。また，戦時中は海軍に接収されて兵器庫となったが，そのときの遺物は現在も残っており，その写真も展示した。

このような幾多の困難を乗り越え，瀬戸臨海実験所の水族館は現在では国立大学法人が所有する博物館法にのっとった水族館として，ただ一つ“生き残って”いる貴重なものとなった。かつては年間 10 万人を超える入場者があったが，現在は残念ながら 5 万人台に減少している。しかしそれでも，京都大学と一般市民とをつなぐ最も太いパイプとして，その役割を立派に果たしている。

水族館は海水を使用しているため，維持が困難で，定期的に改修を行っている。この写真展からもわかるが，最近では 1961 年と 1982 年に大改修を実施しているが，すでに最後の改修から 24 年が経過しており，様々なところで老朽化が目立ち始めており，この施設を維持するためには早急に新たな改修を実施することが必要である。中期計画が大学の活動方針を決める独法化の流れの中で，次の中期計画の中で水族館の改修計画をきちんと位置づけていく必要がある。

■水族館 75 周年記念表彰

2005 年 12 月 18 日，水族館開設 75 周年を記念して，水族館の収集活動に長年，格段の協力を頂いた 2 団体・1 個人に対し，京都大学百周年時計台記念館において表彰式が執り行われた。当日午後には，時計台記念館百周年記念ホールで，京都大学フィールド科学教育研究センター主催の第 2 回時計台対話集会「森と川と海の対話-安心・安全な社会を求めて」が開催され，表彰式はこの催しの最後に行われた。

受賞されたのは，白浜漁業協同組合・南部町漁業協同組合・岡本昭生氏（白浜町袋港漁師）の 2 団体と 1 個人である。いずれも水族館で展示している水族の供給に多大な貢献をされた方々で，これらの方々の協力なくしては，水族館はなりたたないといっても過言ではない。今後も地元の方々と良好な関係を保ちつつ，水族館を維持してゆきたいと考えている。

(6) 各施設　学生実習等調べ（2005 年度）

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
芦　生　研　究　林								
A 1	2005.04.29 − 2005.06.18	3	京都大学　全学部	少人数セミナー「森林の更新と動態」	1 回生	11	(3)	
A 2	2005.05.03 − 2005.09.21	7	京都大学総合人間学部	芦生の生物相調査	3 回生	77		
A 3	2005.05.14 ～ 2005.05.15	2	京都大学農学部森林科学科	新入生歓迎登山	1 回生	16	(4)	
A 4	2005.05.26	1	京都大学農学部食料・環境経済学科	食料・環境経済学実習	3 回生	23	(3)	
A 5	2005.06.01 ～ 2005.06.02	2	京都大学人間・環境学研究科，ウイルス研究所	森林生態系とウイルス動態	院生・職員	20	(2)	
A 6	2005.06.20	1	京都大学人間・環境学研究科	認識人類学 I	M1	13	(1)	
A 7	2005.06.25 ～ 2005.06.26	2	京都大学理学部生物科学系動物学教室	脊椎動物解剖学実習	3 回生	8	(4)	
A 8	2005.07.01 ～ 2005.07.03	3	京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科	芦生研究林フィールド調査法実習	院生	60	(21)	
A 9	2005.07.09 ～ 2005.07.10	2	京都大学フィールド科学教育研究センター，農学研究科	第 1 回昆虫 COE フィールド教育プログラム「芦生の森の樹木をめぐる植食者たち」	学生	50	(11)	
A10	2005.07.16 ～ 2005.07.18	3	京都大学　全学部	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1 回生	27	(3)	
A11	2005.08.08 ～ 2005.08.09	2	京都大学　全学部	森里海連環学実習 I A	全回生	44	(12)	
A12	2005.08.29 ～ 2005.09.02	5	京都大学農学部森林科学科	研究林実習 I	2 回生	129	(24)	
A13	2005.09.20 ～ 2005.09.22	3	京都大学農学部森林科学科	森林科学科・研究林実習 II	3 回生	63	(15)	
A14	2005.09.26 ～ 2005.09.29	4	京都大学農学部森林科学科	森林利用学実習および実習法	3 回生	100	(8)	
A15	2005.09.30	1	京都大学生存圏研究所	「森を見てセルロースを語ろう」	学会員	25	(4)	
A16	2005.10.14 ～ 2005.10.16	3	京都大学人間・環境学部	地域調査論基礎ゼミナール・現地調査実習	2～4 回生	37	(11)	
A17	2005.10.24	1	京都大学人間・環境学部	文化人類学演習	3～4 回生	10	(1)	
A18	2005.11.03	1	京都大学理学部生物科学系動物学教室	フィールドワーク実習－菌類相から森を考える	学生・一般	28	(7)	
A19	2005.11.12	1	京都大学医学部保健学科	平成 17 年度厚生支援特別企画－自然との融合－	教員・学生	13	(7)	
A20	2006.02.10 ～ 2006.02.13	4	京都大学　全学部	暖地性積雪地域における冬の自然環境	全回生	72	(4)	
B 1	2005.08.19 ～ 2005.08.22	4	大阪大学理学部	生物学野外実習	1 回生	140	(12)	
B 2	2005.09.03	1	立命館大学理工学部	環境計画研究室の課外活動ゼミ	4 回生	21	(2)	
B 3	2005.09.13 ～ 2005.09.14	2	大阪府立大学地域環境科学科	地域環境科学科実験・実習	学生	32	(4)	
C 1	2005.05.14 − 2005.11.23	4	兵庫県立尼崎小田高等学校	ブナ林の生態，種子のシイナ率，稚樹の生育状況の調査－地球温暖化の指標として－	高校生	36		
C 2	2005.05.20	1	高島市立朽木中学校	1 年生校外実習（ブナ原生林散策）	1 年生	26		
C 3	2005.07.28 ～ 2005.07.30	3	なし	公開講座	一般	174		応募者 64 名
C 4	2005.08.02	1	和知町立和知中学校	芦生研究林の植生全般の現地踏査 中学校理科の教材研究	理科教員	9		
C 5	2005.08.24 ～ 2005.08.25	2	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	森林体験学習	高校生	56	(8)	大学等地域開放特別事業
C 6	2005.08.24	1	なし	緑の少年団　地区交流会	小学生	26		
C 7	2005.09.12	1	舞鶴市立岡田下小学校	杉尾峠近くの源流から長治谷の見学・取材	4 年生	5		
C 8	2005.10.04 ～ 2005.10.06	3	全国大学演習林	京都大学フィールド研　技術職員研修	技術職員	57	(6)	

C 9	2005.10.07	1	美山町立大野小学校	町内４年生児童に芦生原生林の樹木や植物に関心を持たせる	４年生	43		
C10	2005.10.07 ～ 2005.10.11	5	兵庫県立姫路飾西高等学校	学校設定科目 WOSI（Wonders of Science I）	高校生	121		
C11	2005.10.12	1	京都府立北桑田高等学校	北桑田高校森林リサーチ科　校外学習	高校生	32		
C12	2005.10.12	1	京都府立久御山高等学校	芦生の森を訪ねて	高校生	46		
C13	2005.11.12 ～ 2005.11.13	2	シニア自然大学	生態系の学習と自然観察の実習	受講生	79		
		84				1,729	(177)	

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
北　海　道　研　究　林								
A 1	2005.08.24 ～ 2005.08.31	8	京都大学農学部森林科学科	研究林実習Ⅲ（夏の北海道）	３回生	125	(17)	標茶区・白糠区
A 2	2005.09.03 － 2005.09.08	5	京都大学，北海道大学	森里海連環学実習Ⅱ（夏の北海道実習）	全回生	103	(18)	標茶区
A 3	2006.02.19 ～ 2006.02.25	7	京都大学農学部森林科学科	研究林実習Ⅳ（冬の北海道）	３回生	126	(14)	標茶区・白糠区
C 1	2005.08.06	1	標茶町教育委員会中央公民館	「家庭教育学級」第４講座「木工教室」	一般・児童	23		標茶区　標茶町中央公民館事業
C 2	2005.05.30	1	標茶町立標茶小学校	遠足	３年生	53		標茶区
C 3	2005.06.22	1	標茶町立弥栄小学校	総合的な学習での地域学習（木工体験）	児童	16		標茶区
C 4	2005.10.15 ～ 2005.10.16	2	なし	標茶町アドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座	児童	72		標茶区
C 5	2005.10.25	1	なし	きれいな水を育む森林づくり事業 （地域政策推進事業）	児童	27		標茶区
C 6	2005.10.23	1	標茶町教育委員会標茶郷土館	郷土館講座「軍馬補充部　歴史の残滓を探訪」	一般	15		標茶区
		27				560	(49)	

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
和　歌　山　研　究　林								
A 1	2005.07.26 ～ 2005.07.28	3	京都大学　全学部	少人数セミナー「森林のつくりだすもの」	１回生	36	(15)	
A 2	2005.09.01 － 2005.12.16	84	京都大学地球環境学堂	インターン研修	１回生	86	(2)	
A 3	2005.09.25 ～ 2005.09.26	2	京都大学，北海道大学	森里海連環学実習ＩＢ	全回生	34	(10)	
C 1	2005.04.22 － 2006.01.20	23	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	ウッズサイエンス	３年生	121	(30)	
C 2	2005.05.30	1	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	総合的な学習の時間「SIMIZU タイム」	１年生	32	(8)	
C 3	2005.08.17	1	清水町教育委員会	海山観察会	児童	32	(7)	小学４年生～中学３年生
C 4	2005.09.04	1	和歌山県立自然博物館	モミ・ツガ林におけるキノコ類の種類の同定	一般	68		
C 5	2005.10.21	1	清水町立八幡小学校	総合的な学習の時間「森林体験活動」	５年生	28	(7)	
		116				437	(79)	

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
上　賀　茂　試　験　地								
A 1	2005.04.16	1	京都大学農学部森林科学科・専攻	森林科学科ガイダンスと新入生歓迎会	学生・教員	245	(66)	
A 2	2005.05.16 － 2005.05.23	4	京都大学理学部生物科学系	生物学実習「野外調査法－昆虫の密度推定法」	3 回生	90	(4)	
A 3	2005.06.02 ・ 2005.06.09	2	京都大学農学部森林科学科	森林総合実習及び実習法	3 回生	46	(6)	
A 4	2005.06.08	1	京都大学農学部地域環境工学科	土壌物理学・水環境工学実験 土壌の三相分布測定及び浸入能試験実習	1 回生	17	(1)	
A 5	2005.06.16 － 2005.07.14	4	京都大学農学部森林科学科	森林生物学実験及び実験法	3 回生	96	(4)	
A 6	2005.06.25	1	京都大学　全学部	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1 回生	9	(1)	
A 7	2005.09.12 ～ 2005.09.14	3	京都大学フィールド科学教育研究センター，農学研究科	大学院生による「昆虫科学とフィールド研究シンポジウム」（秋の京都で語り合おうin上賀茂試験地）	学生・院生	128	(22)	
A 8	2005.09.28 ～ 2005.09.29	2	京都大学教育学研究科	シニアキャンパス 2005	受講生	48	(9)	
A 9	2005.10.04	1	京都大学農学部森林科学科	森林科学実習Ⅳ	2 回生	54	(1)	
A10	2005.10.21	1	京都大学農学部森林科学科	樹木の超微形態観察及び観察法	3 回生	12	(3)	
A11	2005.12.14	1	京都大学農学部森林科学科	生態学実験及び実験法	3 回生	21	(1)	
B 1	2005.04.01 － 2006.03.31	3	京都精華大学人文学部環境社会学科	自然教育論	1～3 回生	76	(3)	
B 2	2005.05.13 ・ 2005.12.02	2	京都造形芸術大学環境デザイン学科	ランドスケープ計画Ⅲ・Ⅳ　名園実習	3 回生	61	(6)	
B 3	2005.05.31 ～ 2005.06.04	5	京都精華大学芸術学部	総合デザイン基礎 1	1 回生	46	(1)	
B 4	2005.06.08	1	京都精華大学人文学部環境社会学科	森林マネジメント	2，3 回生	15	(1)	
B 5	2005.07.08	1	京都府立大学農学部森林科学科	森林植物学実習	3 回生	32	(2)	
B 6	2005.07.30	1	京都精華大学人文学部環境社会学科	自然観察指導員講習会	1～3 回生外	74	(9)	
B 7	2005.10.30 ～ 2005.11.01	3	京都精華大学人文学部環境社会学科	ネイチャーゲーム初級指導員講習会	1～3 回生	84	(3)	
C 1	2005.04.23	1	なし	春の一般公開自然観察会	一般	37	(5)	応募者 45 名
C 2	2005.04.25	1	JTB カルチャーサロン	森と里と海のつながり	受講生	7	(1)	フィールド研提携講座
C 3	2005.05.18	1	株式会社大伸社企画制作部	環境教育プログラムのご案内　森林への招待	一般	20	(1)	
C 4	2005.05.21	1	シニア自然大学マイスターコース	森林生態系における鳥類の役割観察	受講生	33		
C 5	2005.09.23	1	大阪教育大学附属高校平野校舎	「樹木がわかる林学実習」	1～3 年生	27		文部科学省 SPP 事業
C 6	2005.09.27	1	シニア自然大学高等科	植物観察	受講生	39		
C 7	2005.10.01	1	羽曳野市立誉田中学校	「樹木がわかる林学実習・入門編」	1，2 年生	20		文部科学省 SPP 事業
C 8	2005.11.19	1	なし	秋の一般公開自然観察会	一般	32	(5)	応募者 64 名
C 9	2005.12.04	1	京都府ネイチャーゲーム協会	ネイチャーゲーム京都府大会	一般	40		
C10	2006.02.04	1	なし	冬の炭焼き体験会	一般	28	(6)	
C11	2006.02.19	1	京都府ネイチャーゲーム協会	ネイチャーゲーム京都府大会Ⅱ	一般	44		
		48				1,481	(161)	

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
徳　山　試　験　地								
C 1	2005.08.29 － 2005.10.28	51	㈳全国社寺等屋根工事技術保存会	檜皮採取技能士養成研修	受講生	153		

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
北　白　川　試　験　地								
A 1	2005.04.20 － 2005.09.20	18	京都大学　全学部	少人数セミナー 「有機農業の可能性…持続可能な農業をめざして」	1 回生	162	(18)	
A 2	2005.04.20	1	京都大学農学部地域環境工学科	土壌物理学・水環境工学実験　土壌三相分布測定	3 回生	20	(1)	
A 3	2005.04.26 － 2005.06.14	3	京都大学農学部森林科学科	森林科学実習Ｉ　樹木及び昆虫類の観察及び採集	2 回生	83	(3)	
A 4	2005.06.22 － 2005.06.30	4	京都大学農学部森林科学科	森林生物学実験及び実験法 樹木及び昆虫類の観察及び採集	3 回生	85	(4)	
A 5	2005.11.10 ・ 2005.11.17	2	京都大学農学部森林科学科	生態学実験及び実験法 樹木及び昆虫類の観察及びサンプリング	3 回生	29	(2)	
A 6	2005.12.16	1	京都大学農学部森林科学科	森林植物学　樹木分類・識別実習	3 回生	26	(1)	
		29				405	(29)	

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
紀　伊　大　島　実　験　所								
A 1	2005.08.22 ～ 2005.08.26	5	京都大学　全学部	少人数セミナー 「森里海のつながりを清流古座川に見る」	1 回生	55	(5)	
A 2	2005.09.04 ～ 2005.09.08	5	京都大学地球環境学堂	里域植生保全論	院生	35	(5)	
A 3	2005.09.12 ～ 2005.09.16	5	京都大学農学部	植物調査法と実習	2 回生等	105	(5)	
A 4	2005.09.26 ～ 2005.09.27	2	京都大学，北海道大学	森里海連環学実習ＩＢ	全回生	34	(10)	
A 5	2005.10.28 ～ 2005.10.30	3	京都大学自然科学思春期の会	第 2 回（串本紀伊大島）大会ならびに里域保全実習	学生・院生	57	(3)	
A 6	2005.11.18 ～ 2005.11.21	4	京都大学フィールド科学教育研究センター， 農学研究科 ，理学研究科等	21 世紀 COE プログラム「古座川塾」	学生・院生	108	(6)	
C 1	2005.08.05 ～ 2005.08.07	3	社団法人国土緑化推進機構等	森林環境教育ワークショップ	一般	34	(5)	
C 2	2005.08.08	1	串本町教育研究会理化部会	紀伊大島における里域保全	小中教員	11	(1)	
C 3	2005.08.18 ～ 2005.08.19	2	和歌山県立田辺商業高校　生物部	紀伊大島体験学習会	高校生等	20	(6)	
C 4	2005.09.09	1	串本町立田原中学校	南紀の里域	3 年生	7	(2)	
		31				466	(48)	

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
舞　鶴　水　産　実　験　所								
A 1	2005.07.01 ～ 2005.07.03	3	京都大学　全学部	少人数セミナー「海の環境と沿岸資源生物」「魚類心理学入門」	1 回生	42		
A 2	2005.08.09 ～ 2005.08.12	4	京都大学　全学部	森里海連環学実習ＩＡ	全回生	48	(2)	
A 3	2005.08.19 ～ 2005.09.01	14	京都大学農学部	海洋生物科学技術論と実習Ｉ，Ⅱ，Ⅲ	2，3 回生	269	(33)	
A 4	2005.09.12 ～ 2005.09.15	4	京都大学農学部・農学研究科	水理学実験実習	3 回生・修士	148	(8)	
A 5	2005.11.10	1	京都大学農学部・農学研究科	水産実験所・増殖学・生物環境学合同ゼミ	学部生・院生	39	(3)	
A 6	2006.01.21 － 2006.02.23	3	京都大学情報学研究科，近畿大学	バイオギングに関するワークショップ	大学院生	51	(3)	
B 1	2005.09.12 ～ 2005.09.17	6	岐阜大学教育学部	臨海実習	2 回生	90	(12)	
C 1	2005.05.02	1	舞鶴市立新舞鶴小学校	見学実習	4 年生	114	(5)	
C 2	2005.07.21 ～ 2005.07.23	3	京都教育大学附属高等学校	1 年 SSH クラス臨海実習	1 年生	69	(12)	
C 3	2005.07.26	1	京都府立西舞鶴高等学校	臨海実習（海洋調査）	2 年生	15	(4)	文部科学省 SPP 事業
C 4	2005.08.12 ～ 2005.08.13	2	日本ボーイスカウト京都連盟	環境学習	会員	90		
C 5	2005.08.17	1	綾部市学校教育研究会	日本海の水産資源と現状	会員	24		
C 6	2005.08.27	1	舞鶴市民	海からの見学会	市民	35		
C 7	2005.10.07 ～ 2005.10.11	5	兵庫県立姫路飾西高等学校	体験実習推進事業	1 年生	120	(11)	
C 8	2005.10.27	1	京都府立海洋高等学校	総合学習	3 年生	20	(3)	
		50				1,174	(96)	

番号	期　　間	日数	所　　属	科 目 名	対象者	延人数	内指導教員等	備　　考
瀬　戸　臨　海　実　験　所								
A 1	2005.04.15 ～ 2005.04.16	2	京都大学理学研究科生物科学専攻	INTER LAB	1 回生	86		
A 2	2005.05.01 ～ 2005.05.05	5	京都大学　全学部	少人数セミナー「海岸生物の生活史」	1 回生	45		
A 3	2005.07.26 ～ 2005.07.29	4	京都大学総合人間学部	海洋化学実習	3 回生～M1	76		
A 4	2005.07.29 ～ 2005.08.01	4	京都大学　全学部	少人数セミナー「海洋生物の多様性を探る」	1 回生	12		
A 5	2005.08.13 ～ 2005.08.14	2	京都大学生命科学研究科ほか	瀬戸バイオサロン	4 回生～M1	12		
A 6	2005.08.15 ～ 2005.08.22	8	京都大学理学部	臨海実習第 1 部（前半）	2～4 回生	32		
A 7	2005.08.28 ～ 2005.09.01	5	京都大学　全学部	探求型化学実験（全学共通科目）	2 回生～M2	80		
A 8	2005.09.10 ～ 2005.09.11	2	京都大学防災研究所	気象海象観測実験	M1～M2	44		
A 9	2005.09.12 ～ 2005.09.16	5	京都大学　全学部	少人数セミナー「節足動物学入門」	1 回生	15		
A10	2005.09.16 ～ 2005.09.23	8	全国大学	公開臨海実習（学部生対象）	他大学生	88		
A11	2005.09.16 ～ 2005.09.23	8	京都大学理学部	臨海実習第 1 部（後半）	2～3 回生	72		
A12	2005.09.27 ～ 2005.09.30	4	京都大学，北海道大学	森里海連環学実習ＩＢ	全回生	51		
A13	2006.02.27 ～ 2006.03.02	4	京都大学理学部	生物学実習Ⅱ（海洋生物学コース）	1～3 回生	110		
A14	2006.03.04 ～ 2006.03.09	6	京都大学理学部	臨海実習第 3 部	2～4 回生	30		
A15	2006.03.26 ～ 2006.04.01	7	全国大学	公開臨海実習（学部生対象）	他大学生	56		

A16	2006.03.26 ～ 2006.04.01	7	京都大学理学部	臨海実習第 2 部	2 回生	49		
B 1	2005.04.08 ～ 2005.04.12	5	和歌山大学教育学部	臨海実習 A（植物）	3 回生	50		
B 2	2005.05.23 ～ 2005.05.28	6	奈良女子大学理学部	臨海実習Ⅱ	3 回生	144		
B 3	2005.06.07 ～ 2005.06.11	5	奈良教育大学教育学部	野外実習 A－Ⅱ（臨海実習）	3 回生	83		
B 4	2005.06.17 ～ 2005.06.22	6	大阪教育大学教育学部	臨海実習	3 回生	120		
B 5	2005.06.22 ～ 2005.06.26	5	和歌山大学教育学部	臨海実習 B（動物）	3 回生	55		
B 6	2005.07.04 ～ 2005.07.10	7	大阪市立大学理学部	臨海実習	3 回生	80		
B 7	2005.07.26 ～ 2005.07.29	4	信州大学理学部	計測化学特論	4 回生～M1	32		
B 8	2005.08.05 ～ 2005.08.09	5	関西学院大学理工学部	臨海実習	1 回生	145		
B 9	2005.08.09 ～ 2005.08.12	4	滋賀県立大学環境科学部	自然環境特別実習	2 回生～M2	109		
B10	2005.09.01 ～ 2005.09.05	5	京都教育大学教育学部	生物学夏期実習Ⅱ	2～4 回生	120		
B11	2005.09.05 ～ 2005.09.10	6	大阪大学理学部	生物学臨海実習	2 回生	128		
B12	2005.09.13 ～ 2005.09.16	4	滋賀大学教育学部	臨海実習	2～3 回生	64		
B13	2005.10.01 ～ 2005.10.03	3	大阪千代田短期大学部	磯観察実習	2 回生	42		
B14	2005.10.15 ～ 2005.10.16	2	放送大学	第 2 学期面接授業	受講生	40		
B15	2006.03.20 ～ 2006.03.23	4	龍谷大学経営学部	環境サイエンスコース　環境フィールドワーク	4 回生	16		
C 1	2005.05.22	1	和歌山県立田辺商業高等学校	NaGISA による海草群島の調査	高校生	13		
C 2	2005.06.05	1	和歌山県立田辺商業高等学校	NaGISA による海草群島の調査	高校生	15		
C 3	2005.07.01 ～ 2005.07.02	2	滋賀県立膳所高等学校ほか	SPS 連携プログラム教員研修	高校教員	38		
C 4	2005.07.19 ～ 2005.07.21	3	フルブライト	日米共同理科教育ネットワークプログラム	中高生	42		
C 5	2005.07.22 ～ 2005.07.25	4	滋賀県立膳所高等学校	第 36 回生物実習旅行	高校生	100		
C 6	2005.07.22	1	大阪府立豊中高等学校	研究見学	高校生	10		
C 7	2005.08.02 ～ 2005.08.04	3	兵庫県立尼崎小田高等学校	サイエンスリサーチ科臨海実習	高校生	21		
C 8	2005.08.22 ～ 2005.08.23	2	吹田市立南千里中学校	潮だまりの生物	中学教員	20		
C 9	2005.08.23 ～ 2005.08.25	3	奈良女子大学附属中等学校	サイエンス「夏の学校」実習	中学生	90		
C10	2005.10.15 ～ 2005.10.16	2	立命館宇治高等学校	海洋生物の系統分類と多様性	高校生	60		
C11	2005.10.28	1	和歌山県立田辺高等学校	SPP プログラム	高校生	25		文部科学省 SPP 事業
C12	2005.11.24 ～ 2005.11.30	7	白浜町立白浜中学校	職業体験学習	中学生	20		
		182				2,540		

3. フィールド研教員の活動の記録

（1）新人紹介

基礎海洋生物学部門　海洋生物進化形態学分野

深見　裕伸 助手

2005年4月にフィールド研の瀬戸臨海実験所に助手として赴任した深見裕伸です。瀬戸臨海実験所に来る前は，中米のパナマ共和国に3年半，アメリカのカリフォルニア州に1年半の丸5年間，ポスドクとして海外生活を送っており，その間ずっとカリブ海の造礁サンゴの生態や進化について研究を行ってきました。加えて，修士と博士の間も沖縄の造礁サンゴの研究を行ってきたため，サンゴの研究ばかり10年ほどしていることになります。これまでの海外生活で特に思い出深いのが，パナマでの生活です。パナマはラテンの国ですから，日本とはまるっきり文化が異なり，みな非常に陽気で（あまりに陽気すぎて仕事をしないのは考えものでしたが），日本人には憚られるほどスキンシップがあり，最初の頃はどぎまぎしたのを覚えています。

今春，久しぶりに帰国し，瀬戸臨海実験所のある和歌山県は私の生まれ故郷ということもあって，非常に懐かしく感じています。嬉しいことに，この実験所は目の前がフィールドである上に，そこには多くの造礁サンゴが生息しており，サンゴ研究を行う私にとって，ここはまさに理想的な実験所といえます。

ここでの私の研究についてですが，やはり造礁サンゴを主体に研究を行います。和歌山県はそれほど有名ではないのですが，温帯域屈指の大規模なサンゴ集落があります。しかし，温帯域のサンゴの知見は乏しく，詳しいことは分かっていません。そこでまず，実態を知るために，和歌山，特に実験所周辺のサンゴの成長および分布が水温などの環境要因とどのように関連しているのかを調査しながら，サンゴの保全を含め，地域の中での役割などを探っていければと考えています。特に，和歌山は地元なので，研究を通じて地域との交流も深めていきたいと思います。また，和歌山などの温帯域は，造礁サンゴが生存できる限界域であるため，熱帯域の造礁サンゴと比較する上で非常に興味深い地域です。そこで，熱帯から温帯にかけて連続的に形態や遺伝的変異の研究を行い，日本国内もしくは太平洋全体で見た造礁サンゴの分類や進化についても研究を行っていく予定です。

(2) 研究成果

■フィールド科学教育研究センター紀要

□FSERC News No. 5 2005年7月

－目　次－

ニュース：フィールド研社会連携教授－畠山重篤氏，C.W. ニコル氏を迎えて－（田中　克）
研究ノート：WakWak 創世記－若狭湾河口域プロジェクト・レポート－（上野正博）
　　種子生産調査（森林生態研究プロジェクト）レポート（嵜元道徳）
教育ノート：高校生対象スプリングサイエンスキャンプ（山下　洋）
フィールド研究及び研究分野紹介：里域ステーション　徳山試験地（竹内典之）
新人紹介：基礎海洋生物学部門　海洋生物進化形態学分野（深見裕伸）
フィールド散歩：写真（6月中旬～7月上旬の各施設，及びその周辺の動・植物）
予　　定：○公開講座 2005「森のしくみとその役割－森にくらして－」
　　○第2回昆虫 COE フィールド教育プログラム
　　大学院生による昆虫科学とフィールド研究シンポジウム「秋の京都で語り合おう in 上賀茂試験地」

□FSERC News No. 6 2005年11月

－目　次－

ニュース：第1回由良川フォーラム（山下　洋）
研究ノート：北海道大学，京都大学，琉球大学　フィールド科学シンポジウム（竹内典之）
教育ノート：リレー講義「海域・陸域統合管理論」（白山義久）
　　文科省　豊かな体験活動推進事業
　　「高校生向け森里海連環学実習 in 芦生＆舞鶴」（上野正博）
フィールド研究及び研究分野紹介：森林ステーション　北海道研究林（安藤　信）
フィールド散歩：写真（11月上旬の各施設，及びその周辺の動・植物）
予　　定：「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」第2回時計台対話集会

□FSERC News No. 7 2006年3月

－目　次－

ニュース：フィールド科学教育研究センター第2回時計台対話集会
　　「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」を開催（竹内典之）
研究ノート：古座川合同調査　第1回～第3回の概要報告（梅本信也）
　　第6回国際異体類生態学シンポジウム（田川正朋）
教育ノート：全学共通科目「森里海連環学」,「海域・陸域統合管理論」
　　合同パネルディスカッション（山下　洋）
フィールド研究及び研究分野紹介：里域ステーション　上賀茂試験地（中島　皇）
　　里域ステーション　北白川試験地（西村和雄）
フィールド散歩：写真（真冬の各施設，及びその周辺の様子）

◆ 著書

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

柴田昌三：「里山」（日本緑化工学会），環境緑化の事典，朝倉書店，東京：323-330，2005.

■里地生態保全学分野

梅本信也：「清流古座川センダン物語」，大伸社，大阪市：1-14，2005.

梅本信也：「紀伊大島里域俳句集」，ユニバース印刷，長岡京市：1-107，2005.

■河口域生態学分野

田中　克：「森里海連環学と木の文化再生」（天野礼子・C.W. ニコル・立花和平編），緑の時代をつくる，旬報社，東京：216-223，2005.

田川正朋：「異体類の変態」，海洋生命系のダイナミクス４　海の生物資源，東海大学出版会，秦野：102-119，2005.

中山耕至：「分子情報による集団および系統分析」（谷内　透ほか 編），魚の科学事典，朝倉書店，東京：13-18，2005.

■里海生態保全分野

山下　洋・朝日田 卓：「魚類仔稚魚の捕食者としてのベントス」（林　勇夫 編），ベントスと漁業，恒星社厚生閣，東京：62-70，2005.

山下　洋：「異体類の加入量変動」（渡邊良朗 編），海洋生命系のダイナミクス４　海の生物資源，東海大学出版会，秦野：272-285，2005.

甲斐嘉晃：「条鰭類」（谷内　透ほか 編），魚の科学事典，朝倉書店，東京：36-67，2005.

■沿岸資源管理学分野

益田玲爾：「仔稚魚の行動特性と生き残り」（渡邊良朗 編），海洋生命系のダイナミクス４　海の生物資源，東海大学出版会，秦野：88-101，2005.

益田玲爾：「行動」（谷内　透ほか 編），魚の科学事典，朝倉書店，東京：197-211，2005.

上野正博：「ベントスの異常発生が漁業に与える影響」（林　勇夫・中尾　繁 編），ベントスと漁業，恒星社厚生閣，東京：101-112，2005.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

久保田 信：「神秘のベニクラゲと海洋生物の歌“不老不死”を歌う」，不老不死研究会，白浜：7 トラック，2005.

■海洋生物多様性保全分野

Rigby, P.R., Kato, T. and Shirayama, Y.: An introduction to the Natural Geography in Shore Area (NaGISA) project. (Miloslavitch, P. (ed.)), Carribean Biodiversity: 255–257, 2005.

Caldeira, K., Akai, M., Brewer, P., Chen, B., Haugan, P., Iwama, T., Johnston, P., Kheshgi, H., Li, Q., Ohsumi, T., Portner, H., Sabine, C., Shirayama, Y. and Thomson, J.: Capter 6. Ocean Storage (Metz, B., Davidson, O., de Coninck, H., Loos, M. and Meyer, L. (eds.)), IPCC Special Report on Carbon Dioxide Capture and Storage., Cambridge University Press, Cambridge: 277–318, 2006.

◆ 学会誌（原著論文・総説）

森林生物圏部門

■森林生態保全学分野

Hobara, S., Koba, K., Osono, T., Tokuchi, N., Ishida, A. and Kameda, K.: Nitrogen and phosphorus enrichment and balance in forests colonized by cormorants: Implications of the influence of soil adsorption., Plant and Soil 268: 89-101, 2005.

Tateno, R., Osada, N., Terai, M., Tokuchi, N. and Takeda, H.: Inorganic nitrogen source utilization by *Fagus crenata* on different soil types., Trees 19: 477-481, 2005.

Ishimaru, K., Tokuchi, N., Osawa, N., Kawamura, K. and Takeda, H.: Behavior of four broad-leaved tree species used to revegetate eroded granite hill slopes., Journal of Forest Research.: 27-34, 2005.

Purwanto, R.H. and Tokuchi, N.: Production and seasonal patterns of leaf litter in moist deciduous forests in eastern Java, Indonesia., Tropics: 14, 371-376, 2005.

■森林環境情報学分野

芝　正己：持続可能な森林管理への森林認証および森林収穫実行規約の互換性，日本森林学会誌 87(4)：358-363，2005.

芝　正己・石川知明・石堂慶彦：長伐期育成循環型人工林の収穫計画・配分モデルについて，森林利用学会誌 19(4)：309-314，2005.

Shiba, Masami: A GIS-based interactive spatial decision support system for SFM-oriented timber harvest scheduling/allocation strategies in plantation forests, Proceedings Council on Forest Engineering: COFE 28th Annual Meeting, Fortuna, CA USA: 61-73, 2005.

Shiba, Masami: Status quo of forestry circumstances in Japan and new trends of wood logistics based upon the international forest certification and CoC-labeling schemes, Proceedings of Seminar on the Sustainable Management and Utilization of Japanese Cedar, Korea Forest Research Institute (KFRI), Seogwipe KOREA: 40-74, 2005.

Shiba, Masami and Itaya, Akemi: Using eCognition for improved forest management and monitoring systems in precision forestry, Proceedings of the International Precision Forestry Symposium, Stellenbosch University, South Africa: 351-359, 2006.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

小川菜穂子・深町加津枝・奥　敬一・柴田昌三・森本幸裕：丹後半島におけるササ葺き集落の変遷とその継承に関する，ランドスケープ研究 68(5)：627-632，2005.

阿部祐平・柴田昌三・中西麻美・大澤直哉：ヒノキ林化した都市近郊二次林における木本種の埋土種子と散布種子，日本緑化工学会誌 31(1)：3-8，2005.

Kosugi, Yoshiko, Tanaka, Hiroki, Takanashi, Satoru, Matsuo, Naoko, Oote, Nobuhito, Shibata, Shozo and TaniI, Mako: Three years of carbon and energy fluxes from Japanese evergreen broad-leaved forest, Agricultural & Forest Meteorology, 132: 329-343, 2005.

Osawa, Naoya, Terai, Atsumi, Hirata, Keiichi, Nakanishi, Asami, Makino, Ayumi, Sakai, Shinjiro and Shibata Shozo: Logging impacts on forest carabid assemblages in Japan, Canadian Journal of Forest Research, 35: 2698–2708, 2005.

笹木義雄・柴田昌三・森本幸裕：瀬戸内海の半自然海岸および人工海岸に成立する海浜植生の種組成予測と健全性，日本緑化工学会誌 31(3)：364–372，2005.

Shibata, Shozo: Effect of density control on tree growth at ecological tree planting sites in Japan, Landscape and Ecological Engineering, 2(1): 20–31, 2006.

■河口域生態学分野

Suzuki, K., Kasai, A., Nakayama, K. and Tanaka, M.: Differential isotopic enrichment and half-life of stable carbon and nitrogen isotopes among tissues observed in a diet switch experiment of Japanese temperate bass (*Lateolabrax japonicus*) juveniles: implications for analyzing migration., Canadian Journal of Fisheries and Aquatic Science, 62: 671–678, 2005.

Islam, Md. S. and Hibino, M. and Tanaka, M.: Distribution and dietary relationships of Japanese temperate bass (*Lateolabrax japonicus*) juveniles with two contrasting copepod assemblages in estuarine nursery grounds in Ariake Bay, Japan., Journal of Fish Biology, 68: 569–593, 2006.

Islam, Md. S., Hibino, M., Nakayama, K. and Tanaka, M: Condition of larval and early juvenile Japanese temperate bass *Lateolabrax japonicus* related to spatial distribution and feeding in an ocean-estuarine gradient in Ariake Bay., Journal of Sea Research, 55: 141–155, 2005.

Islam, Md. S., Tanaka M.: Nutritional condition, starvation status and growth of early juvenile Japanese sea bass (*Lateolabrax japonicus*) related to prey distribution and feeding in the nursery ground., Journal of Experimental Marine Biology and Ecology, 323: 172–183, 2005.

Islam, Md. S., Hibino, M., Ohta, T., Nakayama, K. and Tanaka, M.: Environmental effect on diet, fecundity and condition of an endangered fish *Neosalanx reganius* (Osmeriformes) in the Chikugo Estuary, in the upper Ariake Bay, Japan., Aquatic Living Resources, 19: 59–68, 2006.

Tagawa, M. and Aritaki, M.: Production of symmetrical flatfish by controlling the timing of thyroid hormone treatment in spotted halibut *Verasper variegatus.,* General and Comparative Endocrinology, 141: 184–189, 2005.

木下篤彦・藤田正治・田川正朋・水山高久・澤田豊明：排砂に伴う濁りが魚類に与える生理的影響とその評価法，砂防学会誌 58：34–43，2005.

田川正朋：変態期の左右性決定への甲状腺ホルモンの関与，日本水産学会誌 71(6)：1000–1001，2005.

Kakehi, Y., Nakayama, K., Watanabe, K. and Nishida, M.: Inheritance of AFLP markers and their utility in population genetic analysis of ayu *Plecoglossus altivelis,* Journal of Fish Biology, 66: 1529–1544, 2005.

小路　淳：サワラの生活史初期における摂食戦略と資源加入機構に関する研究，日本水産学会誌 71：515–518，2005.

Shoji, J. and Tanaka, M.: Daily ration and prey size of juvenile piscivore, Japanese Spanish mackerel., Journal of Fish Biology, 67: 1107–1118, 2005.

Sharma, J.G., Masuda, R., Tanaka, M.: Ultrastructural study of skin and eye of UV-B irradiated ayu *Plecoglossus altivelis,* Journal of Fish Biology, 67: 1646–1652, 2005.

Shoji, J., Yamashita, Y., Masuda, R. and Tanaka, M.: Predation on fish larvae by moon jellyfish *Aurelia aurita* under low dissolved oxygen concentrations., Fisheries Science, 71: 748–753, 2005.

Shoji, J. and Tanaka, M.: Larval growth and mortality of Japanese Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius* in the central Seto Inland Sea, Japan., Journal of the Marine Biological Association of UK, 85: 1253–1261, 2005.

Shoji, J. and Tanaka, M.: Distribution, feeding condition and growth of Japanese Spanish mackerel (*Scomberomorus niphonius*) larvae in the Seto Inland Sea., Fishery Bulletin, 103: 371–379, 2005.

Shoji, J., Masuda, R., Yamashita, Y. and Tanaka, M.: Effect of low dissolved oxygen concentrations on behavior and predation rates on fish larvae by moon jellyfish *Aurelia aurita* and by a juvenile piscivore, Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius.,* Marine Biology, 147: 863–868, 2005.

Shoji, J., North, E.W. and Houde, E.D.: The feeding ecology of white perch *Morone americana* (Pisces) larvae in the Chesapeake Bay estuarine turbidity maximum: the influence of physical conditions and prey concentrations., Journal of Fish Biology, 66: 1328–1341, 2005.

小路　淳・鈴木啓太・田中　克：2005 年春季の筑後川河口域高濁度水塊における物理・生物環境に対する潮汐および河川流量の影響－スズキ成育場としての評価，水産海洋研究 70：31–38，2006.

■里海生態保全学分野

Sekino, M., Saitoh, K., Yamada, T., Hara, M. and Yamashita, Y.: Genetic tagging of released Japanese flounder (*Paralichthys olivaceus*) based on polymorphic DNA markers, Aquaculture, 244: 49–61, 2005.

Xie, S., Watanabe, Y., Saruwatari, T., Masuda, R., Yamashita, Y., Sassa, C. and Konishi, Y.: Growth and morphological development of sagittal otoliths of larval and early juvenile *Trachurus japonicus,* Jounal of Fish Biology, 66: 1704–1719, 2005.

Shoji, J., Masuda, R., Yamashita, Y. and Tanaka, M.: Effect of low dissolved oxygen concentrations on behavior and predation rates on fish larvae by moon jellyfish *Aurelia aurita* and by a juvenile piscivore, Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius,*Marine Biology, 147: 863–868, 2005.

Shoji, J., Yamashita, Y., Masuda, R. and Tanaka, M.: Predation on fish larvae by moon jellyfish *Aurelia aurita* under low dissolved oxygen concentrations, Fisheries Science, 71: 748–753, 2005.

Okumura, Y., Nagasaka, H., Kohno, Y., Kamiyama, K., Suzuki, T. and Yamashita, Y.: Sedimentation rate of dioxins from the mid-1980s to 2002 in a sediment core collected off Ishinomaki in Sendai Bay, Japan,La mer, 43: 33–42, 2005.

Bolasina, S.N., Perez, A.N. and Yamashita, Y.: Digestive enzymes activity during ontogenetic development and effect of starvation in Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus,*Aquaculture, 252: 503–515, 2006.

田中庸介・大河俊之・山下　洋・田中　克：ヒラメ *Paralichthys olivaceus* 稚魚の食物組成と摂餌強度にみられる地域性，日本水産学会誌 72：50–57，2006.

阿部佑平・柴田昌三・中西麻美・大澤直哉：ヒノキ林化した都市近郊二次林における木本種の埋土種子と散布種子，日本緑化工学会誌 31(1)：3–8，2005.

Osawa, Naoya, Terai, Atsumi, Hirata, Keiichi, Nakanishi, Asami, Makino, Ayumi, Sakai, Shinjiro, Shibata, Shozo: Logging impacts on forest carabid assemblages in Japan, Canadian Journal of Forest Research, 35(11): 2698–2708, 2005.

■沿岸資源管理学分野

Shoji, J., Masuda, R., Yamashita, Y. and Tanaka, M.: Effect of low dissolved oxygen concentrations on behavior and predation rates on fish larvae by moon jellyfish *Aurelia aurita* and by a juvenile piscivore, Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius,*Mariene Biology, 147: 863–868, 2005.

Shoji, J., Yamashita, Y., Masuda, R. and Tanaka, M.: Predation on fish larvae by moon jellyfish *Aurelia aurita* under low dissolved oxygen concentrations, Fisheries Science, 71: 748–753, 2005.

Xie, S., Watanabe, Y., Saruwatari, T., Masuda, R., Yamashita, Y., Sassa, C. and Konishi, Y.: Growth and morphological development of sagittal otoliths of larval and early juvenile *Trachurus japonicus* (Temminck et Schlegel), Journal of Fish Biology, 66: 1704–1719, 2005.

Sharma, J.G., Masuda, R., Tanaka, M.: Ultrastructural study of skin and eye of UV-B irradiated ayu *Plecoglossus altivelis,* Journal of Fish Biology, 67: 1646–1652, 2005.

Akira, Iguchi, Hiroharu, Ito, Masahiro, Ueno, Tsuneo, Maeda, Takashi, Minami and Isao, Hayashi: Morphological analysis of a deep-sea whelk *Buccinum tsubai* in the Sea of Japan, FISHERIES SCIENCE, 71(5): 823–828, 2005.

佐々木猛智・上野正博：京都府舞鶴周辺の海産貝類，ちりぼたん 36(3)：71–85，2005.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

Govindarajan, A.F., Piraino, S., Gravili, C. and Kubota, Shin: Species identification of bivalve-inhabiting marine hydrozoans of the genus *Eugymanthea,* Invertebrate Biology, 124(1): 1–10, 2005.

Oiso, N., Fukai, K., Ishii, M., Ohgushi, T.and Kubota, Shin: Jellyfish dermatitis caused by *Porpita pacifica,* a sign of global warming?, Contact dermatitis, 52: 232–233, 2005.

Kawamura, M. and Kubota, Shin: First Occurrence of *Euphysora gemmifera* (Cnidaria, Hydrozoa, Corymorphidae) in Japan, Biogeography, 7:31-33, 2005.

Kubota, Shin: Distinction of two morphotypes of *Turritopsis nutricula medusae* (Cnidaria, Hydrozoa, Anthomedusae) in Japan, with reference to their different abilities to revert to the hydroid stage and their distinct geographical distributions: Biogeography, 7: 41–50, 2005.

Oiso, N., Fukai, K., Ishii, M., Okita, K. and Kubota, Shin: Systemic reaction with Iramo scyphopolyp, *Stepahnoscyphus racemosum* Komai, 29: 673–687, 2005.

久保田 信・小林亜玲・岩永節子・大城直雅・鳥越兼治：沖縄島およびその周囲の離島におけるカイヤドリヒドラ類（ヒドロ虫綱，軟クラゲ目）のポリプの地理的分布，沖縄生物学会会誌 43：65–70，2005.

久保田 信・興田喜久男・田名瀬英朋・鯵坂哲朗：フジツボ類と海藻類が着生した生きたマガキガイの和歌山県白浜町“北浜”への打ち上げ，漂着物学会誌 3：45–46，2005.

久保田 信・木村和寛・田名瀬英朋：日本海沿岸に新たに漂着したムラサキダコ，漂着物学会誌 3：47，2005.

久保田 信・岸田拓士：和歌山県西牟婁郡白浜町臨海“北浜”におけるヤクシマダカラ（タカラガイ科）の成貝貝殻の打ち上げ数の季節変化，漂着物学会誌 3：48–49，2005.

河村真理子・久保田 信：和歌山県田辺湾におけるベニクラゲ（ヒドロ虫綱，花クラゲ目）のクラゲ世代の季節消長，Bulletin of the Biogeogrphical Society of Japan，60：25–30，2005.

久保田 信：退化しないクラゲ口柄基部より走根を伸張しポリプに若返ったベニクラゲ（ヒドロ虫綱，花クラゲ目）の成熟雄，Bulletin of the Biogeogrphical Society of Japan，60：31-34，2005.

足立　文・崎山直夫・久保田 信：神奈川県江ノ島湘南港で採集されたヒルムシロヒドラ（ヒドロ虫綱，花クラゲ目，モエリシア科）の成熟クラゲ，Bulletin of the Biogeogrphical Society of Japan，60：35-38，2005.

久保田 信・北田博一・水谷精一：福島産ベニクラゲ（ヒドロ虫綱，花クラゲ目）のクラゲの生物学的観察，Bulletin of the Biogeogrphical Society of Japan，60：39-42，2005.

■海洋生物進化形態学分野

宮崎勝己：クモのようでクモでない－ウミグモ類のかたちと生きざまの不思議，遺伝 59(3)：9-12，2005.

Fukami, Hironobu and Knowlton, Nancy: Analysis of complete mitochondrial DNA sequences of three members of the *Montastraea annularis* coral species complex (Cnidaria, Anthozoa, Scleractinia), Coral Reefs, 24(3): 410-417, 2005.

■海洋生物多様性保全学分野

Shirayama, Y. and H., Thornton: Effect of increased atmospheric CO_2 on shallow water marine benthos, Journal of Geophysical Research, 110: 2005.

Shimanaga, M. and Shirayama, Y.: Precopulatory mate guarding of interstitial *Phyllopodopsyllus* sp. (Copepoda： Harpacticoida) in Otsuchi Bay, Northeastern Japan., Benthos Research, 60: 39-44, 2005.

Thanh, P.D., Wada, K., Sato, M. and Shirayama, Y.: Effects of resource availability, predators, conspecifics and heterospecifics on decorating behaviour by the majid crab *Tiarinia cornigera.,* Marine Biology, 147: 1191-1199, 2005.

Shimanaga, M., Shirayama, Y. and Kitazato, H.: Seasonal patterns of reproductive activities among deep-sea benthic copepod species in the bathyal Sagami Bay, central Japan., Hydrobiologia. 533(1): 29-39, 2005.

Ishida, H., Watanabe, Y., Fukuhara, T., Kaneko, S., Furusawa, K. and Shirayama, Y.: *In situ* enclosure experiment using a benthic chamber system to assess the effect of high concentration of CO_2 on deep-sea benthic communities., Journal of Oceanography, 61: 835-843, 2005.

Shimode, S. and Shirayama, Y.: Diel vertical migration and life strategies of two phytal-dwelling harpacticoids, *Ambunguipes rufocincta* and *Eudactylops spectabilis.,* Plankton Benthos Research, 1: 42-53, 2006.

Watanabe, Y., Yamaguchi, A., Ishida, H., Harimoto, T., Suzuki, S., Sekido, Y., Ikeda, T., Shirayama, Y., Takahashi, M., Ohsumi, T. and Ishizaka, J.: Lethality of increasing CO_2 levels on deep-sea copepods in the Western North Pacific., Journal of Oceanography, 62: 185-196, 2006.

◆ 学内・所内誌

森林生物圏部門

■森林資源管理学分野

Vegetation Sub-Group: Effect of climate changes on the species composition and productivity of plant communities in the eastern Mediterranean region of Turkey., The Progress Report of ICCAP, the Research Project on the Impact of Climate Change on Agricultural Production System in Arid Area (ICCAP), 7: 71–72, 2005.

Shigenobu, Tamai, Ando, Makoto and Sano, Junji: Stand structure and characteristics of tree growth in plant communities of the eastern Mediterranean region, Turkey., The Progress Report of ICCAP, the Research Project on the Impact of Climate Change on Agricultural Production System in Arid Area (ICCAP), 7: 73–75, 2005.

Sano, Junji, Kato, Keisuke, Tamai, Shigenobu and Ando, Makoto: Effects of Climate Changes on the Species Composition and Vegetation Productivity in Arid Areas -Present patterns and future prospects for potential vegetation in the Eastern Mediterranean Region of Turkey-, Proceeding of the International Workshop for the Research Project on the Impact of Climate Change on Agricultural Production System in Arid Area (ICCAP), 8: 31–34, 2006.

■森林環境情報学分野

Ris, Hadi, Purwanto and Shiba, Masami: Allometric equations for estimating above ground biomass and leaf area of planted teak (*Tectona grandis*) forests under agroforestry management in East Java, Indonesia, FOREST RESEARCH, KYOTO, 76: 1–8, 2005.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

久保田 信：フィールド科学教育研究センター　瀬戸臨海実験所通信
第 1 回「風光明媚で水族館や実験所の島もあって」，教職員情報 44：1，8，2005.

久保田 信：フィールド科学教育研究センター　瀬戸臨海実験所通信　第 2 回「台風の贈り物」，教職員情報 45：8，2005.

久保田 信：フィールド科学教育研究センター　瀬戸臨海実験所通信　第 3 回「あでやかな熱帯系チョウチョウウオ」，教職員情報 46：8，2005.

久保田 信：フィールド科学教育研究センター　瀬戸臨海実験所通信
第 4 回「エチゼンクラゲ，和歌山県田辺湾に世紀の初出現」，教職員情報 47：8，2005.

久保田 信：フィールド科学教育研究センター　瀬戸臨海実験所通信　第 5 回「またもや巨大クラゲ出現」，教職員情報 48：8，2005.

久保田 信：フィールド科学教育研究センター　瀬戸臨海実験所通信
第 6 回「世界の動物 144 万種はたったの 40 門に分類！　－瀬戸臨海実験所水族館で動物門を観察しよう－」，教職員情報 49：8，2005.

久保田 信：授業紹介 1．「ポケット・ゼミ　－海岸生物の生活史－」（南紀白浜所在の瀬戸臨海実験所で開催），共通教育通信 5：4–6，2005.

久保田 信・深見裕伸・内田紘臣：和歌山県田辺湾沿岸海域で 1931 年から 2005 年までに記録された造礁性イシサンゴ類（刺胞動物門，花虫綱，六放サンゴ亜綱）の目録，瀬戸臨海実験所年報 18：32–36，2005.

◆ 一般誌

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

柴田昌三：里山の再生・竹林をどう考える，グリーン・エージ 376：4-7，2005.

Shibata, Shozo: Bamboo resources in Vietnam and its propagation methods, GSGES Asia Platform (Annual Report 2005): 27-29, 2006.

西村和雄：「富士通マネージメントレビュー 228」，富士通経営研修所，静岡：No. 228，22-38，2006.

■里地生態保全学分野

梅本信也：里域と自然域－熊野から 21 世紀を考える－，熊野誌 51：133-137，2005.

梅本信也：紀伊大島の伝統的漁業における竹類利用，富士竹類植物園報告 49：7-12，2005.

■里海生態保全学分野

有馬浩史・藤井恭恵・澤　裕介・中西麻美：13 枚の尾羽を持つシロハラ *Turdus pallidus* の観察報告，Strix 24：193-196，2006.

■沿岸資源管理学分野

益田玲爾：魚類の群れ行動の発達心理学，月刊海洋 37(6)：410-415，2005.

益田玲爾：地域とともに歩む海の研究所，エコソフィア No. 15：28-33，2005.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

岸田拓士・久保田 信：紀伊半島に迷入・漂着する鯨類の特徴－紀伊半島の東海岸と西海岸を比較して－，南紀生物 47(1)：67-68，2005.

久保田 信：和歌山県白浜町番所崎，特に“北浜”に漂着した球形のココヤシ果実の記録，漂着物学会会報（どんぶらこ）12：8，2005.

久保田 信：細長いココヤシ果実をタイ国パタヤ沖ラン島の海岸で発見，漂着物学会会報（どんぶらこ）13：6-7，2005.

久保田 信：幻のインド産カイヤドリヒドラ類，かいなかま 39(2)：43-48，2005.

久保田 信・山田豊隆・武田曜男：瀬戸内海に出現した小型のベニクラゲとその初期ポリプ，南紀生物 47(2)：156，2005.

久保田 信：ベニクラゲ（刺胞動物門，ヒドロ虫綱，花クラゲ目）のクラゲから若いポリプへの水面直下に浮いた状態での稀な若返り，南紀生物 47(2)：190-191，2005.

久保田 信：日本海南部海域におけるカイヤドリヒドラ類（刺胞動物門：ヒドロ虫綱）の分布拡大について，Tanabe Rotary Club Weekly Bulletin，53(27)：2，2005.

河村真理子・久保田 信：田辺湾のクラゲについて，Shirahama Rotary Club Weekly Bulletin，(2195)：1-2，2005.

岸田拓士・久保田 信：紀伊半島沿岸，特に白浜沿岸に漂着・迷入するイルカやクジラ，Shirahama Rotary Club Weekly Bulletin，(2197)：1-2，2005.

小林亜玲・久保田 信：日本海南部海域におけるカイヤドリヒドラ類（刺胞動物門，ヒドロ虫綱）の分布拡大について，白浜 RC 週報，第 2207 例会：2005.

久保田 信：「神秘のベニクラゲと海洋生物の歌－不老不死の夢を歌う」，白浜 RC 週報，第 2211 例会：2005.

湊　　宏・久保田 信・土生紳吾：再び白浜町沿岸にオオクビキレガイが漂着，くろしお 24：5-6，2005.

小林亜玲・久保田 信：双子のマメトマト果実，くろしお 24：15，2005.

久保田 信：海面を滑走する淡水性アメンボ（半し目，アメンボ科），くろしお 24：20，2005.

久保田 信：和歌山県田辺湾口の岩礁で生育するミドリイシ類（刺胞動物門，花虫綱）の大量死，くろしお 24：21-22，2005.

久保田 信：日本の唄の歌詞に登用された昆虫類，くろしお 24：23-29，2005.

的場　績・久保田 信：田辺市新庄公園の灯火に飛来した甲虫，KINOKUNI，68：13-21，2005.

久保田 信：白浜は宝の国！～一人一人が一種の生き物の一生を調べてみよう～，白浜町生活環境課水辺環境教室特集号：1，2006.

■海洋生物多様性保全学分野

白山義久：ナチュラルヒストリーの拠点　京都大学・瀬戸臨海実験所，エコソフィア No. 15：14-20，2005.

白山義久：オキナエビスと長者貝，エコソフィア No. 15：16-17，2005.

白山義久：The last one to go，エコソフィア No. 15：18-19，2005.

白山義久：島を持つ臨海実験所，エコソフィア No. 15：20，2005.

白山義久：NaGISA（なぎさ）プロジェクト，Ship & Ocean Newsletter，No. 111：2-3，2005.

白山義久：微笑む線虫，サイエンスネット，No. 41：1，2005.

◆ 報告書

森林生物圏部門

■森林資源管理学分野

安藤　信：平成 16 年度八丁平植生調査報告書（森林植生）：1-22，2005.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

柴田昌三：日本における里山の維持管理と課題，KIESS Booklet，3：38-44，2005.

柴田昌三：里山再生と竹林，同志社ハリスフォーラム 2005「伝統と自然に学ぶ京都の防災と市民力」テキスト：29-38，2005.

■里地生態保全学分野

大槻国彦・梅本信也：古座川流域キノコ相予備調査，第 1 回古座川合同調査報告：7，2005.

梅本信也：古座川文化圏予備調査報告，第 1 回古座川合同調査報告：8，2005.

道下雄大・阪口翔太・梅本信也：ダム建設とその後の植物相変容，第 2 回古座川合同調査報告：16-23，2005.

柴田敏治・梅本信也：古座川簡易水質分析報告，第 2 回古座川合同調査報告：24-25，2005.

宮下奈緒子・田村茂樹・梅本信也：古座川流域における高カルシウム濃度水の起源，第 3 回古座川合同調査報告：10-12，2005.

梅本信也・村井みゆき：古座川属ヨシ属 AFLP 分析報告，第 3 回古座川合同調査報告：13-18，2005.

梅本信也：庚申信仰と森里海連環，第 4 回古座川合同調査報告：19-21，2005.

梅本信也：古座川周辺地質学関係文献リスト，第 4 回古座川合同調査報告：27-54，2005.

田村茂樹・梅本信也：古座川流域の地質の概要，第 4 回古座川合同調査報告：55-56，2005.

■河口域生態学分野

田川正朋・中山耕至・田中　克：魚類の変態と初期生残，海洋生命系のダイナミクス　研究成果報告書：211-212，2005.

田川正朋・中山耕至・田中　克：魚類の変態と初期生残，海洋生命系のダイナミクス　研究成果報告書：393-398，2005.

■海洋生態保全学分野

山下　洋：魚類仔稚魚の成長速度を決める要因，平成 16 年度サンマ関係資源評価調査成果報告書：223-226，2006.

Shoji, J., Masuda, R., Yamashita, Y. and Tanaka, M.: Moon jellyfish or juvenile piscivore? A possible change in the relative importance of trophic pathways from fish larvae to their predators caused by hypoxia in the Seto Inland Sea: 137-138, 2005.

広田　勲・中西麻美・縄田栄治：ラオス北部焼畑休閑林の植生動態－Houay Phee 村の事例－，総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2　2004 年度報告書　アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005：140-150，2005.

甲斐嘉晃・鈴木章太郎・上谷　玄・片渕弘志・中坊徹次：日本周辺海域におけるムシガレイ *Eopsetta grigorjew* 地域個体群間の形態比較，平成 17 年度日本近海シェアドストック管理調査委託事業報告書：in press，2006.

◆ 学会発表（発表要旨集含む）

森林生物圏部門

■森林資源管理学分野

Sano, Junji, Tamai, Shigenobu, Ando, Makoto and Kato, Keisuke: Effects of Climate Change on the Species Composition and Vegetation Productivity in Arid Areas -Species Composition and Distributional Patterns of Predominant Tree Species in the Eastern Mediterranean Region of Turkey-, 2nd EAFES International Congress Book of Abstracts, 2: 499, 2006.

呉　初平・岡田泰明・清水良訓・安藤　信：地表処理が異なる林地に生育したアカマツ 1 年生苗の成長，117：PA47, 2006.

Koga, S., Utsumi, Y., Tashiro, N., Yamamoto, A., Saitoh, Y., Arima, T., Yamamoto, H., Kadomatsu, M. and Sakanoue, N.: Effect of bark decortication for hiwada production on growth and wood properties of *Chamaecyparis obtuse,* 6th Pacific Regional Wood Anatomy Conference, 2005, 12/1-5, Kyoto Abstract: 60-61, 2005.

■森林環境情報学分野

芝　正己：持続的社会における森と産業－国際森林認証制度と CoC －，セルロース学会関西支部講演資料集：1-10, 2005.

芝　正己・板谷明美：長伐期育成循環型人工林の収穫計画・配分モデルと SDSS の構造，第 56 回日本森林学会関西支部大会研究発表要旨集：208，2005.

板谷明美・芝　正己：eCognition を導入した森林管理・作業空間領域の細部構造の自動判別－京大フィールド研和歌山研究林を解析事例として－，第 56 回日本森林学会関西支部大会研究発表要旨集：209，2005.

板谷明美・芝　正己：eCognition を導入した森林管理・作業空間領域の細部構造の自動判別－解析法の枠組みと応用性－，第 12 回森林利用学会発表要旨集：12，2005.

芝　正己・石川知明：長伐期型人工林の収穫配分モデル THSAM の一考察，第 116 回日本森林学会大会学術講演集：4B02，2005.

Shiba, Masami: Effects of forest certification approaches on management strategies of plantation forests in Japan: opportunities or constrains?, The International Forestry Review, Vol. 7(5): 193-194, 2005.

Shiba, Masami: A GIS-based interactive spatial decision support system for integrating the management of protection and production forests, The International Forestry Review, Vol. 7(5): 313, 2005.

Nakashima, T., Futai, K. and Yamasaki, M.: What is the best countermeasure to cope with mass mortality of Oak trees in an old natural stands?, The International Forestry Review, Vol. 7 (5): 241, 2005.

Nakashima, T.: Monitoring of the forest damaged by the salt-winds and the gale of typhoon (II), The International Forestry Review, Vol. 7 (5): 392, 2005.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

柴田昌三・阿部佑平・岡本　宣：天王山における竹林拡大の現状，第 117 回日本森林学会大会講演要旨集：2006.

中西麻美・稲垣善之・倉本恵生・柴田昌三・深田英久・大澤直哉：ヒノキの雄花生産量に影響を及ぼす要因，第 117 回日本森林学会大会講演要旨集：2006.

阿部佑平・柴田昌三：京都市におけるチュウゴクザサ一斉開花の観察，第 117 回日本森林学会大会講演要旨集：2006.

池田邦彦・神崎　護・柴田昌三：インド東北部ミゾラム州，メロカンナの優占する焼畑休閑林における植生回復過程，第 117 回日本森林学会大会講演要旨集：2006.

■河口域生態学分野

田中　克：沿岸河口域における稚魚の生態と環境，日本海洋工学会　第 33 回海洋工学パネル：2006.

Islam, Md. S., Suzuki, K., Ueda, H. and Tanaka, M.: Spatial distribution and trophic ecology of dominant copepods associated with turbidity maximum along the salinity gradient in a highly embayed estuarine system in Ariake Sea, Japan（筑後川河口域における優占カイアシ類の分布と栄養状態），2005 年度水産学会大会：2005.

和田敏裕・光永直樹・鈴木洋行・首藤宏幸・山下　洋・田中　克：有明海島原半島沿岸域における希少種ホシガレイ稚魚の成長と食性，2005 年度日本水産学会大会：2005.

和田敏裕・山田徹生・藤浪祐一郎・有瀧真人・首藤宏幸・山下　洋・田中　克：岩手県宮古湾におけるホシガレイ放流種苗の初期馴致過程，2005 年度日本水産学会大会：2005.

鈴木啓太・笠井亮秀・太田太郎・磯田能年・中山耕至・田中　克：有明海産スズキ稚魚の河川遡上生態－安定同位体比からのアプローチ－，2005 年度日本水産学会大会：2005.

牧野弘奈・益田玲爾・田中　克：イシダイおよびドロメ稚魚の報酬訓練で見られた成長に伴う学習能力の変化，2005 年度日本水産学会大会：2005.

田川正朋：変態期の左右性決定への甲状腺ホルモンの関与，2005 年度日本水産学会大会要旨集：392，2005.

木下篤彦・田川正朋・藤田正治・水山高久：濁りが渓流魚の血中酸素濃度に及ぼす影響，平成 17 年度砂防学会研究発表会概要集：404-405，2005.

Bolasina, S., Tagawa, M. and Yamashita, Y.: Effect of stocking density on growth, cortisol level, digestive enzyme activity in larvae and juveniles of Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus.,* Sixth international symposium on flatfish ecology (Book of abstracts): 5O03, 2005.

Aritaki, M., Tagawa, M. and Tanaka, M.: Relationship between metamorphosis-related malformation and growth and/or development of pleuronectid larvae., Sixth international symposium on flatfish ecology (Book of abstracts): 5P01, 2005.

高橋大輔・三浦　猛・山口園子・田川正朋：ハゼ科魚類ヌマチチブの雄の性的形質と寄生虫，精巣および雄性ホルモンとの関係（予報），第 42 回魚類自然史研究会要旨集：5，2006.

小路　淳・太田太郎・日比野 学・中山耕至・田中　克：有明海筑後川河口域におけるスズキ仔稚魚の来遊量，成長および減耗率の経年変動：河川流量との関連，日本水産学会，東京海洋大学，東京，2005.

小路　淳：サワラ仔稚魚の摂餌戦略と資源加入機構に関する研究，日本水産学会奨励賞受賞講演，日本水産学会，東京海洋大学，東京，2005.

小路　淳・益田玲爾・山下　洋・田中　克：沿岸域の貧酸素化がミズクラゲ－仔魚の食物関係に及ぼす影響Ⅱ－低酸素条件下における非サイズ選択的被食，水産海洋学会，広島大学，広島，2005.

小路　淳・田中　克：河口域における魚類の加入変動と資源の安定：筑後川スズキの「密度独立的」加入と加入後の「密度依存的」死亡，水産海洋学会，広島大学，広島，2005.

■里海生態保全学分野

山下　洋・栗田　豊・Miller, J.M.:ヒラメ成育場の生産力から推定した種苗最適放流量とその地域差，平成 17 年度日本水産学会大会要旨集：34，2005.

和田敏裕・光永直樹・鈴木洋行・首藤宏幸・山下　洋・田中　克：有明海島原半島沿岸における希少種ホシガレイ稚魚の成長と食性，平成 17 年度日本水産学会大会要旨集：34，2005.

和田敏裕・山田徹夫・藤浪祐一郎・有瀧真人・首藤宏幸・山下　洋・田中　克：岩手県宮古湾におけるホシガレイ放流種苗の初期馴致過程，平成 17 年度日本水産学会大会要旨集：34，2005.

益田玲爾・山下　洋・上野正博・中西麻美・甲斐嘉晃・芝　正己・田中　克：間伐材魚礁の周辺に集まる魚類相の周年変化，平成 17 年度日本水産学会大会要旨集：34，2005.

福西裕一・益田玲爾・山下　洋：紫外線がマダイおよびクロダイ仔稚魚の生残と逃避行動に与える影響，平成 17 年度日本水産学会大会要旨集：34，2005.

Asahida, T., Hashimoto, K., Yamashita, Y. and Ida, H.: Simple method for discrimination between fluvial and anadromous forms in Japanese dace from the infection of a marine parasite, a and evaluation of the efficacy using otolith Sr: Ca ratios, The 7th Indo-Pacific Fish Conference: 36, 2005.

Fukunishi, Y., Masuda, R. and Yamashita, Y.: Ontogenetic changes of UV-B radiation induced mortality and avoidance behavior against UV-B in red sea bream *Pagrus major* and black sea bream *Acanthopagrus schlegeli,* 29th Annual Larval Fish Conference: 48, 2005.

Mendiola, D., Fujii, A., Yamashita, Y., Alvarez, P.and Tanaka, M.: Quantification of tryptic enzyme activity and protein concentration derived from live preys in the digestive system of chub mackerel larvae at different temperature-feeding regimes, 29th Annual Larval Fish Conference: 76, 2005.

Mendiola, D., Nakatsuma, S., Yamashita, Y., Tanaka, M. and Alvarez, P.: Allometry & morphometric variation of Atlantic & Pacific mackerel during the hatchery and early on-going phase; which does it growth faster?, 29th Annual Larval Fish Conference: 77, 2005.

Yamashita, Y., Kurita, Y. and Miller, J.M.: Latitudinal variation in the carrying capacity of nursery grounds for juvenile Japanese flounder in relation to appropriate stocking densities in stock enhancement programs, 29th Annual Larval Fish Conference: 105, 2005.

山下　洋：京大フィールド研の森里海連環学，北大－京大－琉大連携フィールド科学シンポジウム要旨集：4，2005.

木村千秋・益田玲爾・笠井亮秀・上野正博・山下　洋・田中　克：若狭湾 2 河口域に出現するクラゲ 3 種の生態特性－安定同位体比分析と胃内容物査定による食性解析－，北大－京大－琉大連携フィールド科学シンポジウム要旨集：15，2005.

坂本三和・上野正博・笠井亮秀・山下　洋・林　勇夫：若狭湾潮下帯ベントスは陸上有機物を食べているか？，北大－京大－琉大連携フィールド科学シンポジウム要旨集：24，2005.

木村千秋・笠井亮秀・益田玲爾・山下　洋：餌生物の切り替えによるミズクラゲの炭素および窒素安定同位体比の経時変化，日本水産学会近畿支部大会講演要旨集：2005.

坂本三和・上野正博・笠井亮秀・山下　洋・林　勇夫：由良川河口域潮下帯におけるベントスの食物網，日本ベントス学会講演要旨集：2005.

Ohshima, M., Kato, R., Masuda, R., Kimura, S. and Yamashita, Y.: Effect of oceanic turbulence on survival and feeding success of Japanese flounder larvae, Sixth International Symposium on Flatfish Ecology (Book of Abstracts): S2P03, 2005.

Uehara, S., Kurita, Y., Tomiyama, T., Yamada, Y., Fujinami, Y. and Yamashita, Y.: Growth variation of juvenile Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* on nursery grounds along the Pacific coast of Tohoku, northern Japan, Sixth International Symposium on Flatfish Ecology (Book of Abstracts): S3O08, 2005.

Watanabe, K., Takagaki, M., Saitoh, K., Nakayama, K., Yamashita, Y. and Tanaka, M.: Search of the potential predators for released Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* juvenile in Wakasa Bay, Sixth International Symposium on Flatfish Ecology (Book of Abstracts): S3O11, 2005.

Wada, T., Aritaki, M., Takeda, Y., Yamashita, Y.and Tanaka, M.: Differences in ontogenetic development of low-salinity adaptability in 5 pleuronectid species revealed by laboratory experiment and its implication to the migration process to their habitats, Sixth International Symposium on Flatfish Ecology (Book of Abstracts): S3P04, 2005.

Asahida, T., Hayama, A., Ichimura, N. and Yamashita, Y.: Efficacy of a PCR-based method for the identification of consumed Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus,* juveniles from the stomach contents of sand shrimp, Crangon amurensis, Sixth International Symposium on Flatfish Ecology (Book of Abstracts): S3P12, 2005.

Yamada, T., Kurita, Y. and Yamashita, Y.: Utilization of shallow nursery grounds by juvenile wild and released Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus,* in Miyako Bay, northeastern Japan, Sixth International Symposium on Flatfish Ecology (Book of Abstracts): S4P23, 2005.

Bolasina, S.N., Tagawa, M. and Yamashita, Y.: Effect of stocking density on growth, cortisol level, digestive enzyme activity in larvae and juveniles of Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus,* Sixth International Symposium on Flatfish Ecology (Book of Abstracts): S5O03, 2005.

Masuda, R., Nakatsuma, S., Kumano, M., Mendiola, D., Yamashita, Y. and Tanaka, M.: Ontogeny of behavior in jack mackerel, chub mackerel and Japanese anchovy with emphasis on their life history strategies, DOBIS International Symposium -Dynamics of the Ocean Biosystem-: 2005.

Bolasina, S., Pérez, A. and Yamashita, Y.: Effect of starvation on trypsin and lipase activities in Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus,* larvae and juveniles, The World Aquaculture Society Meeting 2005: 2005.

中西麻美・稲垣善之・倉本惠生・柴田昌三・深田英久・大澤直哉：間伐がヒノキの雄花生産に及ぼす影響，日本森林学会関西支部大会研究発表要旨集 56：36，2005.

Kai, Y. and Nakabo, T.: Evolutionary significance of coloration in genus *Sebastes* (Scorpaenidae)., Seventh Indo-Pacific Fish Conference, Taipei: 2005.

柳下直己・甲斐嘉晃・山崎　淳・中坊徹次：ハツメにおける性的 2 型，日本魚類学会：2005.

甲斐嘉晃・中坊徹次：キツネメバルとタヌキメバルの形態的・遺伝的差異，日本魚類学会：2005.

Kim, J.K., Kai, Y. and Nakabo, T.: Genetic differences between two geographic populations of *Salanx ariakensis* (Salangidae) from Korea and Japan inferred from AFLP analysis., Seventh Indo-Pacific Fish Conference, Taipei: 2005.

■沿岸資源管理学分野

益田玲爾・山下　洋・上野正博・中西麻美・甲斐嘉晃・芝　正己・田中　克：間伐材魚礁の周辺に集まる魚類相の周年変化，平成 17 年度　日本水産学会大会講演要旨集：43，2005.

Maduda, R., Arai, T., Tominaga, O. and Seikai, T.: Behavioral characteristics of Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* in the context of stock enhancement, World Aquaculture 2005 Abstract: 385, 2005.

Masuda, R.: Comparison of life history traits between jack mackerel and chub mackerel with emphasis on their behavioral ontogeny, 29th Annual Larval Fish Conference Abstract: 74, 2005.

Masuda, R., Nakatsuma, S., Kumano, M., Mendiola, D., Yamashita, Y. and Tanaka, M.: Ontogeny of behavior in jack mackerel, chub mackerel and Japanese anchovy with emphasis on their life history strategies, DOBIS International Symposium on Dynamics of the Ocean Biysystem Abstract: 77, 2005.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

久保田 信：不老不死のヒドロクラゲ，ベニクラゲ（花クラゲ目）のユニークな生活史とわが国での地理的分布，日本動物分類学会：2005.

河村真理子・久保田 信：日本産 *Koellikerina* 属 3 種，日本動物分類学会：2005.

久保田 信・小林亜玲・岩永節子・大城直雅・鳥越兼治：沖縄島におけるカイヤドリヒドラ類（ヒドロ虫綱，軟クラゲ目）のポリプの地理的分布，日本動物分類学会：2005.

■海洋生物進化形態学分野

宮崎勝己・Waloszek, Dieter：ニューギニア産ホソユビヤモリの一種より発見された奇妙な形態をしたシタムシについて，日本動物学会第 76 回大会予稿集：135，2005.

Miyazaki, Katsumi and Waloszek, Dieter: A curious pentastomid with lateral projections on each trunk annulation, Sixth International Crustacean Congress. Abstracts: 138, 2005.

■海洋生物多様性保全学分野

深見裕伸・ナンシー　ノールトン：ホネナシサンゴ類と近縁なのはイソギンチャク類かそれともイシサンゴ類か？，日本動物学会第 76 回大会：110，2005.

深見裕伸：キクメイシサンゴ類の交雑と分類に関する研究，日本サンゴ礁学会第 8 回大会：36，2005.

(3) 学会と社会における活動

森林生物圏部門

●併任・委員会委員（学内）

竹内　典之：博物館運営委員会委員，シニアキャンパス実行委員会委員，建築委員会委員

芝　　正己：学術情報メディアセンター学内委員

●併任・委員会委員（学外）

安藤　　信：標茶町林業推進協議会委員，標茶町緑化推進委員

芝　　正己：日本森林学会関西支部学会誌編集委員，UFJ 総合研究所技術顧問，AMITA ㈱技術顧問，
WWF Japan 技術評価委員

中島　　皇：全国演習林協議会出版委員会委員

●学協会委員

竹内　典之：日本森林学会関西支部副支部長，日本森林技術協会関西支部監査，日本森林技術協会京大支部長

●学会・講演会等開催（センター主催～共催）

中島　　皇：大学院生による昆虫科学と環境（フィールド）研究シンポジウム
「秋の京都で語り合おう in 上賀茂試験地」

●学会・講演会の開催（個人）

安藤　　信：「世界の植生と森林」釧路支庁経済部林務課
「きれいな水を育む森林づくり事業」（地域政策推進事業）講演

坂野上なお：西日本林業経済研究会〈吉野大会〉『吉野林業からみる日本林業の未来』－吉野林業再発見－　講演

●地域貢献

竹内　典之：全日空「私の青空・森づくり」（天城湯ケ島の森，標茶町湿原の森，アサヒの森，仁淀川の森）講演，
芦生公開講座「森のしくみとその役割－森にくらして」講演，
第 3 回木文化再生研究会「森里海連環学工務店懇談会」講演，
シニアキャンパス『ひとと自然　森を考える』フィールド学習開講，
「京の子ども夢大使（大志）派遣事業　科学探偵士」講演，
和歌山の森林を考える会主催「みんなの森づくりシンポジウム」基調講演，
木造住宅振興シンポジウム「森と都市の対話 j.Pod 建築システムが目指すもの」基調講演

徳地　直子：天王山森林整備協議会会長，西山整備協議会会長

安藤　　信：標茶町立標茶小学校（標茶区）「遠足」郷土の自然（植物・野鳥）に親しみ理解を深める，
標茶町立弥栄小学校（標茶区）「総合的な学習での地域学習」身近にある自然に対する理解を深める
（木工体験），私の青空　釧路空港・標茶町湿原の森，
標茶町教育委員会中央公民館（標茶区）平成 17 年度標茶町中央公民館事業「家庭教育学級」
第 4 講座「木工教室」，
標茶町教育委員会社会教育課（標茶区）「標茶町アドベンチャースクール　ジュニアリーダー養成講座」，

標茶町教育委員会標茶郷土館（標茶区）標茶町郷土館講座「軍馬補充部　歴史の残滓」,
釧路支庁経済部林務課造林係（標茶区）「きれいな水を育む森林づくり事業」（地域政策推進事業）

芝　　正己：芦生公開講座「森のしくみとその役割－森にくらして－」講演，NPO 法人シニア自然大学（大阪）講演,
バイオマス研究会（大阪科学技術センター）講演

中島　　皇：上賀茂試験地　春の一般公開自然観察会・秋の一般公開自然観察会・冬の炭焼き体験会

坂野上なお：芦生公開講座「森のしくみとその役割－森にくらして－」講師,
「海山探検隊　山観察会」（和歌山県清水町教育委員会主催）講師,
大学等地域開放特別事業「ウッズサイエンス」（和歌山県立有田中央高校清水分校共催）講師,
有田郡清水町立八幡小学校森林作業体験・講師

里域生態系部門

●併任・委員会委員（学内）

田中　　克：教育研究評議会，大学評価委員会，社会連携のあり方に関するワーキンググループ，全学共通教育委員会，教育研究基盤機構会議，附属図書館協議会，全学情報セキュリティー委員会，学生の安全対策検討 WG，地球環境学舎・学堂協議会，博物館協議員会，生態学研究センター協議員会，IDE 大学協会近畿支部運営委員会

山下　　洋：点検・評価実行委員会，全学共通教育システム委員会少人数教育部会

柴田　昌三：地球環境学堂教務委員会委員

中山　耕至：応用生物科学専攻 KYS 委員

上野　正博：全学情報セキュリティー幹事会幹事

●併任・委員会委員（学外）

田中　　克：琵琶湖海区漁業調整委員会委員，西条市・山と人の防災計画委員会委員，独立行政法人水産総合研究センター養殖研究所運営評価会議委員

山下　　洋：京都府漁業調整委員，全国豊かな海づくり推進協会・日本海中西部広域連携ヒラメ調査検討協議会委員，瀬戸内海研究会議・瀬戸内海再生方策検討委員会委員，由良川下流水面利用調整委員会，日本科学技術振興財団スプリングサイエンスキャンプ運営委員

柴田　昌三：「緑の公共事業アクションプラン」策定に係る政策検討会議（京都府）委員，グリーンマネジメント技術委員会（国土交通省近畿地方整備局）委員，森林再生支援センター：専門委員，井手町豊かな緑と清流を守る検討委員会（京都府井手町）委員長，京都竹文化振興財団：評議員，「文化的景観（北山杉の林業景観）の保存・活用事業」調査・検討委員会（文化庁）学術委員，国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会作業部会（文化庁）専門委員，丹後縦貫林道整備計画検討委員会（京都府丹後広域振興局）委員長，森林総合研究所関西支所所内交付金プロジェクト評価委員会委員，大阪 CDM ネットワーク：アドバイザー，竹資源有効活用コンソーシアム：アドバイザー，グリーン購入コンソーシアム：アドバイザー，近畿竹資源有効活用コンソーシアム：アドバイザー取り纏め役（幹事）

梅本　信也：古座川流域協議会専門委員

西村　和雄：NPO 法人有機農業認証協会理事長，NPO 法人地球デザインスクール常任理事

中西　麻美：特定非営利活動法人森林再生支援センター理事

●学協会委員

田中　　克：日本水産学会副会長，日本魚類学会評議員，水産海洋学会評議員，日本水産増殖学会評議員，科学技術振興機構地域振興事業評価委員会委員，日本学術振興会特別研究員等審査専門委員，日本学術振興会科学研究費補助金審査会委員，Jarnal of applied Ichthyology 編集委員，Marine Living Resources 編集委員

山下　　洋：全国大学水産実験所長会議議長，水産海洋学会国際誌委員，水産海洋学会賞推薦委員会委員長，水産海洋研究副編集委員長，Fisheries Oceanography 編集委員，Journal of Sea Research 招待編集委員，日本学術振興会特別研究員等審査専門委員

柴田　昌三：日本造園学会理事，日本造園学会論文集編集委員会副委員長，日本造園学会校閲委員会委員，
日本緑化工学会理事，日本緑化工学会学会誌編集委員長，日本緑化工学会環境林研究部会長，
日本緑化工学会学会賞選考委員会委員，竹文化振興協会研究雑誌編集委員会委員，
Landscape and Ecological Engineering 副編集委員長，World Bamboo Organization 理事，
Landscape and Ecological Engineering 国際会議（ICLEE2006）事務局長

梅本　信也：日本雑草学会用語委員

田川　正朋：日本水産学会水産学教育推進委員

甲斐　嘉晃：日本魚類学会庶務幹事

中山　耕至：日本魚類学会電子情報委員

●学会・講演会等開催（センター主催～共催）

田中　　克：第 6 回国際異体類生態学シンポジウム大会委員長，
第 2 回時計台対話集会「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」京都大学時計台記念ホール

山下　　洋：第 6 回国際異体類生態学シンポジウム事務局長，第 1 回由良川フォーラム実行委員長

田川　正朋：第 6 回国際異体類生態学シンポジウム組織委員

益田　玲爾：第 6 回国際異体類生態学シンポジウム組織委員，
「舞鶴湾水中散歩 Part III」（「環境見る聞く考える会」とフィールド研の共催）講演

●学会・講演会の開催（個人）

柴田　昌三：民族自然誌研究会第 39 回例会（京都市），平成 17 年度日本竹文化振興協会・竹の情報発表会（京都市），
未来の学校「こどもダヴィンチ村」ワークショップ（大阪府茨木市），京都造園懇談会（京都市），
姫路市好古園管理研修（兵庫県姫路市），京都大学地球環境学堂第 3 回嶋臺塾（京都市），
天王山竹林対策協議会シンポジウム（大阪府島本町），環境省大阪事務所自然フォーラム（大阪市），
近畿竹資源有効活用コンソーシアム設立準備総会（大阪市），NPO 市民環境研究所講座（京都市），
同志社大学ハリスフォーラム（京都府精華町），大阪府自然環境保全協会里山ボランティア講座（大阪市），
平成 17 年度全日本竹産業連合会情報交換会（別府市），
全日本竹産業連合会・第 6 回 JBA ヤンガーフォーラム（別府市），斜面樹林化協会研修会（大阪市），
とよなか市民環境会議アジェンダ 21 自然部会第 2 回自然学習講座（大阪府豊中市），
独立行政法人環境再生保全機構　2005 年度地球環境市民大学校 自然保護戦略（大阪市）

田川　正朋：2005 年度日本水産学会大会ミニシンポジウム
「ヒラメ・カレイの裏表－異体類の左右性発現の機序とその異常について－」企画責任者

甲斐　嘉晃：レクチャーシリーズ No. 38　日本海の魚たち　京都大学総合博物館

●学会賞

山下　　洋：日本水産学会水産学進歩賞

上野　正博：平成 16 年度日本水産学会論文賞

●地域貢献

田中　　克：シンポジウム「21 世紀に森・川・海が再生するために」（高知県須崎市）
講演（講演タイトル：森里海連環学のすすめ－海の研究者の森への思い－），
「21 世紀の環境・経済・文明」公開シンポジウム（宮城県気仙沼市）
講演（講演タイトル：食文化・森里海連環学・木文化－“森は海の恋人”運動に学ぶ－），
京 ECO セミナー「森里海のつながりから木文化再生へ」（京都市伏見区，京エコロジーセンター）
講演（講演タイトル：森里海のつながりから木文化再生へ），
京大春秋講義（京大会館）
（講義タイトル：森里海の循環型社会の確立はなぜ必要か“森は海の恋人”から“都市と森の循環”へ），
仁淀川シンポジウム（高知県土佐市）
講演（講演タイトル：森と川と海をつなぐ学問－森里海連環学の展望－），
第 6 回国際異体類シンポジウム（舞鶴市，舞鶴市商工観光センター）
市民講演会講演（講演タイトル：渚の先住人－ヒラメ稚魚の“ひとり言”），
研究会（三重県志摩市，三重県科学技術振興センター）
（講演タイトル：森と川と海をつなぐ学問　森里海連環学の展望）

山下　　洋：京都府青壮年・女性漁業者交流大会講演「美しい海をいつまでも－沿岸域の海洋環境保全に向けて－」，
綾部市中学・高等学校理科教師研修講師，日本ボーイスカウト京都連盟京都キャンポリー講師，
由良川懇談会講演「山から海までを睨んだ由良川の環境－海の魚の観点から－」，
独立行政法人国立若狭少年自然の家　少年指導者研修　講師，京都まいづる立命館地域創造機構運営委員，
JTB カルチャーサロン講師（森と里と海のつながり）

梅本　信也：第 1 回古座川流域協議会・記念講演「古座川アンケートについて」古座川プロジェクト水質説明会，
古座川ボタン荘など

田川　正朋：京都府教育委員会　科学探偵士（舞鶴市立大浦小学校，木津川町立木津川台小学校，向日市立向陽小学校）

益田　玲爾：JTB カルチャーサロン　講演，京都府ボーイスカウト協会 80 周年記念大会　講演，
綾部市理科研究会　講演，京都府豊かな海づくり大会　講演，NPO 法人地球環境大学講座　講演，
京都府青年中央会　講演，けやきの会　講演，舞鶴市ネイチャーガイド養成講座　講演，
舞鶴市役所　講演

西村　和雄：日本各地の農業団体・農民に有機農業や環境保全型農業について実地指導

上野　正博：由良ネット「きみは珪藻を見たか」講師（綾部，福知山），
京都府釣船業協同組合講習会講師，日本水産資源保護協会巡回教室（米子）講師

基礎海洋生物学部門

●併任・委員会委員（学内）

白山　義久：理学研究科協力講座，理学部非常勤講師，三才学林兼任教員，三才学林懇話会会員

●併任・委員会委員（学外）

白山　義久：環境省海洋環境モニタリング検討会委員，二酸化炭素の海洋貯留に関する技術委員会委員，
二酸化炭素の海洋貯留に関する技術委員会環境影響分科会主査，GBIF 科学分科会委員，
シップアンドオーシャン財団　海洋教育に関する研究会委員，CoML 科学推進委員会委員，
文部科学省　科学技術政策研究所　科学技術動向センター専門調査員，
赤泥の環境影響に関する調査検討会委員

久保田　信：和歌山県立自然博物館協議会委員

大和　茂之：㈶天神崎の自然を大切にする会評議員

●学協会委員

白山　義久：動物分類学会評議員，日本線虫学会編集委員，日本海洋学会沿岸環境部会編集委員

大和　茂之：南紀生物同好会編集委員

●学会・講演会の開催（個人）

白山　義久：第 4 回 NaGISA 分類トレーニングワークショップ

●地域貢献

久保田　信：京都大学防災研究所白浜海象観測所研究講習会（瀬戸臨海実験所共催），
国立遺伝学研究所研究会「刺胞動物の進化，系統分類に関する最新の話題」講演，
第 4 回すま水ボランテイアフェスタ講師「神秘のベニクラゲと海洋生物の歌」をテーマに講演と
ステージイベント（神戸市立須磨水族園），紀伊民報連載記事執筆（毎週）

宮崎　勝己：和歌山県清水町自然観察会（海観察会）

（4）国際活動

森林生物圏部門

●国際研究プロジェクト

徳地　直子：21 世紀の炭素管理に向けたアジア陸域生態系の統合的炭素収支研究

安藤　　信：総合地球環境学研究所共同研究員（乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響）

芝　　正己：FSC International（森林管理協議会）国際委員，
FSC International（SCS，SGS，SA，SW）国際審査委員

●国際学会

徳地　直子：Acid Rain，プラハ，ポスター発表（2 件），East Asia，Long Term Ecological Research，
ポスター発表，East Asia，Long Term Ecological Research，口頭発表

安藤　　信：2nd EAFES International Congress（新潟）

芝　　正己：IUFRO（国際森林研究機関連合）第三部会　S3.06.00 座長，同　上　S3.06.02 副座長，
IJFE USA（国際林業工学学会誌米国）国際編集員，COFE，USA（米国林業工学学会）国際会員，
ISTVS（国際不整地走行学会）国際会員

中島　　皇：IUFRO（International Union of Forest Research Organizations）

●海外調査

安藤　　信：乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響（トルコ）

●その他出張研修

芝　　正己：28th Annual Meeting of the COFE, USA, XXII IUFRO World Congress, Australia,
Seminar on Sustainable Management and Utilization of Japanese Cedar, KFRI Korea,
International Precision Forestry Symposium, South Africa

中島　　皇：国立公園の森林保全に関する資料収集（オーストラリア）

●招聘研究員

Kemal Yilmaz Tuluhan：チクロバ大学教授（トルコ）

Ekrem Aktoklu：ムスタファケマル大学講師（トルコ）

Turker Altan：チクロバ大学教授（トルコ）

●留学生

呉　　初平：農学研究科修士課程 2 年（中国）

里域生態系部門

●国際研究プロジェクト

田中　　克：韓国南西沿岸域におけるスズキとタイリクスズキの同所的分布に関する研究（韓国・慶尚大学海洋科学科），
原始的異体類ボウズガレイの生物学的ならびに増殖学的研究（マレーシア・サバ大学ボルネオ海洋研究所）

柴田　昌三：ベトナムでの京都大学地球環境学堂の研究拠点形成のための調査

甲斐　嘉晃：韓国沿岸と有明海のアリアケシラウオに関する研究（韓国国立水産科学院・京大総合博物館）

●国際学会

田中　　克：International Symposium, JSPS (Japanese Society for Promotion of Science) Annual Meeting Series,
National Museum of Emerging Science and Innovation (Miraikan), Tokyo, Japan,
The 29th Annual Larval Fish Conference, the University Pompeu Fabra, Barcelona, Spain

山下　　洋：The 29th Larval Fish Conference, the University Pompeu Fabra, Barcelona, Spain

柴田　昌三：Opening workshop on disaster, environment and people (Hue, Vietnam),
1st International Symposium on Landscape and Ecological Engineering (Seoul, Korea),
Workshop on Education and research cooperation on environment and disaster management for human cecurity (Hue, Vietnam)

益田　玲爾：World Aquaculture 2005 (Bali, Indonesia) にて栽培漁業のセッションを組織

甲斐　嘉晃：7th Indo-Pacific Fish Conference (Taipei, Taiwan)

小路　　淳：The 29th Larval Fish Conference, the University Pompeu Fabra, Barcelona, Spain,
Estuarine Research Federation 2005 Conference in Norfolk, Marriott Hotel Waterside, Norfolk, Virginia, US

●海外調査

田中　　克：仁川・錦江河口域フィールド調査（大韓民国）

柴田　昌三：インドミゾラム州における竹開花予定地における調査（インド）

西村　和雄：アフガン難民にたいする農業指導（イラン）

中西　麻美：焼畑休閑林の植生調査（ラオス）

小路　　淳：仁川・錦江河口域フィールド調査（大韓民国）

●その他出張研修

柴田　昌三：ネパール・トリブヴァン大学自然史博物館スワヤンブ環境公園建設工事指導

●外国人客員研究員

Sergio Bolasina Nestor：（アルゼンチン・外国人特別研究員）

●招聘研究員

郭　　又晳：国立慶尚大学校海洋科学大学海洋生命科学科助教授（大韓民国）

●留学生

Md Shahidul Islam：博士後期課程 3 年生（バングラデシュ）

陳　　炳善：博士後期課程 2 年生（韓国）

Emily S.Antonio：国費留学生日本語研修（フィリピン）

Diego Martinez Mendiola：短期留学生（スペイン）

基礎海洋生物学部門

●国際研究プロジェクト

白山　義久：センサスオブマリンライフ科学推進委員会委員，NaGISA 研究代表者

●国際学会

白山　義久：国際メイオベントス学会，ワシントン生物学会，アメリカ線虫学会

宮崎　勝己：6th International Crustacean Congress (Glasgow，Scotland)

深見　裕伸：Workshop of Molecular phylogeny of scleractinian corals and reef connectivity in the South/East China Seaboards, in Taipei, Taiwan, Oct 25-30, 2005.
Molecular Marine Barcoding Workshop in Bocas del Toro, Republic of Panama on September, 26-29, 2005.

●海外調査

白山　義久：NaGISA　サンプリング（インドネシア）

●在外研究

深見　裕伸：Nancy Knowlton 博士の NSF プロジェクト「造礁サンゴの系統分類」(共同研究)

●その他出張研修

白山　義久：CoML All program meeting (Frankfurt), CoML SSC meeting (Hawaii),
CoML SSC meeting (Cairns), IPCC leadauthor meeting (Spain)

久保田　信：広島大学豊潮丸で研究航海（調査海域は瀬戸内海），斎藤報恩会自然史博物館標本調査

●外国人客員研究員

Patricia Robin Rigby：日本学術振興会外国人特別研究員（カナダ）

●留学生

Michelle Yang：短期留学生（アメリカ）

Yi-Ting Lien：研究生（台湾）

（5）教育活動（学内の講義・実習は別紙）

森林生物圏部門

●学位授与（学士：課題研究・修士論文・博士論文）

・学士：課題研究

井上　泰男：林齢の異なるスギ人工林における溶存有機態炭素の動態に関する研究

尾崎　絵美：ヒノキ人工林の林分構造と広葉樹の侵入状況

倉田　麻里：鋸谷式間伐の検証－スギ人工林における強度間伐後の成長解析を中心に－

・修士論文

上田　実希：常緑針葉樹３種の硝酸態窒素利用に関する生理生態学的研究

岡田　泰明：冷温帯天然林の構造に地形が及ぼす影響－芦生研究林における大面積調査区を例にとって－

岸野有香里：木質ペレット燃料製造プラントにおけるエネルギー消費量について

呉　　初平：富栄養化したマツ枯れ被害林におけるマツ林の再生技術
－アカマツの更新の初期段階における施業方法の検討－

近藤　和真：中央シベリア永久凍土上に成立するカラマツ林生態系の窒素循環

吉野　拓也：大台ケ原における樹木の成長経過－トウヒ・ウラジロモミ風倒木を対象にした樹幹解析－

・論文博士

小林　裕之：3S 技術（GPS，RS，GIS）の利用による森林管理業務の効率化に関する研究

●他大学・各種学校の講義・実習

徳地　直子：京都府立大学，非常勤講師

芝　　正己：愛媛大学非常勤講師，名古屋大学非常勤講師，琉球大学非常勤講師

坂野上なお：大学等地域開放特別事業「ウッズサイエンス」（和歌山県立有田中央高校清水分校共催）講師

里域生態系部門

●学位授与（学士：課題研究・修士論文・博士論文）

・学士：課題研究

飯野浩太郎：有明海筑後川下流域におけるアリアケヒメシラウオ仔稚魚の水平・鉛直分布

谷本　尚史：日本海側各地におけるヒラメ稚魚の成長差の要因解析

三輪　一翔：日高川・古座川河口域および近傍の砕波帯に出現する仔稚魚

・修士論文

松田　克洋：キジハタの日周行動と季節移動

福西　悠一：マダイおよびクロダイ卵稚仔における紫外線耐性と紫外線回避行動の個体発生

・課程博士

Md. Shahidul Islam：Feeding ecology of continental relict fish juveniles associated with Chikugo estuarine turbidity maximum in Ariake Bay, Japan

●他大学・各種学校の講義・実習

田中　　克：大学院講座（「マネジメント事例研究」－日本海学の構築をめざして）
（東京都文京区，東京大学大学院人文社会系研究科）

山下　　洋：三重大学生物資源学研究科非常勤講師，サイエンスパートナーシップ講師（西舞鶴高等学校）

柴田　昌三：竹林の維持管理手法の修得（淡路景観園芸学校），緑化工学概論（京都造形芸術大学環境デザイン学科），環境保全とランドスケープデザイン（京都造形芸術大学通信教育学部）

梅本　信也：和歌山県立なぎ看護学校　生物学　非常勤講師

田川　正朋：北海道大学大学院　生化学共通講義「魚類の変態と内分泌系－カレイ類にみられる変態失敗機構の理解－」

益田　玲爾：サイエンスパートナーシップ講師（西舞鶴高等学校），京都教育大学附属高校　臨海実習および講義，岐阜大学　臨海実習および講義，宇川中学校・由良小学校　科学探偵士　講演，JICA 集団研修　講義，京都府立海洋高校の見学者へ講義，倉梯小学校にて講演

上野　正博：京都府立西舞鶴高校 Science Patner Ship 講師，舞鶴市立城北中学校総合学習「舞鶴湾の環境」講師，兵庫県立飾西高等学校長期体験学習講師

基礎海洋生物学部門

●学位授与（学士：課題研究・修士論文・博士論文）

・修士論文

柴田　敏治：古座川水系における環境要因の時空間的変動に関する研究

・課程博士

河村真理子：クラゲ類の系統分類・生態学的研究

岸田　拓士：クジラ類の系統・生態学的研究

小林　亜玲：カイヤドリヒドラ類（刺胞動物門）の系統分類・生態学的研究

栫　　昭太：棘皮動物の幼生における形態の多様性と進化

松原未央子：軟体動物の殻形態多様化の背景にある発生機構の進化について

三瀬　武史：Pax1/9 から重複で生じた Pax1 と Pax9 の発現領域・機能・シスエレメントの硬骨魚類における進化

●他大学・各種学校の講義・実習

白山　義久：放送大学　面接授業 2 回，放送大学ゼミ 10 回，地球環境大学　特別講義 2 回，
滋賀県 SPP プログラム講演，エコロジーカフェ　関西支部開設記念シンポジウム講演

久保田　信：大阪市立大学理学部　臨海実習，大阪大学理学部　臨海実習，
立命館宇治高校　SPP 研究者招待講座臨海実習，立命館宇治高校　SPP 研究者招待講座講義，
滋賀県立膳所高校第 36 回生物実習，歩む会　臨海実習，和歌山県立田辺高校生物部　SPP 海洋生物実習，
白浜町生活環境課・児童館　共催　自然観察教室講師，
白浜町立白浜中学校　和歌山県キャリア教育実践プロジェクト，きしわだ自然資料館友の会磯観察会，
兵庫県立尼崎小田高等学校サイエンスリサーチ科臨海実習，クラゲメーリングリストオフ会臨海実習，
神戸市立須磨水族園職員およびボランティア講師　海洋生物の唄を歌うイベント，
日本生物教育学会　日本生物教育学会第 79 回全国大会における講演および実習指導の講師

宮崎　勝己：大阪教育大学教育学部臨海実習，奈良教育大学教育学部野外実習 A-II，滋賀県立膳所高等学校生物実習，
兵庫県立尼崎小田高等学校臨海実習，奈良女子大学附属中等教育学校臨海実習，
滋賀県高校理科教員研修「海洋生物から学ぶ地球環境問題」（文科省 SPP 教員研修），
立命館宇治高等学校「海洋生物の系統分類と生態－多様性と棲息環境の科学－」
（文科省 SPP 研究者招聘講座）

大和　茂之：関西学院大学臨海実習

（5）教育活動（学内の講義・実習）

センター教員担当講義（2005 年度）

講　義　区　分		講　　義　　名	担当教員（敬称略）	科目番号	対　象	開講期	単位
全学共通科目	B 群	森里海連環学－森は海の恋人か？－	田中，竹内，白山，山下，柴田，中島，徳地ほか	講義	全回生	後期	2
		海域・陸域統合管理論	竹内，白山，西村ほか	講義	全回生	後期	2
		森里海連環学実習Ⅰ	白山，山下，芝，久保田，徳地，益田，梅本，宮崎，大和，深見，上野，中西，甲斐	実習	全回生	前期集中	2
		森里海連環学実習Ⅱ	竹内，安藤，中山，甲斐	実習	全回生	前期集中	2
		暖地性積雪地域における冬の自然環境	中島	実習	全回生	後期集中	1
	B 群(少人数セミナー)	有明海にみる生きものたちの危機	田中	ゼミ	1 回生	前期	2
		“森は海の恋人”の故郷に学ぶ	田中，竹内ほか	ゼミ	1 回生	前期集中	2
		京都大学に木造り校舎を造る－都市と森林の再生	田中，竹内，柴田ほか	ゼミ	1 回生	前期	2
		海の環境と生物資源	山下	ゼミ	1 回生	前期	2
		海岸生物の生活史	久保田	ゼミ	1 回生	前期集中	2
		海洋生物の多様性を探る	白山	ゼミ	1 回生	前期	2
		魚類心理学入門	益田	ゼミ	1 回生	前期	2
		原生的な森林の働き	中島	ゼミ	1 回生	前期集中	2
		森のつくりだすもの	徳地	ゼミ	1 回生	前期集中	2
		森里海のつながりを清流古座川に見る	梅本	ゼミ	1 回生	前期集中	2
		森林の更新と動態	安藤	ゼミ	1 回生	前期集中	2
		世界の森林，日本の森林，現在・未来！	芝	ゼミ	1 回生	前期	2
		節足動物学入門	宮崎	ゼミ	1 回生	前期集中	2
		有機農業の可能性……持続可能な農業をめざして	西村	ゼミ	1 回生	前期集中	2
	B 群	生物圏の科学－生命・食糧・環境－	山下，徳地，安藤，西村ほか	講義	全回生	後期	2
		英語講義：グローバル化の下での食料と環境	西村ほか	講義	全回生	後期	2
		基礎生物学Ａ	白山ほか	講義	1・2 回生	前期	2
	A・B 群	自然と文化－農の営みを軸に	西村ほか	講義	全回生	前期	2
		地球環境学のすすめ	柴田ほか	講義	全回生	前期	2
		森林環境学概論	柴田ほか	講義	1・2 回生	前期	2
農学部	資源生物科学科	資源生物科学基礎Ⅱ	田川，中山ほか	A104	1 回生	後期	2
		資源生物科学概論Ⅲ	田中，山下，田川ほか	A107	2 回生	後期	2
		動物生理学	田川ほか	A112	2 回生	前期	2
		資源生物科学基礎実験	益田，田川，中山ほか	A117	2 回生	後期	1
		海洋生物科学技術論と実習Ⅰ	山下，益田，上野，中山ほか	A205	2 回生	前期集中	2
		海洋生物科学技術論と実習Ⅱ	山下，益田，上野，中西，中山，甲斐ほか	A206	2 回生	前期	2
		海洋生物科学技術論と実習Ⅲ	山下，益田，上野ほか	A207	2 回生	前期	1
		植物調査法と実習	梅本ほか	A208	2 回生	前期集中	2
		海洋生物生態学	田中	A224	3 回生	前期	2
		資源生物科学実験及び実験法Ⅰ	田川，中山ほか	A239	3 回生	前期	6
		資源生物科学実験及び実験法Ⅱ	田川，中山ほか	A240	3 回生	後期	6
		海洋生物生理学	田川	A248	3 回生	後期	2
		海洋生物資源学演習	田中，田川，中山ほか	A512	4 回生	通年	2
		課題研究	田中，田川，中山	A518	4 回生	通年	10
	森林科学科	森林基礎科学Ⅳ	竹内，安藤，徳地，柴田ほか	E106	1 回生	後期	2
		緑地植物学	柴田ほか	E125	4 回生	前期	2
		森林育成学	徳地，柴田，嵜元	E128	3 回生	後期	2
		森林植物学	安藤	E129	3 回生	後期集中	2
		森林管理システム及び応用技術論	芝	E130	3 回生	後期	2
		雪氷学基礎論	竹内，中島	E131	3 回生	後期	2
		森林科学実習Ⅳ	徳地，芝，中西ほか	E214	2 回生	後期	1

		森林総合実習及び実習法	安藤，芝，中島，嵜元，坂野上ほか	E221	3 回生	前期	2
		研究林実習Ⅰ	芝ほか	E236	2 回生	後期集中	1
		研究林実習Ⅱ	徳地ほか	E237	3 回生	後期	1
		研究林実習Ⅲ	安藤，坂野上ほか	E238	3 回生	後期集中	2
		研究林実習Ⅳ	安藤ほか	E239	3 回生	後期集中	2
農学研究科	農学専攻	雑草学専攻実験	梅本	Ⅰ45	修士 1，2 回生	通年	10
	森林科学専攻	森林情報学特論Ⅱ	芝	Ⅱ114	修士 1，2 回生	後期	2
		森林育成学特論Ⅱ	安藤，柴田	Ⅱ116	修士 1，2 回生	後期	2
		森林情報学専攻演習	竹内，芝，中島，西村，坂野上	Ⅱ207	修士 1，2 回生	通年	8
		森林育成学専攻演習	安藤，柴田，徳地，嵜元	Ⅱ208	修士 1，2 回生	通年	8
		森林情報学専攻実験	竹内，芝，中島，西村	Ⅱ307	修士 1，2 回生	通年	10
		森林育成学専攻実験	安藤，柴田，徳地，嵜元	Ⅱ308	修士 1，2 回生	通年	10
	応用生物科学専攻	海洋生物増殖学特論	田中	Ⅳ215	修士 1 回生	前期	2
		海洋資源生物学特論	田川	Ⅳ216	修士 1，2 回生	後期	2
		海洋資源生物学演習	田中，田川，中山	Ⅳ307	修士 1，2 回生	通年	6
		里海生態保全学演習	山下，益田	Ⅳ317	修士 1，2 回生	通年	6
		海洋資源生物学専攻実験	田中，田川，中山	Ⅳ407	修士 1，2 回生	通年	12
		里海生態保全学専攻実験	山下，益田	Ⅳ418	修士 1，2 回生	通年	12
理学部	生物科学系	海洋生物学	白山	2705	2 回生	前期	2
		無脊椎動物学	白山，久保田，宮崎	2708	2 回生	後期	2
		臨海実習第 1 部	白山，久保田，宮崎，大和，深見	2733	2 回生	夏期集中	2
		臨海実習第 2 部	白山，久保田，宮崎，大和，深見	3767	3 回生	春期集中	2
		臨海実習第 3 部	白山，久保田，宮崎，大和，深見ほか	3768	3 回生	春期集中	2
		臨海実習第 4 部	白山，久保田，宮崎，大和，深見	3769	3 回生	夏期集中	2
		海洋生物学（課題研究）	白山，久保田，宮崎，大和，深見	5707	卒業研究科目	通年	12
		公開臨海実習（夏期）	白山，久保田，宮崎，大和，深見	－	2 回生以上	夏期集中	2
		公開臨海実習（春期）	白山，久保田，宮崎，大和，深見	－	2 回生以上	春期集中	2
理学研究科	生物科学専攻動物学系	動物系統解析論 A	白山，久保田，宮崎，大和，深見	M011	修士 1，2 回生選択	前期	2
		動物系統解析論 B	白山，久保田，宮崎，大和，深見	M012	修士 1，2 回生選択	後期	2
		海洋生物特性論	白山，久保田，宮崎，大和，深見	M121	修士 1，2 回生選択	前期	2
		海洋生物学ゼミナール A	白山，久保田，宮崎，大和，深見	M560	修士 1，2 回生必修	前期	2
		海洋生物学ゼミナール B	白山，久保田，宮崎，大和，深見	M561	修士 1，2 回生必修	後期	2
		海洋生物学ゼミナール	白山，久保田，宮崎，大和，深見		博士後期	通年	－
地球環境学堂	景観生態保全論分野	景観生態保全論	柴田ほか	3217	修士 1，2 回生	前期	1
		里山再生論	柴田	3507	修士 1，2 回生	後期集中	1
		環境マネジメントセミナー	柴田ほか	3002	修士 1，2 回生	前期集中	2
		里域植生保全論	梅本	3563	修士，博士	前期集中	2

4. 資 料

（1）職員配置表

平成 18 年 3 月 31 日現在

区　分	教　授	助教授	講　師	助　手	事務職員	技術職員	非常勤職員
流動分野研究室	（センター長） 田中　　克	田川　正朋 柴田　昌三		中山　耕至	黒河七菜子 藤井　あや 植田　晶子 中野　泰美		
事務部					（専門員） 灰方　之則		山本みゆき
企画情報室	（企画情報室長） 竹内　典之					○境　慎二朗 △柴田　泰征 橋田理也子 中村はる奈	
図書室					青合　　薫		
芦生研究林		（研究林長） 芝　　正己			（掛長） 長野　　敏 （主任） 登尾まゆみ	○林　　英夫 △大牧　治夫 (休)△紺野　絡 淺野　善和 大橋　健太 柳本　　順 岡部　芳彦 伊藤　雅敏	中野　初子 中野はるみ 山口サト子
北海道研究林		（研究林長） 安藤　　信			（掛長） 川合　　忍 （主任） 山下　敦子 （主任） 田中　隆司	［標茶区］ ○山内　隆之 △佐藤　修一 △長谷川　孝 ［白糠区］ △古本　浩望 △渡邊　康弘	川村由紀枝 谷口多見子
和歌山研究林		☆（研究林長） 徳地　直子		☆ 坂野上なお		○藤井　弘明 上西　久哉 平井　岳志 細見　純嗣 太田　健一 松場　京子 松場　輝信	
上賀茂試験地			（試験地長） 中島　　皇	嵜元　道徳		○中根　勇雄 黒田　眞人 中川　智之 荒井　　亮	奥田　綱正 北村伊都子
徳山試験地	☆（試験地長） 竹内　典之					△秋田　　豊	近森　道子 藤井美喜子
北白川試験地			（試験地長） 西村　和雄			◎光枝　和夫 馬渡　和則 柳　　直文 向　　昌宏 鬼塚　恵美	奥田　綱正 北村伊都子 木ノ瀬康子
紀伊大島実験所	（実験所長） 梅本　信也					村井みゆき	
舞鶴水産実験所	（実験所長） 山下　　洋	益田　玲爾		上野　正博 中西　麻美 甲斐　嘉晃	（主任） 松尾　壽雄	○佐藤　一夫 △志賀　生実	亀井まり子 松尾　春美 荻野　文代 藤原　早苗
瀬戸臨海実験所	（実験所長） 白山　義久	久保田　信	宮﨑　勝己	大和　茂之 深見　裕伸	（掛長） 深尾　秀正 （主任） 谷坂美和子 （主任） 原田　晶夫 井上　雅義	○山本　善万 △山本　泰司 △太田　　満 △津越　健一 興田喜久男	興田　道子 杉野　晴美 加藤　哲哉 津島由紀子

☆勤務地京都　　◎技術長　○技術班長　△技術主任

（2）常設委員会名称及び委員一覧

平成 17 年 4 月 1 日現在

〈教授が担う委員会〉

将来構想企画委員会	田中・竹内・白山・山下
教育研究評価委員会	〃
施設・設備整備委員会	〃

〈教授が当面委員長を務める委員会〉

教育プログラム委員会	○山下・徳地・田川・西村・中島・宮崎
研究プログラム委員会	○白山・安藤・芝・梅本・益田
広報委員会	○竹内・久保田・梅本・嵜元・甲斐・境

〈助教授・講師・助手が委員長を務める委員会〉

施設・設備整備委員会ワーキンググループ	
遠隔講義システム等整備 WG	○芝・宮崎・安藤・坂野上・上野
連携棟新営 WG	○柴田・久保田・田川・中西・竹内
社会連携委員会	○梅本・西村・中島・益田・大和
国際委員会	○益田・柴田・中西・深見
労働安全衛生委員会	○徳地・坂野上・甲斐・大和・竹内
情報セキュリティー委員会	○上野・中山・田中・金子

（○は，委員長）

（3）新聞記事等一覧（2005 年度）

センターに関する記事

分類	年	月	日	曜日	掲載面	掲載紙	内容・キーワード等	タイトル	サブタイトル
新聞	2005	4	1	金	4 面	紀伊民報	古座川プロジェクト関連記事	京大の 2 実験所　古座川を水質調査	「清流古座川」を取り戻す会協力
新聞	2005	4	13	火	4 面	紀伊民報	古座川プロジェクト関連記事	古座川の水質を調査	京大と取り戻す会が合同で
新聞	2005	4	14	木	夕 8 面	京都新聞	j. Pod（北白川）関連記事	間伐材生かした新工法建物開発　町屋と並べ都市と自然調和へ	低コスト組み合わせ自由　京大構内に完成
新聞	2005	4	14	木	夕 12 面	産経新聞	j. Pod（北白川）関連記事	戸建て，仮設など加工自在　木造プレハブユニット開発	工期短縮，震度 7 も大丈夫　京大研究センター
新聞	2005	4	14	水	9 面	紀伊民報	白浜水族館関連記事	解説ツアーに 238 人	白浜町の京大水族館　春休み特別イベント
新聞	2005	4	15	金	朝 27 面	フジサンケイビジネスアイ	j. Pod（北白川）関連記事	木造建築　京大が新工法共同開発	耐震性優れ，コスト安く
新聞	2005	4	15	金	朝 35 面	日本経済新聞	j. Pod（北白川）関連記事	耐震性優れた木造建築	京大と鴻池組　木枠並べ工期短く
新聞	2005	4	15	金	8 面	赤旗新聞	j. Pod（北白川）関連記事	地震に強く安い木造工法	京大など開発
新聞	2005	4	16	土	朝 24 面	朝日新聞	j. Pod（北白川）関連記事	京大と民間 4 社開発　木枠並べ耐震建築　国産材使用で林業活性化へ	組み合わせで広さ自在　大学で公開中
新聞	2005	4	18	月	朝 22 面	日刊工業新聞	j. Pod（北白川）関連記事	優れた耐震性の木造建築　人工林再生にも期待	京大などが工法開発
新聞	2005	4	18	月		日本産業新聞	j. Pod（北白川）関連記事	間伐材使い耐震性－京大が鴻池組などと木造新工法	
新聞	2005	4	20	水	朝 24 面	毎日新聞	j. Pod（北白川）関連記事	京大大学院　新木造工法を開発　間伐材使い低コスト，高い耐震性	小林教授ら構内にモデルハウス
新聞	2005	4	22	金	1 面	舞鶴市民新聞	舞鶴水産実験所関連記事	稀少種“サケガシラ”浅瀬に迷い込む	標本にして生態解明へ　謎の深海魚　貴重な研究資料
新聞	2005	4	28	木	朝 27 面	京都新聞	芦生研究林関連記事	美山でハイキング　芦生の森の魅力満喫	
新聞	2005	5	5	木	朝 21 面	毎日新聞	j. Pod（和歌山）関連記事	新工法で木造建築　耐震性抜群，低コスト「j. Pod」	林業復活と木の文化再生目指し　清水の京大研究林に完成
新聞	2005	5	11	水	朝 23 面	京都新聞	芦生研究林関連記事	芦生研究林の魅力再発見	美山　21 日から交流集会
新聞	2005	5	13	金	朝 25 面	高知新聞	高知シンポジウム関連記事	自然再生の道探ろう　森，川，海の循環学ぶ	400 人がシンポ　須崎市
新聞	2005	5	16	月	1・3 面	京都大学新聞	j. Pod（北白川）関連記事	北部構内に謎の建築物出現？　正体は新しい建築モデル「j. Pod」	「j. Pod」の挑戦～森と都市とをつなぐ～
新聞	2005	5	19	木	朝 26 面	読売新聞	j. Pod（北白川）関連記事	耐震優　木造プレハブ	京大　鴻池組が共同開発　安価，仮設にぴったり
新聞	2005	5	20	金	2 面	京大学生新聞	j. Pod（北白川）関連記事	間伐材を用いた「j. Pod」	耐震・耐火性も強化　新たな「木の文化」再生へ
新聞	2005	5	30	月	3 面	宇部日報	ANA 植林活動関連記事	「青空」に向かって大きく育て	阿知須町自然観察公園　ANA が環境事業でグミ 200 本
新聞	2005	5	30	月	朝 28 面	北海道新聞	ANA 植林活動関連記事	湿原と漁業資源　豊かな森で守れ	全日空，町民ら植樹
新聞	2005	6	1	水	朝 15 面	釧路新聞	ANA 植林活動関連記事	豊かな緑と魚のリバーサイド　コッタロ湿原の分収林で植樹活動	「私の青空 釧路空港・標茶湿原の森」全日空グループなど加わり
新聞	2005	6	14	火	朝 20 面	高知新聞	センター関連記事	京大で自然との共存講義	
新聞	2005	6	18	土	朝 27 面	京都新聞	芦生研究林「公開講座」関連記事	人と森の歴史学ぼう	来月 28 日から公開講座　美山の京大芦生研究林で
新聞	2005	6	20	月	朝 12 面	産経新聞	芦生研究林「公開講座」関連記事	京大フィールド科学教育研究センター公開講座 2005	
新聞	2005	6	28	火	朝 25 面	毎日新聞	芦生研究林「公開講座」関連記事	由良川源流域に広がる原生林“教材”に	森の昔と今　そして　未来　京大が公開講座　美山の芦生研究林で
新聞	2005	7	19	火	夕 10 面	京都新聞	センター・エコカフェの調印式関連記事	京都大フィールド科学教育研究センター　東京の NPO 法人と　環境教育で協定	由良川など情報発信へ
新聞	2005	7	20	水	朝 35 面	日本経済新聞	センター・エコカフェの調印式関連記事	絶滅危惧種の保存で協定	京大フィールド研，NPO と
新聞	2005	7	20	水	朝 24 面	産経新聞	センター・エコカフェの調印式関連記事	京大フィールド研　NPO 法人と協定	環境向けプログラム開発へ
新聞	2005	7	22	金	4 面	紀伊民報	古座川プロジェクト関連記事	水生生物の捕獲方法学ぶ	古座川で京大生ら
新聞	2005	7	24	日	朝 30 面	中日新聞	古座川プロジェクト関連記事	アユ群れる清流取り戻そう　和歌山県・古座川	森・川・里・海のつながり探る
新聞	2005	7	27	水	朝 37 面	日刊工業新聞	センター・エコカフェの調印式関連記事	京大と NPO が連携	生物保全の市民参加研究で
新聞	2005	7	31	日	朝 30 面	中日新聞	古座川プロジェクト関連記事	暮らしに残る“知恵”生かす「清流古座川をとりもどす会」	動植物を合理的に利用
新聞	2005	8	10	水	朝 12 面	釧路新聞	北海道研究林関連記事	木工品作りに挑戦	標茶で教室
新聞	2005	8	17	水		高知新聞	仁淀川シンポジウム関連記事	20 日　仁淀川シンポ	清流再生へ　利きアユ大会も　土佐市
新聞	2005	8	21	日	朝 27 面	高知新聞	仁淀川シンポジウム関連記事	「仁淀川再生」を探る　漁業，農業関係者一堂に	土佐市でシンポ
新聞	2005	8	22	月		高知新聞	仁淀川シンポジウム関連記事	連携の力	
新聞	2005	8	29	月	夕 14 面	日本経済新聞	上賀茂試験地「COE セミナー」関連記事	京大で「昆虫科学とフィールド研究」シンポ	
新聞	2005	9	1	木	朝 28 面	高知新聞	仁淀川シンポジウム関連記事	特別番組「天然アユは生き残れるか」	高知放送ラジオ　4 日正午
新聞	2005	9	4	日	朝 27 面	京都新聞	第 1 回　由良川フォーラム関連記事	美しい川いつまでも　エコネット形成へ連携	綾部で由良川フォーラム　市民らが活動報告
新聞	2005	9	5	月	2 面	あやべ市民新聞	第 1 回　由良川フォーラム関連記事	由良川流域の環境問題考えよう！	第 1 回「由良川フォーラム」開催
新聞	2005	9	9	金	朝 22 面	京都新聞	芦生研究林「ナラ枯れ」関連記事	ナラ類　害虫被害深刻	目立つ立ち枯れ　無伐採　繁殖の温床に
新聞	2005	9	18	月		朝日新聞	古座川プロジェクト関連記事	古座川の清流復活へ	京大や地元が合同調査
新聞	2005	9	21	水		高知新聞	横浪林海実験所「チャリティー・トーク＆ライブ」関連記事	「林海実験所」ライブで支援　南こうせつさん　ニコルさんらとトークも	来月 21 日に須崎市
新聞	2005	9	22	木	7 面	南紀州新聞	古座川プロジェクト関連記事	清流取り戻す第一歩　京大ら古座川流域合同調査	地元の参加歓迎
新聞	2005	10	6	木		紀伊民報	古座川プロジェクト関連記事	生活排水も汚濁要因	古座川で 2 回目の水質調査
新聞	2005	10	7	金	1 面	舞鶴市民新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	国際異体類生態学シンポ　23 日には市民公開講演会	市商工観光センターで　21～25 日
新聞	2005	10	12	水	6 面	読売ファミリー（京滋版）	上賀茂試験地「自然観察会」関連記事	自然観察会	
新聞	2005	10	13	木	朝 27 面	京都新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	異体類生態学考える　日本初　国際シンポ	舞鶴で 21 日から 5 日間　ヒラメやカレイ…栽培漁業など研究発表
新聞	2005	10	13	木	7 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	京大が「市民公開講演会」国際シンポジウムに併せ	23 日，舞鶴商工観光センターで
新聞	2005	10	13	木		朝日新聞	横浪林海実験所「チャリティー・トーク＆ライブ」関連記事	林海実験所支援へ催し	21 日に須崎でトークとライブ
新聞	2005	10	14	金	朝 26 面	朝日新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	海と人との共存　舞鶴で 23 日講演	
新聞	2005	10	14	金	朝 28 面	高知新聞	横浪林海実験所「チャリティー・トーク＆ライブ」関連記事	考えよう「地球益」小さな力が世を動かす　拳上げなくていい	南こうせつさん　21 日須崎市でライブ

新聞	2005	10	14	金	朝 30 面	朝日新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	ヒラメやカレイの生態研究　発表　舞鶴で「国際異体類シンポ」	海と人の共存めぐり　23 日市民公開講演会
新聞	2005	10	15	土	夕 1 面	読売新聞	舞鶴水産実験所関連記事	逃げるエチゼン	若狭湾　魚がついばむ
新聞	2005	10	16	日	朝 23 面	毎日新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	ヒラメ・カレイなど「異体類」国内外の研究者 140 人集い最新の成果を紹介	21～25 日　舞鶴で　国際生態学シンポ
新聞	2005	10	18	火	朝 10 面	京都新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	国際異体類生態学シンポ・市民公開講演会	
新聞	2005	10	22	土	朝 22 面	京都新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	23 カ国研究者　海環境考える	舞鶴で異体類生態学シンポ
新聞	2005	10	22	土	朝 25 面	産経新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	ヒラメ・カレイ類　研究者一堂に	舞鶴で国際シンポ開幕
新聞	2005	10	23	日	朝 26 面	高知新聞	横浪林海実験所「チャリティー・トーク＆ライブ」関連記事	森や海を大切に　須崎市　観客と一緒に熱唱も	南こうせつさんらがトーク＆ライブ
新聞	2005	10	23	日	朝 26 面	高知新聞	ANA 植林活動関連記事	ANA 社員ら間伐に汗	仁淀川町で森林整備
新聞	2005	10	23	日	朝 23 面	毎日新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	外国人研究者ら舞鶴の秋を堪能	シンポ参加者「抹茶，思ったより苦くない」
新聞	2005	10	23	日	朝 27 面	京都新聞	第 6 回国際異体類生態学シンポジウム関連記事	禅宗の作法，茶道で体験　舞鶴	シンポ参加者の外国人研究者　日本文化学ぶ
新聞	2005	10	25	火	13 面	釧路新聞	北海道研究林関連記事	「しべちゃアドベンチャースクール」第 5 講が開講	森林の役割など学ぶ　受講者ら林道散策やまつりに参加
新聞	2005	12	10	土	15 面	Living 京都	第 2 回時計台対話集会関連記事	「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」第 2 回時計台対話集会	
新聞	2005	12	13	火	夕 13 面	日本経済新聞	第 2 回時計台対話集会関連記事	「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」	
新聞	2005	12	16	金	朝 25 面	京都新聞	第 2 回時計台対話集会関連記事	ニコル氏らと対話集会開催	18 日に京大
新聞	2005	12	16	金	朝 26 面	産経新聞	第 2 回時計台対話集会関連記事	森，川，海を考える	京大フィールド科研　18 日に対話集会
新聞	2006	1	12	木	朝 25 面	京都新聞	j. Pod 関連記事	京大，知財を活用	
新聞	2006	1	18	水	夕 9 面	朝日新聞	センター関連記事	森は海の恋人	
新聞	2006	2	1	水	朝 27 面	毎日新聞	舞鶴水産実験所関連記事	京都府・舞鶴沖で大物のイセエビ	
新聞	2006	2	3	金	1 面	舞鶴市民新聞	舞鶴水産実験所関連記事	刺し網に大物のイセエビ　白杉沖	全長 30 センチ　日本海側で珍しく捕獲される
新聞	2006	2	6	月	夕 9 面	京都新聞	舞鶴水産実験所関連記事	伊勢エビ	
新聞	2006	2	24	金	朝 27 面	高知新聞	横浪林海実験所関連記事	「林海研」スタートへ　旧横浪こどもの森（須崎市）	京大，高知大，県，池ノ浦漁協　4 者が協定書調印
新聞	2006	2	25	土	朝 32 面	読売新聞	上賀茂試験地「自然観察会」関連記事	4 月 22 日に自然観察会	
新聞	2006	3	8	水	4 面	読売ファミリー（京滋版）	上賀茂試験地「自然観察会」関連記事	京都大学上賀茂試験地春の一般公開自然観察会	
新聞	2006	3	21	火	1 面	紀伊民報	白浜水族館関連記事	泳ぐウミウシ　ヤマトメリベ展示	京大白浜水族館
紀要・雑誌等	2005	5			No. 601	京大広報	社会連携教授関連記事	畠山重篤氏，C. W. ニコル氏を“社会連携教授”に迎える	
紀要・雑誌等	2005	6	16	木	Vol. 17 No. 12	サライ	芦生研究林「公開講座」関連記事	山間に巨樹聳える森が残る，京都近郊の濃密な自然	芦生研究林　深い森を抜け出た杉尾峠から，若狭湾を望む
紀要・雑誌等	2005	6			6 月号	蛍雪時代	舞鶴水産実験所関連記事	サイエンスキャンプで先端研究を実体験	大学・研究機関で研究者と出会える 2 泊 3 日
紀要・雑誌等	2005	6			No. 602	京大広報	高知シンポジウム関連記事	シンポジウム「21 世紀に森・川・海が再生するために」を開催	
紀要・雑誌等	2005	6			No. 602	京大広報	芦生研究林「公開講座」関連記事	森のしくみとその役割	－森にくらして－
紀要・雑誌等	2005	7			No. 603	京大広報	j. Pod 関連記事	木の文化再生をめざした j. Pod 木造建物の完成	
紀要・雑誌等	2005	8	17	水	1・8 面	coop 教職員情報　No. 43	芦生研究林関連記事	芦生研究林へ行きます　10 月 22 日（土）	
紀要・雑誌等	2006	2			No. 609	京大広報	第 2 回時計台対話集会関連記事	フィールド科学教育研究センター時計台対話集会	「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」を開催
紀要・雑誌等	2006	3			No. 441	ANA グループ機内誌「翼の王国」	センター関連記事	日本の人工林	
紀要・雑誌等	2006	3				共同教育通信 vol. 6 2006SPRING	センター関連記事	研究施設紹介　フィールド科学教育研究センター	重要施設の紹介　森里海連環学実習
紀要・雑誌等	2006	3			No. 610	京大広報	上賀茂試験地「自然観察会」関連記事	上賀茂試験地　春の一般公開　自然観察会	
紀要・雑誌等	2006					水辺環境教室　特集号	瀬戸臨海実験所関連記事	白浜は宝の国！	一人一人が一種の生き物の一生を調べてみよう

教職員に関する記事

分類	年	月	日	曜日	掲載面	掲載紙	内容・キーワード等	タイトル	サブタイトル
新聞	2005	6	5	日	朝 4 面	河北新報	田中克教授関連記事	守ろう森と海の循環　気仙沼で公開シンポ	環境と食を考える　市民ら 200 人参加　5 氏がパネル討論
新聞	2005	6	9	木	朝 23 面	河北新報	田中克教授関連記事	食料問題　解決策探る	21 世紀の環境・経済・文明シンポ詳報㊤
新聞	2005	6	10	金	朝 29 面	河北新報	田中克教授関連記事	食と自然の共生を　横断的視点養う必要	21 世紀の環境・経済・文明シンポ詳報㊦
新聞	2005	6	25	土		南紀州新聞	田中克教授関連記事	古座川から日本再生	森里海を地域と共に研究　京都大学　南紀の自然が舞台
新聞	2005	7	6	水	朝 22 面	毎日新聞	田中克教授関連記事	京 ECO セミナー第 15 回「森里海のつながりから木文化再生へ」	
紀要・雑誌等	2005	10			vol. 42 No. 1	京都大学図書館機構報 静脩	田中克教授関連記事	心に森を築く一冊の本	
新聞	2005	4	6	水	5 面	紀伊民報	白山義久教授，久保田信助教授，加藤哲哉氏関連記事	白山教授（京大）らが執筆指導	子供向けの図鑑「水の生物」
新聞	2005	4	10	日	朝 23 面	京都新聞	白山義久教授関連記事	二酸化炭素排出量減を	NPO 法人　事務所設立でシンポ　東山
新聞	2006	1	25	水	10 面	紀伊民報	白山義久教授関連記事	自然の大切さ学ぶ	会津川で水質調査　田商が三栖小，高雄中と
紀要・雑誌等	2005	5			15 号	ECOSOPHIA エコソフィア	白山義久教授関連記事	ナチュラル・ヒストリーの拠点	京都大学・瀬戸臨海実験所
新聞	2006	3	26	日	朝 9 面	朝日新聞	山下洋教授関連記事	「川ガキ・海ガキ」養成を	救え真珠の海
紀要・雑誌等	2005	5			15 号	ECOSOPHIA エコソフィア	山下洋教授関連記事	もり・さと・うみの連環学へ	京都大学・フィールド科学教育研究センター
新聞	2005	6	2	木	1 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	春の使者，いまだ健在	田辺湾のアメフラシ
新聞	2005	6	3	金	13 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	竜宮城へ行けるかな？	岩に挟まったウミガメ救助　白浜町鴨居
新聞	2005	6	8	水	11 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	漂着アカクラゲに注意	素手で触らないで！
新聞	2005	6	24	金		紀伊民報	久保田信助教授関連記事	ミズナギドリ受難	漂着相次ぎ，保護も　白浜町臨海
新聞	2005	6	25	土		紀伊民報	久保田信助教授，田名瀬英朋氏関連記事	長～い　1.3 メートル　オキザヨリ	イカ狙いの男性釣る
新聞	2005	6	25	土		紀伊民報	久保田信助教授関連記事	会報を発行	南紀生物同好会
新聞	2005	6	28	火		紀伊民報	久保田信助教授関連記事	“不老不死”神秘に迫る	久保田京大助教授　ベニクラゲの本出版　7 月 3 日，記念講演

新聞	2005	7	5	火	11 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	ベニクラゲの本　出版記念「若返る」神秘の生き物	久保田・京大助教授が講演
新聞	2005	7	20	水	夕 1 面	京都新聞	久保田信助教授関連記事	“不老不死”だよ　ベニクラゲ音頭	京大助教授　研究成果出版　自ら歌い CD も
新聞	2005	7	20	水	1 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	「宝の海」に異変⁉　白浜町臨海沿岸	サンゴの群落死滅　冬の低水温と台風影響か？
新聞	2005	8	9	火	10 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	「豊富な生物，貴重な場所」	全国の生物教員ら　天神崎を観察
新聞	2005	8	16	火	25 面	京都新聞	久保田信助教授関連記事	白浜のサンゴ大量死　生態系変異心配も　京大助教授調査	黒潮変化で水温低下　昨年台風時，砂で窒息
新聞	2005	8	24	水	1 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	天神崎でサンゴが悲鳴「臨海沿岸（白浜町）より深刻」	京大・久保田助教授が調査　低水温と台風で死滅
新聞	2005	8	26	金	朝 1 面	毎日新聞	久保田信助教授関連記事	海でも森林破壊	和歌山・田辺湾
新聞	2005	9	1	木		紀伊民報	久保田信助教授関連記事	久保田・京大助教授　世界初の確認　胃と唇からよみがえり	不老不死のベニクラゲ「定説覆す発見」
新聞	2005	9	6	火	11 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	田辺湾口にムール貝着生　京大・久保田助教授が初確認	台風で内湾性環境に？　在来種への影響懸念
新聞	2005	9	13	火	朝 27 面	産経新聞	久保田信助教授関連記事	「口柄」退化せず若返り	京大・久保田助教授　ベニクラゲで新発見
新聞	2005	9	17	土	14 面	紀伊民報	久保田信助教授，田名瀬英朋氏関連記事	台風に連れられて？	白浜町　アメフラシ出現
新聞	2005	10	2	日	朝 28 面	読売新聞	久保田信助教授関連記事	宝の海に魅せられて	「毎日が期待でいっぱい」フィールドワークに没頭
新聞	2005	10	16	日	9 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	ベニクラゲ　若返り途中を確認	白浜の京大実験所　愛好家ら実験
新聞	2005	10	30	日		紀伊民報	久保田信助教授関連記事	ベニクラゲ　日本産は 2 種類	京大・久保田助教授ら発見　繁殖方法に違い
新聞	2005	11	6	日	1 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	エチゼンクラゲ　ついに田辺湾も出現	黒潮乗ってやって来た「今後流れ着くかも」と警戒
新聞	2005	11	8	火	9 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	ベニクラゲを説明	田辺高　久保田さん（京大）が講義
新聞	2005	11	26	土		紀伊民報	久保田信助教授関連記事	5 日間の職場体験	白浜中 2 年生　水族館や病院など
新聞	2005	12	1	木	4 面	京都大学新聞	久保田信助教授関連記事	IIO・ロームフェア開催	子供テクノ・サイエンス教室　見て聞く楽しい科学
新聞	2005	12	16	金	3 面	京都大学新聞	久保田信助教授関連記事	「神秘のベニクラゲに不老不死の夢を託す」	若返り現象が持つ生命の神秘
新聞	2005	12	17	土	夕 6 面	読売新聞	久保田信助教授関連記事	クラゲの若返り観察	化粧品など応用期待
新聞	2005	12	29	木	1 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事	謎の「ヒクラゲ」	白浜で捕獲　刺されると激痛
新聞	2005	4	5	火	25 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「おもしろ海洋生物」15	「胴甲動物」	トゲと鎧サボテンのよう　深海の砂粒の間に生息
新聞	2005	4	12	火		紀伊民報	久保田信助教授関連記事「おもしろ海洋生物」16	「腹毛動物」	水底をすべるように移動　寿命 10 数日　性転換の種も
新聞	2005	4	19	火	27 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「おもしろ海洋生物」17	「輪形動物」	圧倒的に優位なメス「単為生殖」で子孫を残す
新聞	2005	4	26	火	25 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「おもしろ海洋生物」18	「類線形動物」	貝や虫に寄生して成長　細長いひものような体
新聞	2005	5	10	火	25 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「おもしろ海洋生物」19	「コウトウチュウ類」	「寄生」ばかりの一生　殻に包まれ「宿主」探し
新聞	2005	5	17	火	25 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「おもしろ海洋生物」20	「鰓曳動物」	生態不明“海ミミズ”尾っぽにエラに似た付属器
新聞	2005	5	24	火	27 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「おもしろ海洋生物」21	「有輪動物」	エビの食べ残しを“拝借”ヒゲの周辺でクローン繁殖
新聞	2005	4	5	火	7 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」67	「凍死打ち上がる熱帯魚たち」	珍魚オナガウツボなども
新聞	2005	4	12	火	7 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」68	「カワウの休憩所観察から」	共存考えた自然保護必要
新聞	2005	4	19	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」69	「珍しいツボダイやホウキムシ発見」	高校生 40 人が臨海実習
新聞	2005	4	26	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」70	「垣間見たプランクトンの世界」	大学生の公開臨海実習
新聞	2005	5	10	火	7 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」71	「珍種カギノテクラゲと白アメフラシ」	岸壁の動物たちに出会って
新聞	2005	5	17	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」72	「乾燥苦手なフナムシ」	実験所内へのまれな出現
新聞	2005	5	31	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」73	「軟体動物の季節①」	後鰓類とヒョウモンダコ
新聞	2005	6	7	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」74	「軟体動物の季節②」	様々な後鰓類の産卵
新聞	2005	6	14	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」75	「新入生の臨海実習」	神秘の世界に触れる
新聞	2005	6	21	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」76	「軟体動物の季節③」	アメフラシの至福と受難
新聞	2005	6	28	火	7 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」77	「珍しいツノガイなど 3 種」	台風 4 号の置きみやげ
新聞	2005	7	5	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」78	「番所崎などでの漂着と事故」	鳥と亀の受難
新聞	2005	7	12	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」79	「マガキガイの生態」	ナガミル付けて漂着
新聞	2005	7	19	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」80	「釣り上げられた巨大オキザヨリ，白良浜へ漂着したアカウミガメ」	怪魚とウミガメ
新聞	2005	7	26	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」81	「アラレタマキビ大集合」	陸と海の間で食事会
新聞	2005	8	2	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」82	「大阪市立大の臨海実習」	ベントスやプラクトンの系統分類
新聞	2005	8	9	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」83	「社会人実習で出合った生物」	アオリイカの卵塊発見
新聞	2005	8	23	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」84	「神秘のベニクラゲの著書と CD 出版」	記念講演とコンサートにわく
新聞	2005	8	30	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」85	「膳所高校の実習」	磯・水族館・顕微鏡で観察
新聞	2005	9	6	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」86	「ウキ持つ変わり種の巻貝」	アサガオガイが多数漂着
新聞	2005	9	13	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」87	「漂着したさまざまなタネ」	風波に乗って散布
新聞	2005	9	20	火	7 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」88	「ベニクラゲの謎深まる」	世界初　唇と胃から若返り
新聞	2005	9	27	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」89	「アメフラシやイザリウオの卵塊」	希少生物相次ぐ出現
新聞	2005	10	4	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」90	「“うそ目玉”持つチョウチョウウオ類」	熱帯魚の幼魚出現
新聞	2005	10	18	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」91	「浮遊生活する無脊椎動物の幼生」	ミクロな仲間たち
新聞	2005	10	25	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」92	「田辺湾口のサンゴが死んだ理由」	台風襲来に低水温が追い打ち
新聞	2005	11	8	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」93	「クラゲメーリングリストのオフ会」	ベニクラゲ若返りに歓喜の声
新聞	2005	11	15	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」94	「田辺湾にエチゼンクラゲ」	世紀の珍事にびっくり
新聞	2005	11	22	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」95	「海洋生物歌う会で講師」	豊潮丸で最後の航海
新聞	2005	11	29	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」96	「『しらすな』でベニクラゲ展」	田辺高校の実習と授業
新聞	2005	12	6	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」97	「ベニクラゲの教育，研究，広報」	中学生が貝分類に挑戦

新聞	2005	12	13	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」98	「生物分類学習に優れた素材」	北浜はタカラガイの宝庫
新聞	2005	12	20	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」99	「白浜は化石の宝庫」	1600 万年前の証人たち
新聞	2005	12	27	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「宝の海から」100	「100 回記念 SF 小説第 3 弾」	日本人だけに効くベニクラゲ　若返りパワーの秘密
新聞	2006	1	10	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」1	サリネラ（胞胚様動物門）	教科書にない不思議動物
新聞	2006	1	17	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」2	センモウアメーバヒラムシ（平板動物門）	最も下等な多細胞動物
新聞	2006	1	24	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」3	ニハイチュウ（菱形動物門）	奇妙な子孫づくりの寄生虫
新聞	2006	1	31	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」4	チョクユウチュウ（直遊動物門）	多様な動物に潜む“中生動物”
新聞	2006	2	7	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」5	カイメン（海綿動物門）	すりつぶしても再生
新聞	2006	2	21	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」6	クラゲ，サンゴ，イソギンチャク（刺胞動物門）	毒針持つ“胃袋動物”
新聞	2006	2	28	火	8 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」7	クシクラゲ（有櫛動物門）	クラゲ食らうクラゲ
新聞	2006	3	7	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」8	プラナリア（扁形動物門）	裂かれても不死身
新聞	2006	3	14	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」9	顎口動物門	大きな顎持つ左右相称動物
新聞	2006	3	21	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」10	クリゲヒモムシ（紐形動物門）	初めて肛門持った左右相称動物
新聞	2006	3	28	火	5 面	紀伊民報	久保田信助教授関連記事「地球の住民たち　動物編」11	センチュウ（線形動物門）	全ゲノム解読の実験動物
紀要・雑誌等	2005	9	16	金	8 面	coop　教職員情報 No. 44	久保田信助教授関連記事「瀬戸臨海実験所通信」第 1 回	風光明媚で水族館や実験所の島もあって	
紀要・雑誌等	2005	10	17	月	8 面	coop　教職員情報 No. 45	久保田信助教授関連記事「瀬戸臨海実験所通信」第 2 回	台風の贈り物	
紀要・雑誌等	2005	11	15	火	8 面	coop　教職員情報 No. 46	久保田信助教授関連記事「瀬戸臨海実験所通信」第 3 回	あでやかな熱帯系チョウチョウウオ	
紀要・雑誌等	2005	12	15	木	8 面	coop　教職員情報 No. 47	久保田信助教授関連記事「瀬戸臨海実験所通信」第 4 回	エチゼンクラゲ，和歌山県田辺湾に世紀の初出現	
紀要・雑誌等	2006	1	16	月	6 面	coop　教職員情報 No. 48	久保田信助教授関連記事「瀬戸臨海実験所通信」第 5 回	またもや巨大クラゲ出現	ヒクラゲは，どこで生まれどう育っているのか?!
紀要・雑誌等	2006	2	16	木	8 面	coop　教職員情報 No. 49	久保田信助教授関連記事「瀬戸臨海実験所通信」第 6 回	世界の動物 144 万種はたったの 40 門に分類！	瀬戸臨海実験所水族館で動物門を観察しよう
紀要・雑誌等	2005	10				共通教育通信 vol. 5 2005AUTUMN	久保田信助教授関連記事	「－ポケット・ゼミ－海岸生物の生活史」	南紀白浜所在の瀬戸臨海実験所で開催
紀要・雑誌等	2006	1	16	月	3 面	coop　教職員情報 No. 48	久保田信助教授関連記事	サロントークでベニクラゲの歌	
紀要・雑誌等	2005	4			4 月号	グリーン・エイジ	柴田昌三助教授関連記事	里山の再生・竹林をどう考える	
新聞	2005	11	16	水	朝 24 面	京都新聞	田川正朋助教授関連記事	魚の赤ちゃんレンズで観察	向陽小　京大・田川助教授が授業　体形の変化に興味
新聞	2005	7	29	金	朝 29 面	京都新聞	徳地直子助教授関連記事	見て美しい竹林　散策できる里山　自然な常緑樹林	天王山周辺再生案まとまる　整備推進協　住民意見を募集
新聞	2005	8	28	日	朝 25 面	京都新聞	徳地直子助教授・柴田昌三助教授関連記事	森林整備のあり方を議論	天王山周辺推進協がシンポ　島本
新聞	2005	10	20	木	朝 28 面	京都新聞	徳地直子助教授関連記事	天王山の森林　みんなで守れ	2 府と周辺住民ら　整備推進協開催「構想」まとまる
新聞	2005	12	22	木	朝 23 面	京都新聞	徳地直子助教授関連記事	所有者へ理解を訴え　大山崎で初の説明会	天王山周辺森林整備
新聞	2005	6	14	火		舞鶴市民新聞	益田玲爾助教授関連記事	海の中の四季，生態系学ぶ	SPP 指定　西高で　研究者招き課外講座
紀要・雑誌等	2005	4	18	月	8 面	coop　教職員情報 No. 39	益田玲爾助教授関連記事「舞鶴通信」第 12 回	若狭湾温暖化の構図	ソラスズメダイ　ユウダチタカノハ　ナポレオンフィッシュ
紀要・雑誌等	2005	5			15 号	ECOSOPHIA エコソフィア	益田玲爾助教授関連記事	地域とともに歩む海の研究所	京都大学・舞鶴水産実験所
紀要・雑誌等	2005	8	17	水	1 面	coop　教職員情報 No. 43	益田玲爾助教授関連記事	海流食堂	
新聞	2005	6	7	火	朝 25 面	京都新聞	西村和雄講師関連記事	有機農業をテーマ　11 日から「環境塾」	左京
新聞	2005	4	13	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「漂流ブイ顛末」	
新聞	2005	4	27	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「珍客到来」	
新聞	2005	5	11	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「緑のダム」	
新聞	2005	5	25	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「ホンマにもう」	
新聞	2005	6	8	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「利き鮎会」	
新聞	2005	6	22	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「流れ藻」	
新聞	2005	7	13	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「魚介類」	
新聞	2005	7	27	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「ウチワカンテンカメガイ」	
新聞	2005	8	10	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「ミニ地球」	
新聞	2005	8	24	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「川遊び」	
新聞	2005	9	14	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「行ったり来たり」	
新聞	2005	9	28	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「みんなのお弁当箱」	
新聞	2005	10	26	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「骨粗鬆症？」	
新聞	2005	11	22	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「クラゲが増えるとカニが増える？」	
新聞	2005	12	21	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「ミニ温暖化」	
新聞	2006	1	25	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「日本人の足は大きい」	
新聞	2006	2	22	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「イセエビ大騒動」	
新聞	2006	3	23	水	2 面	両丹日日新聞　別冊 TOWN TOWN	上野正博助手関連記事「日本海に遊ぶ」	「海底の溝は悪者？」	
新聞	2006	1	7	土	朝 29 面	産経新聞	上野正博助手関連記事	漁業の嫌われ者エチゼンクラゲ　ズワイガニのエサ？	京大舞鶴水産実験所「同時期に増殖」
新聞	2006	2	1	水	朝 27 面	京都新聞	上野正博助手関連記事	エ!?　ビックリ　舞鶴湾で伊勢エビ	ビッグな体長 30 センチ　漁業者が捕獲
新聞	2006	1	10	火	夕 8 面	毎日新聞	深見裕伸助手関連記事	ここにも貴重サンゴ群　串本の北西 50 キロ	ダイバーらが調査，保護活動
新聞	2005	6	22	水	朝 27 面	京都新聞	甲斐嘉晃助手関連記事	日本海の魚　多様性解説	25 日に京大博物館
紀要・雑誌等	2005	5			15 号	ECOSOPHIA エコソフィア	田名瀬英朋氏関連記事	海の実験所の水族館	京都大学・白浜水族館

その他

分類	年	月	日	曜日	掲載面	掲載紙	内容・キーワード等	タイトル	サブタイトル
新聞	2005	6	29	水	朝 27 面	毎日新聞	畠山重篤氏関連記事	守れ“木の国ニッポン”	「カキ育てるのは森」
新聞	2005	10	29	土	朝 33 面	朝日新聞	C. W. ニコル氏関連記事	ニコル氏に英国勲章	
新聞	2005	10	29	土	夕 10 面	京都新聞	C. W. ニコル氏関連記事	ニコルさんに名誉大英勲章	日英関係発展に貢献
新聞	2005	11	5	土	夕 8 面	朝日新聞	C. W. ニコル氏関連記事	日英の「ちょっと太い橋」	
新聞	2006	1	6	金	夕 14 面	読売新聞	畠山重篤氏関連記事	栄養がつまった「カキ」	大昔から食用に　川と森が育てる「種」の 8 割は宮城産
新聞	2006	2	21	火	朝 2 面	毎日新聞	C. W. ニコル氏関連記事	雪の長野とさんご礁の沖縄	
新聞	2005	4	6	水	夕 13 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	笑う介党鱈	
新聞	2005	4	13	水	夕 13 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	聖ザビエルの苦笑い	
新聞	2005	4	20	水	夕 15 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	役立たず	
新聞	2005	4	27	水	夕 15 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	オーディンの使いのような男	
新聞	2005	5	11	水	夕 11 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	柞兄弟	
新聞	2005	5	18	水	夕 11 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	シスターたちの体験学習	
新聞	2005	5	25	水	夕 11 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	やまぼうし	
新聞	2005	6	1	水	夕 11 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	百日紅は語る	
新聞	2005	6	8	水	夕 11 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	ルネサンスの音色	
新聞	2005	6	15	水	夕 11 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	ナンバースクール	
新聞	2005	6	22	水	夕 11 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	もの哀しき麦秋	
新聞	2005	6	29	水	夕 11 面	日本経済新聞	畠山重篤氏関連記事	喉のトラブル二題	

分類	年	月	日	曜日	掲載面	掲載紙	内容・キーワード等	タイトル	サブタイトル
紀要・雑誌等	2005	5			15 号	ECOSOPHIA エコソフィア	畠山重篤氏関連記事	恋人からおふくろへ	森は海の恋人運動と畠山臨海学校
紀要・雑誌等	2005	6			6 月号	グリーン・エイジ	畠山重篤氏関連記事	人の心に木を植える	－森・川・海の連環「森は海の恋人」－
紀要・雑誌等	2005	7	1	金	7 月号	文藝春秋	畠山重篤氏関連記事	長靴を履いた教授さま	

（4）各施設　利用許可数一覧（2005 年度）

施　設　名	許可数	利　用　区　分			所　属　区　分		
		教　育	研　究	その他	京都大学	他 大 学	他機関等
芦 生 研 究 林	113	25	45	43	58	11	44
北 海 道 研 究 林	44	11	29	4	24	6	14
（標茶区）	(29)	(9)	(18)	(2)	(13)	(6)	(10)
（白糠区）	(15)	(2)	(11)	(2)	(11)	0	(4)
和 歌 山 研 究 林	18	7	9	2	6	3	9
上 賀 茂 試 験 地	78	27	44	7	46	12	20
北 白 川 試 験 地	31	7	24	0	31	0	0
徳 山 試 験 地	1	0	1	0	1	0	0
紀伊大島実験所	108	14	89	5	71	10	27
舞鶴水産実験所	322	38	244	40	211	39	72
瀬戸臨海実験所	213	42	164	7	50	81	82
合　計	928	171	649	108	498	162	268

（5）各施設　利用人数一覧（2005 年度）

（延人数）

施　設　名	教 育 利 用		研 究 利 用		公開講座等イベント	一般利用	合　計
	教職員等	学　　生	教職員等	学　　生			
芦 生 研 究 林	727	828	401	626	288	11,206	14,076
北 海 道 研 究 林	255	305	202	98	0	72	932
（標茶区）	(244)	(221)	(192)	(47)	(0)	(57)	(761)
（白糠区）	(11)	(84)	(10)	(51)	(0)	(15)	(171)
和 歌 山 研 究 林	304	133	248	244	0	48	977
上 賀 茂 試 験 地	475	909	707	374	97	339	2,901
北 白 川 試 験 地	29	376	142	927	0	109	1,583
徳 山 試 験 地	153	0	12	34	0	59	258
紀伊大島実験所	75	398	189	216	0	156	1,034
舞鶴水産実験所	79	823	846	2,884	401	88	5,121
瀬戸臨海実験所	355	2,033	269	520	144	58,730	62,051
計	2,452	5,805	3,016	5,923	930	70,807	88,933

（6）人事異動（2005 年度）

氏　　名	新　　職　　名	旧　　職　　名	異動年月日
深見　裕伸	瀬戸臨海実験所・助手（採用）		2005. 4. 1
灰方　之則	事務室・フィールド担当専門員	工学研究科総務課専門員	〃
川合　　忍	北海道研究林・事務掛長	財務部契約課第一契約掛長	〃
深尾　秀正	瀬戸臨海実験所・事務掛長	農学研究科等経理課用度掛主任	〃
金子はる奈	企画情報室・技術職員（採用）	企画情報室（技術補佐員）	〃
大呑　和夫	辞職	徳山試験地・技術職員	2005.11.14
向　　昌宏	北白川試験地・技術職員	紀伊大島実験所・技術職員	2006. 1. 1
林　　英夫	定年退職	芦生研究林・技術班長	2006. 3.31
松場　輝信	定年退職	和歌山研究林・技術職員	〃
登尾まゆみ	辞職	芦生研究林・事務主任	〃

京都大学フィールド科学教育研究センター 年報　第３号
平成 18 年 11 月 24 日　発行

発　行　京都大学フィールド科学教育研究センター
〒606-8502　京都市左京区北白川追分町

印　刷　株式会社　北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町38-2

Field Science Education and Research Center, Kyoto University
http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp